

●国際連合大学 2013-2014 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル市・江原道 春川市 楊口郡 高城郡・忠清北道 清州市 忠州市 丹陽郡

2014年8月26日(火) — 9月1日(月)

国際連合大学 (UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

●国際連合大学 2013-2014 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル市・江原道 春川市 楊口郡 高城郡・忠清北道 清州市 忠州市 丹陽郡

2014年8月26日(火) — 9月1日(月)

はじめに	2
韓国訪問研修の成果と課題	3
1. 実施概要	4
2. 教育機関訪問	6
3. 学校訪問	12
4. スタディツアーア・ホームビジット	25
5. 成果	31
6. 今後の活動予定	63
資料	68

国際連合大学 (UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学 (United Nations University) は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。2000年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていた「韓国教職員招へいプログラム」は、同年より本事業のもとで開催されることとなり、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が実施を担当し、今年まで14回にわたり、1,668名の韓国の教職員を日本に招へいしてきました。

2003年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年10名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきました。これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価され、2005年からは韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして、参加人数を20名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008年のプログラムからは、招へい人数をさらに倍増し、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2014年8月26日（火）から9月1日（月）に実施された「韓国政府日本教職員招へいプログラム」では、2014年1月に韓国の教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、及び2015年1月に受け入れていただく自治体や学校の教職員等が参加しソウル市、江原道（カンウォンド）春川（チョンチョン）市・楊口（ヤング）郡・高城（コソン）郡、忠清北道（チュンチョンブクド）清州（チョンジュ）市・忠州（チュンジュ）市・丹陽（タニヤン）郡での学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課

題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいたしました、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び江原道教育庁、忠清北道教育庁、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2015年3月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

韓国訪問研修の成果と課題

訪問団団長 大津 和子

「韓国政府日本教職員招聘プログラム」の概要および個々の訪問先における交流などについては、「実施概要」や参加者からの詳細な報告に譲り、ここでは、本プログラム全体を目的にもとづいて評価するとともに、今後の課題を明らかにし、プログラムの一層の質の向上に資することとしたい。

今回の研修の目的は以下の通りであった。

- (1) 韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
- (2) 学校および地域社会における国際理解教育(EIU)と持続発展教育(ESD)の好事例を探る。
- (3) 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
- (4) 日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。

第一の目的に関しては、小中高校をそれぞれ1校ずつ訪問し、授業参観および教員との意見交換の場をもつことにより、韓国の学校現場の様子を一定程度知ることができた。また、江原道教育庁、忠清北道教育庁で教育改革の現状と課題について講義を受け、道の教育方針が各学校でどのように実施されているかを概ね理解することができた。この点に関しては、参加者の満足度も高かったようである。

第二の目的はある程度達成されたが、十分に達成されたとは言い難い。各学校を訪問した際に、国際理解教育(EIU)や持続発展教育(ESD)の視点から授業を観察し、教員との意見交換に臨んだ参加者もいたが、そうでない参加者もいたようで、最終日の報告会でもそのことが伺われた。これは、ある意味でやむを得ないといえよう。参加者の間で、国際理解教育(EIU)や持続発展教育(ESD)に対する理解度にはばらつきがあるのは当然だからである。したがって、第二の目的を達成するためには、事前研修において国際理解教育

(EIU)や持続発展教育(ESD)に関する専門家

の講義を組み込み、参加者全員がある程度の理解をしたうえで、現地研修に参加することが有効であろう。

第三の目的に関しては、参加者が韓国の学校で授業をさせていただき、児童生徒の予想以上の反応を得ることができて、教師としての醍醐味を味わった参加者もいたようである。教師として、これまで蓄積してきた力量が試されたともいえよう。事前研修において、授業を担当する参加者の間で十分な協議をする時間があれば、日本文化紹介のパフォーマンスを超えて、異文化理解の真髄に迫る授業を実施することも可能であろう。本研修を好機として参加者がモティベーションを高め、今後さらに教育実践の質の向上に努めることで日本の教育の質を高めることに寄与しうる。

第四の目的はネットワークの構築・強化である。1週間の研修を通じてグループ内の協力体制が強まり、参加者間の信頼関係も醸成されたので、今後ともネットワークは持続していくであろう。が、韓国教職員とのネットワークについてはどうであろうか。ホームビジットで温かく迎えてくださった方々との交流は、今後も続きそうである。今回の韓国訪問で得られたつながりを持続させ、さらに発展させていくこうとする参加者個々人の熱意に期待したい。

最後に、本プログラムの主催者である国連大学、企画、実施に尽力されたACCU並びにKNCU、訪問を受け入れていただいた学校や教育機関、ホームビジット先のみなさまに心から感謝申し上げます。そして、大変熱心に研修に取り組まれた参加者には敬意を表したいと思います。

1. 実施概要

韓国政府日本教職員招へいプログラムは、**2000**年度から実施されている韓国教職員招へいプログラムと対応するプログラムで、**2003**年から日本の教職員を韓国へ派遣してきた。これらの交流事業の成果が韓国政府に評価され、**2005**年からは参加人数を倍増し、韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。**2007**年には、文龍鱗（ムン・ヨンリソ）元韓国教育部長官からの招請により、中曾根弘文元文部大臣を団長として日本教職員**26**名が韓国を訪問した。**2013**年までにのべ**419**人の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた。

今回の韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、日本の教職員等**50**人が**2014**年**8**月**26**日から**9**月**1**日の**7**日間にわたり韓国を訪問した。訪問団の構成は、参加者として、1) **2014**年**1**月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した韓国教職員を受け入れた教育委員会より推薦された教職員、2) 同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3) **2015**年**1**月に韓国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会より推薦された教職員、4) 公募により選抜された教職員の計**44**名および、国際連合大学、文部科学省、国立大学法人北海道教育大学とユネスコ・アジア文化センターの同行者を含めた**50**名である。訪問団の団長は、日本ユネスコ国内委員会の委員を務める北海道教育大学の大津和子副学長であった。

7月**30**日、東京の国際連合大学にて、訪問にあたってのオリエンテーションが実施された。国際連合大学の岩佐敬昭大学院事務局長、文部科学省の今里譲国際課課長、駐日本国大韓民国大使館の崔成有参事官、ユネスコ・アジア文化センターの佐々木万里子人物交流部部長の挨拶のち、文部科学省生涯学習政策局参事官付外国調査係の

松本麻人氏より「韓国の教育事情」と題した講義があり、現状や課題について具体的な説明を受けた。また、前年度参加者から前年度の体験談、アドバイスおよびその後の交流についての発表が行われ、参加者全員が本プログラムおよび今後の教育交流への目的意識を高めることができた。発表にご協力いただいたのは、**2013**年度に参加した千葉県立流山おおたかの森高等学校の鎌田彰教諭である。その後、プログラム中の役割分担、訪問先からのリクエストに対する準備、日本文化紹介について参加者同士で打ち合わせを行った。

訪問団一行は**8**月**26**日に成田国際空港から出発し、同日昼頃に仁川国際空港に到着した。韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）から出迎えを受け、A グループは春川へ、B グループは清州へと移動した。A グループが向かった春川市は江原道の道庁所在地であり、湖畔に囲まれ毎年多くの観光客が訪れる。また、B グループが向かった清州市は忠清北道の道庁所在地で高麗時代最も古い金属活字本が印刷された場所である。同日、それぞれ宿泊先であるサンサンマダン春川 STAY、ラマダプラザ清州ホテルにおいて KNCU による今回の訪問に関するオリエンテーション、開会式が実施された。

27日から**30**日までの**4**日間はA、B 二つのグループに分かれ、A グループは江原道（カンウォンド）春川（チョンチョン）市、楊口（ヤング）郡、高城（コソン）郡を、B グループは、忠清北道（チョンチョンブクド）清州（チョンジュ）市、忠州（チョンジュ）市、丹陽（タニヤン）郡を訪問し、各都市で教育機関・学校訪問や文化施設見学を行った。

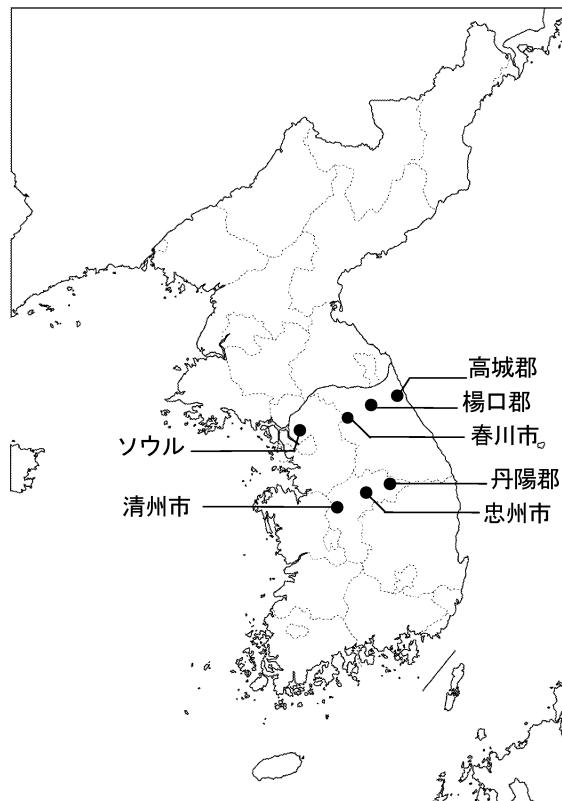
27日、A グループは江原道教育庁訪問後、ユネスコスクールである大龍（テリヨン）中学校を訪問した。学校訪問では、ユネスコスクール活動の紹介をする場面もあった。夕方からは宿泊先で歓迎夕食会が行われた。歓迎夕食会では、訪問団と韓国教職員が交流を深めた。歓迎夕食会には、**2014**年**1**月の日本招へいプログラムの参加教職員が参加しており、再会を喜び、更に親交を深めている場面も見られた。**28**日、江原外国语高等学校を訪問し学校給食を体験した。午後は、DMZ（非武装地帯）を訪れ、韓国 DMZ 平和生命の丘、ウルチ展望台、第**4**トンネルを見学した。訪問後、同日の宿泊先であるハヌルネリンホテルがある麟蹄（インジェ）郡へ移動した。**29**日、一行は公峴津（コンヒョンジン）小学校を訪問したのち、午後は雪岳山（ソラクサン）国立公園を訪れた。

夕方からは束草（ソクチョ）中央市場を訪れ、そこで夕食をとった。30日、春川へと戻り、同日の宿泊先であるサンサンマダン春川STAYでグループプログラムレビュー会議が行われた。同日夕方、ホームビジットがありホストファミリーと交流の時間を持つた。

27日、Bグループは忠清北道教育府訪問後、ユネスコスクールである韓国教育大附設月谷（ウォルゴク）小学校を訪問した。夕方からは清州にある韓国料理レストランで歓迎夕食会が行われた。28日、興徳（フンドク）高等学校を訪問し、学校給食を体験した。午後は忠州へ移動し、忠清北道教育府北部英語体験センターを訪問した。見学終了後、丹陽に移動し、同日の宿泊先であるデミヨンリゾート丹陽へと向かった。29日、佳谷（カゴク）中学校を訪問した後、午後は救仁（クイン）寺を訪れ、続いて古藪（コス）洞窟及び鳴潭（トダム）三峰を訪問した。30日、一行は再び清州へと戻り、清州古印刷博物館を訪問した。午後は同日の宿泊先であるラマダプラザ清州ホテルにてグループプログラムレビュー会議が行われた。同日夕方にホームビジットがあり、各家庭を訪問し、有意義な時間を過ごした。

31日、A、B両グループ共にソウルへと移動した。同日の宿泊先であるセジョンホテル到着後、ユネスコ会館へ移動し、韓国の教育講義が行われた。また韓国のESD及びASPNetについての説明があり、日本教職員は韓国の教育事情や日本の教育事情との差異について理解を深めた。続いて、ソウルロイヤルホテルにて歓送昼食会が行われた。昼食会終了後、再びユネスコ会館へと戻り、午後は報告会及び閉会式が実施された。

9月1日、一行は帰港先ごとに成田国際空港、関西国際空港に向け、帰国の途に着いた。



2. 教育機関訪問

江原道教育庁
忠清北道教育庁
韓国ユネスコ国内委員会

今回の教育機関訪問は、江原道(カンウォンド)、忠清北道(チョンチョンブクド)、ソウル市の計3機関で行われた。韓国へ到着すると、Aグループは江原道へ、Bグループは忠清北道へと移動し、それぞれ宿泊先のホテルにてオリエンテーションおよび開会式が行われた。8月27日にはAグループは江原道教育庁、Bグループは忠清北道教育庁を訪問した。また、31日、両グループが共に訪問した韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)では、韓国の教育事情に関する講義が行われた後、韓国ESD及びASPnetについての紹介があった。

江原道教育庁
(Aグループ)
8月27日

代表者名:閔丙熹(ミン・ビヨンヒ)
特色:みんなのための教育を目指す江原道教育。競争では勝者も敗者も両方が傷付く、点数をつける教育では誰かが敗者となる。他に良い方法はないか、共に歩む道を模索する。学生が幸せな学校をつくる。自立性と創造性、希望の教育、競争と差別をこえたみんなが幸せな教育をめざす。

江原道教育庁到着後、玄関前にて写真撮影。教育局長挨拶、江原道の教育についての概説、訪問団団長挨拶、訪問団紹介、ビデオ紹介(江原道の教育)の順で進行した。その後質疑応答が行われた。

Q: 高校の平準化というが、それまでは特定の学校に集まっていたのか。

A: 2013年3月に平準化され、2014年3月に2回目の平準化が行われた。きっかけは制服による差別、学校の序列化があつたことである。中学生が深夜まで勉強をしていて体調不良をおこすなどの問題もあつた。方法として春川全体の中学生を志望ではなくコンピューターで各高等学校へ割り当てるようにした。これに対して遠くに行かなければならぬという苦情もあり、近くの学校に割り当てるプログラムの改善も課題として残っている。今後、学力観、学習観も変えていかなければいけないのではないか。

Q: 平準化は私立学校に対しても行われたのか。通学時間の問題は?全体では人口の減少があるのか。少子化などの問題は?

Q: 韓国では、高校は就職に向けた特性科の学校と大学進学に向けた一般科とがあるが、平準化は公立・私立に関係なく一般科について行われた。通学時間については20分以内を基準に行った。人口減少はあるが、問題はまだ起きていない。しかし、教員の雇用安定の問題が起きるであろう。

Q: みんなが幸せになる教育では命を守る教育も大切だと思われるが、その時の防災教育はどうなっているか。

A: 安全に対する教育は自覚が大切だ。4月のセウォル号事件のあと、安全が強調され、大統領府の前でデモなどを行っている人もいるが、まだまとまってはいない。マニュアルをつくって、100人以上の修学旅行はとりやめるなどしている。6月に鳥取を訪問したときに同じことを聞いたが、体験学習などで列をつくって歩くなどしていた。先生が基本的生活習慣だけを教えるなど今、自分ができることをやるのが大切だと思った。

Q: 放課後にはいろいろなプログラムがあるようだが。

A: 放課後、学校として生徒から希望を聞いてやっている。

Q: 学校の統廃合問題は?

A: 60人以下は統廃合といわれているが、江原道では地域の希望があれば統廃合していない。

(桜美林中学校 教諭 森務)

【参加者の感想】

池見繁…………もっとも興味深かったのが、教員行政事務軽減である。子どもたちの教育における質

を保証するためには教員の負担を軽減する必要があるということで、事務的な負担を軽減するという政策がなされていた。実際に日本でも事務作業が放課後の仕事の大半を占めており、私自身も教材研究などにかける時間がなく、新しい教材に時間を割けないといった問題を抱えている。今後のこの政策の動向に注目したい。また高校の平準化や知識偏重型の教育からの脱却など、日本の教育が抱える課題とリンクする部分がたくさんあった。その他にも江原道が推進する「幸せ教育」など新たな方向へ向かおうという姿勢と、そのことが教育庁を中心の一気に進められていくという様子に、日本との違いを感じた。

菅沼祐子……………幸せ教育についての日本語のパンフレットや紹介動画があったので理解に役立った。「みんなのための教育」は生徒の負担をなくすのみならず、教員・保護者の負担をなくすという名目が興味深い。また平準化について、通学時間も家庭の負担になり得ることを改めて認識させられた。教員の立場としては、学校教員の負担減を狙って校務行政士を設置した点に魅力を感じる。幸せ教育の結果日本の教育と対比して、今後の韓国の子どもの学力の変化が日本のゆとり教育と同じ結果をもたらすのかどうか注目したい。

吉岡大輔……………韓国政府の教育目標を、実際に地方行政で推進しており、訪れた学校ではそれが浸透しているように思えた。校務行政士の配置などで現場の教員の負担軽減を図っており、行政がどれだけ教育現場を支援しているか、行政と現場の連携が取れているように感じた。



教育局長を囲んで

忠清北道教育庁

(B グループ)

8月27日

代表者名:金炳佑(キム・ピョンウ)

特色:「一緒に幸せな教育」という教育ビジョンを掲げ、教育指標を「エキサイティングな学校」、「楽しい学校」、「温厚な品性」と定めている。国際理解教育に力を入れており、道内には19校のユネスコスクールがある。国際理解教育優秀校のサポートも行っており、ユネスコスクールのワークショップを年2回行っている。

忠清北道教育庁では、教育庁の重要施策及び特色事業についてお話を伺った。忠清北道教育庁は、教育に参画するすべての人の協力の下、活発な忠北の教育を目指しているという。また、日本語教師のスキルアップのため毎年日本へ講師を派遣している。教育ビジョンについては、「共に幸せな教育」をつくるため、エキサイティングな学校、楽しい学校を目指している。また、温厚な品性を重視している。2014年度の主要業務としては、「参加」、「コミュニケーション」、「疎通」を目標として、人間教育のためのアンサンブルプログラムを実施した。透明化されたクリアな教育行政、完全なる共同参画を目指し障害者への支援も積極的に行っている。教員育成のため、指導中心の学校運営センターを設置し、授業力向上のためのコンサルタント、相談を実施している。一方、生徒のためには進路・進学総合センターを設置している。また、芸術・文化体験、芸術祭の運営、朝20分間の読書時間の設定、スポーツの日実施、アトピー疾患治療対策校の設置など様々な事業を行っている。教育福祉については、教育負担軽減のために低所得層へのパソコン支給のサポート、放課後学校、土曜日学校、農村学校、初等部ケアなどを実施している。学校安全については、セウォル号事件以降、より学校教育現場における安全確保が求められるようになったため、T/Fチームの強化を図った。進路指導に関しては、テーマ別進路キャンプの実施をはじめとし、進路体験、相談室、保護者向け進路コーチの説明会などを実施している。また、進路指導教員の養成に力を入れている。2014年の特色事業としては、幸せ4アンサンブル

(SPTC—Students、Parents、Teachers、Community)による共同運営を目指し、様々なプログラムを実施している。生徒が幸せな学校はもちろん、保護者が幸せな学校の実現のため、保護者の年代に合わせたプログラムを実施し、教員が幸せな学校の実現のために休日を使ったプログラム、生徒との信頼を築くためのプログラムを実施している。また地域住民が幸せな学校を実現するためのプログラムもある。国際交流については、100名の英語教師を5カ国に研修派遣(英語研修)するとともに、第二外国語でも10名の教員を海外派遣し、歴史教育も行っている。また、パラグアイへのIT支援も行っている。姉妹校が50カ国にあるが、本年度より新たにASEANプログラムを実施し、10カ国でプログラム運営している。ESD、ユネスコスクールのプログラムについては、忠清北道には19校のユネスコスクールがあり、年に2回、校長を対象にワークショップを実施しており、優秀教育庁として表彰されたこともある。

説明終了後、質疑応答が行われた。

Q: これらの政策は、国家規模で行われているのか。それとも忠清北道教育庁独自のものか。また予算的なものはどうなっているのか。

A: 「幸せアンサンブル」については独自のものである。予算は、教育省からの支援もある。市と教育省の評価プログラムがあり、この評価を受けて決まる。

Q: 日本も同じように委員会制度があるが、選挙で選ばれることでの責任はどう感じるか。また、進路教育実践の具体例を教えてほしい。

A: 元々韓国も日本と同様の制度であったが、直接選挙制になってから国民の教育観がよりダイレクトに反映されるようになった。しかし、軍や政党などの様々な教育観が同時に表面化した問題もある。大学入試について、もともと韓国にも統一された入試制度があったが、現在は学校別に募集をするのが一般的になっている。それに合わせて学校のカリキュラムも変化し、成績以外にも素質や将来性、本人の夢などを考慮しカリキュラムが組まれている。

Q: 教育福祉について、放課後学校、土曜学校など、時間外での教育の充実が見られる。それに対して現場の先生方の反応はどうか?

A: 放課後学校は全国的に運営されており、人間性

や素質を伸ばすには最適である。正規のプログラムが終わった後の「課外プログラム」であり、教科指導だけでなくスポーツや素質を伸ばすものなど様々なプログラムを組むことが可能である。参加率は80%以上であり、教員だけでなく外部の講師を招くこともできるが、プログラムによっては有料のものもある。低所得層にはオーダーメイド型フリークレジットもあり、子どもが不自由なく幅広く選択できるようにしている。教員にとどめても教育の充実へ直接結びついており、積極的に取り組んでもらっている。

Q: 英語教員の海外派遣の目的と理由は何か。

A: 毎年20人ずつ、5カ国に派遣している。英語教員の専門性や、日常会話力の向上のためにプログラムを続けている。英語教員が現地で文化や生活を肌で感じることができるというのが継続的理由である。

Q: アトピー疾患治療対策校とは何か。

A: アトピーが深刻な生徒、特に化学物質アレルギーの生徒の増加が見られている。郊外地域にシラカバ材などを使い学校を建設、運営している。地域外からも生徒が入学しているケースもある。

Q: 学生、親、地域社会の共同プログラムの具体例を知りたい。

A: 私たちはこれを幸せ4アンサンブル(SPTCプログラム)と呼んでいる。「親友保友プログラム」という実践例がある。

(和歌山県立星林高等学校 教諭 原田海希)

【参加者の感想】

中口健太郎…………忠清北道は韓国の中でも学力の水準が高い地域であり、教育長は5年連続優秀教育長に選ばれている。施策の一つ「みんなを思いやる教育福祉増大」の取り組みの中に「放課後個人別自由受講」がある。これは全国的な取り組みで、放課後に学校の教師や外部講師が学習の他、音楽やスポーツを児童生徒に教え、個性伸長を図るものである。日本のような塾やスポーツクラブの場を公的な立場から提供しているのは大変特徴的であった。

松山武彦…………教育長が選挙で選出されることが、大きな驚きであった。教育長がリーダーシップを発揮している印象を得た。各部署に有能なスタッフがいるように感じた。

韓国ユネスコ国内委員会

8月31日

代表:閔東石(ミン・ドンソク)

各地方のプログラムを終え、ソウルで合流した訪問団は、ユネスコ会館にて韓国の教育に関する講義を受けた。また、韓国のESD及びASPnetについての説明を聞き、理解を深めた。

日時 平成26年8月31日(日) 11:00~12:30

場所 ユネスコ会館 11階ユネスコホール

<韓国の教育に関する講義>

尹鍾赫(ウン・ジョンヒョク)氏より「創意的な人材育成のための韓国教育の改革課題」について講義があった。韓国では現在、「グローバルレベルでの創意的な人材育成」、「子どもたちが自由に創意的に切り開いていける教育」を目指し実践している。創意的な人材とは、子どもたちが社会に出たとき、何らかの形で自ら道を切り開いていける人材のことである。また、学校は楽しくないといけない、安定していかなければならないという理念のもと、生徒の興味と創意性を最大限保障する「幸せ教育」を実践している。様々なチャレンジの中で危機にぶつかった際にも、与えられた枠をこえて、そのアクシデントから自分の力を発揮できる人材を育成し、失敗や挫折から、もう一度やり直すチャンスを与えることによって、這い上がり道を切り開いていくことを目指している。

高校では、教科選択制度のなかで選択できる教科ができるだけ増やし、自分で自由に選べるようにしている。中学では、自由学期制という1学期以上は正規のカリキュラムから離れて自由なプログラムを学べる制度を取り入れている。芸能に興味がある生徒はK-POPの芸能活動などを行い、自分の興味にあった活動を行うことでリフレッシュさせ、新たな目標を自分なりの観点で見つける。これにより、生徒の夢を実現させ、才能を伸ばし、創意性、品性、自己主導学習能力など未来社会が必要とする能力を養うことができると考える。現

在は、試験運用だが、2016年からは全国の中学校の実施が義務づけられている。

現代の子どもたちには、忍耐や根気強さが必要だと言われている。苦痛なことや困難なことがあった際に耐えることができないようである。そのため様々な取り組みの中で、創意性を持ち、他人を思いやることのできる人材の育成を目指している。

教育革新を成功させるための戦略として（1）創意性を通じた全人教育（人間の持つすべての資質を全面的に・調和的に育成する教育）の実現、（2）学校教育を革新するための画期的な発想の転換（3）創意的な教育文化を創るとまとめられた。

質疑応答では、次のような質問が出た。

Q: 幸せ教育と受験教育との関係性はどのようなものか？

A: 「幸せ教育」は、政府、グローバルレベルの専門家によると学力面でよい評価を出している。教育によって得られた結果が、今後の社会に活かせるかが課題である。日韓の教育は似ている。保護者が自分を犠牲にして子どもの教育に力を注いでいる。

自由学期制度では、セカンドチャンスを与えられる。幸せ教育が創意を生み、子どもの素質を伸ばすことができ、自分の人生を切り開くことができる。しかし、どちらの考えにも賛否両論あるのが事実である。

Q: 教師の質の向上のためにしていることは何か？

A: 基本的には、教師自らが持続的に自己研修を行っている。国際協力が重要であるため、開発途上国との協力もおこなっている。アフリカとの交流も続けている。アフリカ等の国々では、教員研修はないので再教育が課題である。日韓は研修システムが整っているので、システム的に整える必要がある。自己研修は、ネット等を用いて自ら進んで力をつけたり、地域社会と学校との連携を行なっている。

Q: グローバル社会のなかで、国際競争教育から抜け出る必要はないのか？



大津和子団長(前列、右から 9 人目)、林賢默(イム・ヒョンムク)韓国ユネスコ国内委員会事務総長補(同 10 人目)

A: 悩んでいる部分である。教育分野を研究する人々の悩みでもある。競争は、勝者がいれば敗者がいる。基本的な考え方として、教育的に不利な階層に配慮が必要である。政府レベルで、セカンドチャンスを用意することが必要である。様々なコースがあるが、一つ一つのルートが重要で価値があり、様々なコースを用意することで、選択が可能になるということが大切である。IT社会になり、情報革命が起こったことで世界が広がった。ロボットが社会を動かすことも多くなった。韓国でもニートが増えているが、今後は確実に雇用が減る。その中で自らの道を見つけるには、創意性が必要になってくる。

Q: 教員の評価はなにを基準にしているのか。

A: 私は日本の事例に関心を持っている。指導力のない教師について、学生が評価することはよいことではない。自分の主觀で評価し、客観的に見ることができないからだ。子どもたちは、50代以上の教師に対して否定的な評価をする傾向がある。教員同士の評価は必要である。韓国では互いにアドバイス、コンサルティングを行っているが、序列をつけるのは非教育的であるという理由で、教員評価に教師からは不満が上がっている。

Q: 日本の指導要領では、「生きる力」「確かな学力」「豊かな心」を伸ばすことを目標としているが、韓国では健やかな体や心のバランスはどう考えているのか。創意性のみに重きをおいているのか。

A: 創意性を中心におくことが大切だ。豊かな心の育成には、創意性が必要であるし、もちろん学力も体力も必要である。栄養が足りていないと創意性、社会性を育くむことができない。人的開発力

量、栄養の調節も必要である。農村部では、国際結婚が増えている。母親が韓国語を話せないという家庭も少なくない。そのような中で、創意性だけでなく、体力や基礎知識も無視できない。様々な改革戦略を模索しているところである。

〈韓国のユネスコ活動及びユネスコスクールの紹介〉

●ユネスコについて

- ・終戦後、軍事的な警戒、政治的な解決方策だけでは、恒久的な平和を得ることが難しいとして、教育・科学・文化的な協力をもって持続的な平和を実現することを目的として設置されたのがユネスコであり、国連傘下の国際機関として位置づけられている。具体的には以下の4点について、その推進を図っている。(1) 万人のための生涯教育。(2) 人類の繁栄に貢献する科学。(3) 世界遺産保護と創意性をもとにした文化発展。(4) 情報と知識の共有による情報格差を解消。
- ・パリに本部があり、現在 195 の会員国から構成される。
- ・韓国は 1950 年にユネスコに加盟した後、1954 年に国内委員会を設置し、教育・科学・文化の分野で、社会が目指すべき方向性について議論している。委員長は教育部長官が兼務する。

●ESD 事業について

- ・1992 年開催のリオサミットにおいて、「持続的な発展」のために教育が担うべき役割について議論し、2014 年までの実行プランとして、ESD のための 10 年を決定、各国がこの実現に向けて努力してきた。2009 年にドイツで中間評価の会議が開催され、2014 年には名古屋でユネスコ ESD 世界会議が開催される。
- ・ユネスコ韓国委員会専門委員会：教育部も含めた年 2 回の会議を通じて ESD の方向性について議論。
- ・学術会議：韓国では ESD の概念自体あまり知られていなかったが、関連すると思われる取組は多かった。学術会議等を通じて、ESD にどのような領域が含まれるかを議論し、その認識・理解を深めようとしてきた。論文集も発行している。
- ・教員研修：ESD は学校等、現場で実践されるべき理念である。教師が ESD について学び、実施するために、自治体と協力して研修を開催している。
- ・公式プロジェクト：ESD は難しい概念だが、地域での何気ない活動が ESD の考え方方に合致することもある。このため、ESD についての広報を推進するためのプロジェクトを企画・運営し、このうち 51 のプロジェクトがこれまで韓国政府から認証を受けてきた。
- ・研究及び出版：日本を含めた外国の事例集を翻訳して出版。教員研修向け資料、学術的な論文集なども出版している。
- ・日韓教員交流プログラム：教員同士の交流を通じ、教育の実践における両国の懸案を共有し、北東アジアの平和を目指すプログラムである。夏に日本の教職員が訪韓、冬に韓国の教職員が訪日する。
- ・ユネスコASP ネットワーク：ユネスコスクールは、学校教育による平和の概念の増進を図るために制度で、1953 年に 15 カ国、33 校でスタートし、現在世界 181 カ国、9000 校余りが加盟して活動する。韓国では、1961 年に 4 校でスタートし、現在 251 校が加盟している。ユネスコスクールは、①国連の優先課題、②持続可能な発展のための教育、③平和と人権、④文化間学習を活動のテーマとする。また、ユネスコスクールにおいて ESD に関する革新的な活動を安全に実施するため、情報共有等を目的としたネットワークを形成している。なお、日本のユネスコスクールは小中学校が多い

が、韓国は高校が多い。

- ・Rainbow 青少年世界市民プロジェクト：ASP ネットワークに所属する学校の子供たちが、自分たちの身近にある世界の懸案に関する事柄を選択し、それを研究する過程で未来を切り開く力を身につけさせようとするプロジェクトであり、2010 年に開始。

(河内長野市立美加の台小学校 教諭 高井優子)

【参加者の感想】

荒平豊……………ユネスコ会館での韓国教育講義は意義深いものであった。中学校の自由学期制という発想には驚いた。チャレンジングであるし、失敗をおそれたり、批判をこわがったりするのではなく、力強く前に進もうとする姿勢に感銘をうけた。日本には見られない果敢な改革である。ここでも、生徒の幸せ教育に軸足が置かれており、生徒の自律を最大限尊重しようとする柔軟な教育課程が設定されている。中学 2 年生の問題が社会的な問題となっているという状況の中で、さらに自由度を高め生徒の自発的な行動を支援しようとする方向に舵をきるのは果断である。

松倉紗野香……………最終日の講義で「韓国の教育事情」について伺うことができた。「創意的な人材育成」、「幸せ教育」をキーワードとした韓国の教育政策について理解を深め、その根底にある韓国の教育課題についても知ることができた。グローバル化、PISA の調査結果を受けての教育政策については日本との共通点が見られた。



尹鍾赫氏による教育講義

3. 学校訪問

A グループ

大龍中学校

江原外国语高等学校

公峴津小学校

B グループ

韓国教員大学附設月谷小学校

興徳高等学校

佳谷小中学校

A グループとB グループに分かれ、学校訪問を行った。

A グループは江原道にて、B グループは忠清北道にて各 3 校を訪問し、授業見学や教職員、児童・生徒との交流が活発に行われた。

大龍中学校

(A グループ)

8月 27 日

代表者名:金永一(キム・ヨンイル)

特色:特別支援学級 1 クラスを含む、32 クラス、教職員 93 名の公立共学校。教育目標は「大きな夢を抱き、未来を設計して創造的に自我を実現する人間の育成」。生徒による自治法廷や、学校不適応生徒及び学校暴力の加害・被害生徒対象の「大龍の大きな木教室」など、コミュニケーション重視の共感できる生活指導を目指す。週 1 回の体育では隣接するアンマ山に登り、英字新聞の発行や英語キャンプ、様々な校内大会を通して英語教育に力を入れる。選択教科として中国語を学び、中国吉林省の学校と相互訪問交流を行う。また生徒の自治によるクラブ活動も行われている。

学校到着後、まず玄関付近で生徒が制作した韓国と日本とのつながりを紹介するパネル展示を見学。最初に案内された図書館で、まずは環境科学サークルの代表生徒によるゴミの島についての研究活動報告を聞く。このサークルでは砂漠化、エアロゾル、スーパー台風、ゴミの島、生態系の破壊と生物多様性の減少など各自が選んだテーマにそって校内外で活発な活動を行っている。それぞれが自分のパネルを

用意して来訪者の質問に答えられるよう準備していた。続いて 2018 年の平昌冬季オリンピックを紹介するサークルが制作した、宿泊施設や競技、スタジアム、地元の味を紹介する動画を鑑賞。その後は、図書室後方に設置されている彼らが制作したパネルを見ながら日本語または英語で交流の時間を持った。その後食堂にて、生徒と同じメニューの昼食をいただきながら、給食の様子を見学した。

続いて、化学室、生徒指導室、Happy Class (教育福祉支援室)、Wee Class (生徒相談室) を見学。特別支援学級ではバリスタ教育を受けた生徒たちが入ったコーヒーをいただき、その生徒たちの作った飲み物やパッピングを昼休みに並んで買う生徒たちの様子も見学した。その後職員室を通り視聴覚室へ。視聴覚室で行われた歓迎式典では、生徒による管弦楽演奏 (人生のメリーゴーラウンド)、合唱 (2014 アリラン)、日本教職員の合唱 (アリラン&花は咲く) に続いて、校長・金永一氏より、「同じ方向へ注意深く進もう、交流イベントは体験を通してお互いの共通点や違いを見つけ、互いの文化を理解する一助となるように、交友関係を続けていこう」との歓迎の辞をいただいた。続けて武田グループリーダーによる感謝の辞、そして教頭のキム・クモク先生から学校の現況についてパワーポイントを使って説明をいただいた。内容は校木 (松) や校花 (つつじ)、各学年のクラス・生徒人数、表彰を受けた教育活動の紹介、体育の授業でのアンマ山登山や活発な英語と中国語での活動、吉林省との国際交流、特色ある読書教育、長期休暇や一日の時程など。その後、丁知恩先生の中国語と李賢珠先生の科学の授業を見学。中国語の授業では、中国語を母語とする先生とのチームティーチングで、スクリーンに映った絵を見ながら、チャンツを使い、「何人家族か」などの表現を練習していた。漢字を書く作業はなくピンイン表記を利用して、4 人グループでワークシートを仕上げ、終わると先生にシールをもらうシステムだ。科学の授業では、夏休みの宿題で学んだ生殖についてグループごとにカラー粘土やサインペンを使ってパネルに立体的に表し、それを見せながらプレゼンテーションを行っていた。続く 6 時間目には 2 クラスで日本教職員による文化紹介の授業が行われた。3 年 7 組 (女子 36 名) では、菊本大樹教諭、菊池和子教諭、久田麻衣子教諭による日本の中学校生活、着物、韓国料理に似た日本の食べ物の紹介が画像を使って行われ、お手玉やけん玉が演された後、生徒たちも

挑戦した。2年10組（男子37名）では田中麻子教諭、森務教諭、林留美子教諭による日本地図を使った地理の授業や浴衣の紹介が行われた。その後、日本教職員は二手に分かれ、図書室での教職員の懇談会と、音楽室での生徒との交流に出席した。懇談会には主席教師、教頭先生、環境運営部長、教務部長、研究部長、中国との交流サークル顧問、科学の先生が出席された。

<日本側からの質問>

Q: グループ学習は他の授業でも多く取り入れられているのか。

A: 実験や討論が中心。講義形式でノートを取ることもあるが、成績を考えて生徒は自分で勉強する。個々の力は筆記テストで評価し、皆でやるときは一緒にやる。

Q: 科学、中国語の授業では先生の笑顔が生徒の積極的な参加を促していると思ったが。

A: 楽しく笑顔で教えるようにしている。文法よりも会話中心でゲームを取り入れて楽しくやる。

Q: 外国に行ったことのある生徒はどれくらいいるのか。

A: 英語圏に行ってきた生徒が多い。日本での経験がある生徒は少ない。

Q: 授業時間内ではグループ授業が多いが、放課後学習はどのように行われているのか。

A: 放課後の授業は基礎が足りない生徒が対象で、ほぼ毎日1時間ずつ行う。長期の休みには近くの大学生が時間を決めて1対1で指導する。何か1つの才能を開発する授業も行っている。

<韓国側からの質問>

Q: いじめの問題は日本では解決してきたと聞くが、どのような対策をとったのか。

A: いじめ防止対策推進法ができ、それをもとに各学校で対策を考える。本人がいじめと思ったら、いじめとして扱いましょうということが明確になった。学校の中でも隠蔽しないで、学校全体、地域全体で取り組んでいくようにしている。

Q: 効果はあったのか。

A: 埼玉県の場合は、30日以上いじめで欠席した場合、学外のチームを作って対策をすることになった。4月に始まったばかりで、まだ県内でこの対象になったのは1件。これでいじめが減ったかどうかはわからない。

Q: 韓国ではエネルギーを発散させて問題行動を減らそうと、サークル活動を活発にしている。自律サークルは学期の始めに募集し、顧問はいるが、生徒が自主的に運営している。現在699人が所属。毎週1回1時間以上活動する。地域大会があれば、自分で申し込んで参加する。日本ではどのようななかたちでやっているのか。

A: 日本ではクラブ活動と呼んでおり、自分の興味に基づいて、スポーツや文化系のクラブなどに入部する。活動はほぼ毎日、休日も大会に参加したり、他校との練習試合がある。顧問は学校の先生が担当する。クラブ活動の他に、生徒会活動があり、生徒自ら運営している。これにも生徒の意見を尊重しながらバックアップする先生がつく。いじめ撲滅の啓発活動を生徒主体で行うこともある。

Q: どうやって授業研究をしているか。

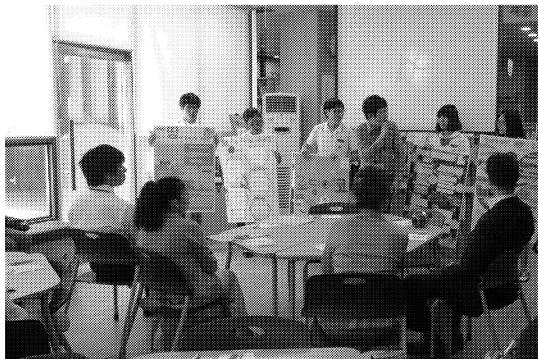
A: 授業を変えるための研究テーマを持ち、そのテーマに沿って指導案を書き、目標と活動を明確化する。それを全ての教員が参観して、授業後にミーティングを行い、良かった点・改善すべき点を共有する。

Q: プロジェクト学習方法というのが韓国にもあるが、その研究授業には全ての先生が出るのか。

A: ケースバイケースだが、低学年・中学年・高学年と分けてそれぞれの研究授業に出ることもある。

最後に記念品の贈呈式を行い、玄関前で記念撮影をし、訪問を終えた。

(渋谷教育学園幕張中学高等学校 教諭 細野紀子)



環境科学サークルによる研究活動報告

【参加者の感想】

樋木千枝…………理科と中国語の授業を参観しました。理科の授業では、学習してきたことを大きなボードに粘土やマジックでまとめていました。中国語の学習では、ICT機器を使い、ルーレットのようなもの

で発表する生徒を決めて、楽しそうな雰囲気で学習が進められていました。教材や教具を工夫し、先生が楽しそうに学習を進めることは、どこの国でも大切なことだと感じました。

川西嘉之…………大龍中学校に到着し、図書室に案内されたが、そこには生徒たちが放課後に調べた ESD（地球温暖化、環境破壊など）についてのポスターが数多く張られていた。初めて韓国の学校で給食を食べたことは印象的だった。生徒が歓迎の演奏と合唱をしてくれた。私達も「アリラン」と「花は咲く」を歌った。最後に韓国生徒と日本教員との懇談会があり、韓国の生徒は日本をどう思っているのか、日本の生徒は韓国をどう思っているのかなどについて意見交換し、大変有意義な時間を過ごした。

広木敬子…………生徒達がにこやかに私たちを迎えてくれました。話したい、対話したいという意欲にあふれており、日本の生徒達より明らかに積極的だと感じました。「日本に対する嫌悪感が話題になるが皆さんは正直それを感じるのか」との質問に「(感じない)歴史の勉強をしない人の方が感情的になりやすい」との答えが返ってきた時には、自分の考えをはつきり伝えられることの驚きと、生徒達の中では嫌日の感情が感じられなかつたことの喜びを感じました。

河邊友美…………日本文化を調べたボードの展示や日本語による生徒からの挨拶がありました。歓迎の気持ちが伝わってきてとても嬉しかったです。五輪広報サークルの生徒の英語が非常に流暢で、日本でも「使える英語」の教育が必要だと思いました。いじめ対策には「サークル活動を盛んにし、学生のエネルギーを発散させる」ことをおこなっているとのことです。法律の整備や本人の申告を対策の軸とする現代日本のいじめ対策とは違うので、少し不思議な気持ちがしました。

善を尽くしている。各学年、英語科、中国語科、日本語科の三種類のクラスがある。全寮制であり、校内に住んでいる教員もいる。学校全体が一つの家庭のような雰囲気である。

江原外国語高等学校に到着すると、我々はまず体育館に通された。体育館には教員と生徒が集まっており、我々は拍手で迎えられた。教員からの挨拶のうち、ステージにて歓迎公演が行われた。歓迎公演は、ナンタ・クラブの太鼓演奏に始まり、合唱、日本語クラスの生徒たちによる「恋するフォーチュンクッキー」(AKB48) のダンスマービー上映と「まるもりダンス」、英語クラス生徒によるピアノ演奏ともりだくさんの内容であり、文化的感受性をもつ人材を育成している面を垣間見ることができた。会議室にて学校の現況を紹介されたのち、校内を探訪した。間近に青々とした山が見え、自然豊かな地にあることがうかがえた。自習室を見学したが、居眠り防止のための立ったまま使用可能な机や、生徒一人ひとりに用意された自習ブースの数の多さに我々は圧倒された。案内してくださった教員の話では、自習室には教員が 24 時間駐在しており、生徒は深夜 0 時まで勉強するのがふつうであるということだった。校内を探訪したのち、実際に行われている授業を見学した。1 年生日本語クラスの授業は、グループに分かれてそれぞれの出身地名の「あいうえお作文」を作り発表するというものだった。机の間を巡り、生徒達と話をすることができますが、ほとんどが入学後の今年 3 月から日本語を学習し始めた学習歴半年ほどの生徒にも関わらず、日本語を聞きとり、簡単な言葉で話すことができた。「ゆり」、「みはる」、「ゆうき」など、韓国人の日本語教員も生徒もそれぞれ自分で日本語の名前をつけており、ひらがなはもちろん漢字かなまじり文を書くことのできる生徒も多くいた。我々の代表による日本語授業も行った。対象は日本語クラスの 1 年生である。1 クラスを 2 つに分けて同時に 2 種類の授業を行った。細野・吉岡ペアの授業では、日本と韓国の違いの紹介のうち、現在の日本の有名なフレーズを知り実際に使うアクティビティを行った。最後に筆ペンで色紙に好きな日本語を書くアクティビティをしたが、生徒は強く関心を持ったようで授業が終わったのちも筆ペンを持って日本語を書くことを試みていた。石原・河邊ペアの授業では、日本の食事マナー、日本の高等学校の実態、「くまモン」等ゆるキャラの紹介、日本の伝統的な

江原外国語高等学校

(A グループ)

8 月 28 日

代表者名:李錫鐘(イ・ソクジョン)

特色:「世界を導くグローバル・リーダーの育成」を教育目標とし、校長先生以下、全ての教員が常に研究する姿勢で授業と自己開発、そして積極的に開かれた心で世界を導くことのできる創意的な人材育成のために最

おもちゃの実演と実践を行った。生徒は積極的に授業に参加してくれ、初めてのけん玉を見事に成功させた生徒もいた。その後、昼休みの短い間に生徒たちは我々の用意したアンケートを書きあげてくれたが、その多くが日本語で書かれており彼らのレベルの高さがうかがえた。アンケートのどれもが我々の授業を肯定的にとらえてくれていた。授業をおこなった後、生徒達と昼食を共にした。我々の授業の感想や彼ら個人の将来の夢や趣味、学校生活の様子などを聞くことができた。毎日かなりの勉強量をこなしているにも関わらず、生徒達は明るくパワフルで人懐っこい。食堂の片隅では3年生の生徒が友人同士で誕生日祝をしており、生徒同士の仲の良さがうかがえた。最後に会議室にて教員の方々と懇談会をおこなった。その際の質疑応答の内容は以下の通りである。

<日本側からの質問>

Q: 夜の自習は毎晩深夜0時までとうかがったが、これは学校で決めたことか。

A1: この自習の前半時間はある生徒は1対1の指導を受け、ある生徒は国数英の選択授業を19:00～21:00に受けている。残りの0時まで時間は学校が定めた自習の時間となっている。体調不良の場合は教員に許可を得て寮に戻って休む。

A2: 自分の人生は自分で知識を高めることが必要だ。学校側は自習を強制してはおらず、むしろ生徒の健康を考え、0時以降も自習しようとする生徒を止めることに尽力している。

Q: 外国人教員を多く雇用しているが、どのような採用基準があるのか。

A: 本校が決めるのではなく、教育庁が決めている。それらの外国人教員は皆、資質が高く情熱にあふれた人物ばかりである。

(岐阜聖徳学園高等学校 教諭 河邊友美)

【参加者の感想】

菊池和子…………いわゆる受験校の実態を知ることができました。こちらの予想を上回るような過酷なカリキュラムでしたが、そのなかでも持続可能な社会の担い手をはぐくむ取り組みも始まっている様子もわかりました。



日韓教職員による意見交換会

森務…………「韓国で唯一」の学校だ、という言葉から絶対的な自信が感じられた。教育庁でも同じような印象を受けたが、自分たちの取り組みに対して絶対的な自信を持ってやっていることがよくわかった。夜の12時までは学校で義務付けた自習を行っているとのことであったが、韓国での人材育成の一端を見る事ができた。行政側の意図と現場とのずれを感じた場面でもあった。

武田國宏…………グローバル人材の育成のために徹底したハイタレント教育が実践されていたことに驚きを覚えた。英語・日本語と教科の言語だけで授業が進められる指導方法の素晴らしさを感じた。学力偏重という批判はあるが、国家や世界をリードする人間は、質の高い教育を受けなければならないことも事実である。彼らが、德育の面で適切な学びをする機会を持ち、国家・地域のために活躍することの必要性を学び、自分の学習を自分のためだけでなく、ESD・EIUの理念につなげてほしい。昼食の時間に日本語を学んでいる生徒と日本語と英語で長い時間話をすることができた。礼儀正しく、かつ子どもらしく、親切的でもあった。私たち教師は彼女のことを見つめ、人対人の関係を適切につくり、日韓・韓日の関係を改善する小さな一步にしなければならないと感じた。

池見繁…………高等学校ということもあり、将来に対するビジョンを明確に持たせていることを強く感じた。韓国の学歴偏重社会では大学に行くことがステータスになってしまい、その先に何をしたいのかという将来のビジョンを明確にもちてない学生が多いと聞いたことがあったが、この学校はそういった社会的課題にしっかりと向き合っていると感じた。全校生の夢や目標が書かれた垂れ幕などは、日本では少し考えにくいが、社会的な問題に正面から向き合い、

思い切った取組ができるところが韓国の教育のすごさだと感じた。またこの学校は全寮制で、朝から夜遅くまで学習に励む環境が整えられている。日本では一般的にスポーツ学科などに多く見られるが、学習面に関してこのようなシステムを整えている学校を視察できたことは非常に有意義であった。単なる学力の注入ではなく、その先にグローバル人材の育成という目標を掲げている点も非常に興味深い。この学校で高い学力と語学力を備えた学生たちが将来どんな仕事に就き、どのように生きていくのかが楽しみである。

公峴津小学校

(A グループ)

8月29日

代表者名:金南鮮(キム・ナムソン)

特色:革新学校の江原幸せ+学校に指定され、現在は3年次の運営中であり、生徒と親、教職員すべてが幸せで満足する教育を目指している。韓国で初めて公教育でウォルドルフ(WALDORF)教育を試みている。エコ生態学校に指定され、エコ生態教育を体系的に行っている。森の中の教室、畑作り、EM 溶液の利用など、周辺の自然環境を利用して持続的に実施している。全人的な存在に成長できるように、教育課程や教育方法、教材を開発し、自然と調和する人間教育を実施している。

公峴津小学校は豊かな森の中にある。この小学校はシュタイナー教育を実践している韓国内初の公立学校である。学校に到着するとすぐに金龍根(キム・ヨンゲン)教頭先生の案内で「森の中の教室」へ行った。そこには3年生が自分たちで建てた家があった。3年次には、テストの内容にも家づくりに関連したものが含まれ「答を見つけ出させる教育」を行っている。続いて校内を見学したが、他の学校には無いものがたくさんあった。芸術性を重視し、校舎にはそれぞれに異なる色が施されている。子どもたちが楽しめる芸術的な壁画も描かれている。教室の色も子どもたちの内面の発達段階に合わせて変えてある。校庭にはケルトの古代紋様の迷路が描かれていて、これは子どもたちの心を落ち着かせるのにも効果的だそうだ。畑では幼稚園や低学年の子どもたちが野菜を育てている。また、木工室もあり、発達段階に応じた木工制作課題に取り組む。人工的な楽器

は使わず、貝やクルミの殻など自然界の物を使って生きた音楽を聞かせている。体育館に移動し、歓迎式と歓迎公演が行われた。歓迎公演は高城(コソン)農樂だった。伝統衣装を身に纏った小学生が、鐘や太鼓をたたきながら伝統的な農作業の様子を踊りで表現してくれた。続いて「動き教育」を参観した。これは「サークルス教育」とも呼ばれ、バランス感覚を伸ばすことを目的とした教育活動である。発達段階に応じて課題を決めてあり、人工的な道具や音楽は使わず、子どもの呼吸に合わせて取り組ませている。その後の授業参観は全ての教室を自由に見て回ることができた。日本文化授業は1年生: 広木敬子主幹教諭、2年生: 辻本和孝教諭、5年生: 大橋佑基主任教諭が実施した。日本の文化や学校を紹介した後で、ケン玉や紙風船などの伝統的な遊びと一緒に楽しんだ。5年生の授業では日本の算数の授業も行った。どの学年の子どもたちも日本の文化に興味・関心を示し、質問したり遊びに熱中したりして積極的に授業に参加していた。昼食後、教師懇談会が行われた。

<韓国側からの質問>

Q: 学級当たりの平均学生数と日本的小規模校の実態はどうなっているか。また小規模校には特色ある教育プログラムがあるのか。

A: 学級の定員は法律で40人と決められているが、最近は弾力化されてきている。特別支援学級の場合は6名、重複支援の場合は3名である。少子化のため、小規模校が増えている。教育内容については学習指導要領によって教科ごとに目的と内容が定められている。国算社理は全国で同じ学習内容だが、特別活動や道徳は学校の裁量が大きくなっている。

Q: 小学校教育で進路教育はどのように進められているのか。

A: 小学校における進路教育には3つの柱がある。①学力向上のための取組(学習意欲、基礎的知識)、②自尊感情を育てる(夢や希望)、③キャリア教育(望ましい職業観・勤労観、知識・理解を基盤とした思考力の育成)。最近では、その中でもキャリア教育が重視されている。

Q: 韓国では若者が都市に移動し、田舎を中心に学校が統廃合されている。日本はどうか。

A: 北海道の場合、3人に1人が札幌市に住んでいるので、統廃合が多い。政府は統廃合をすすめているが、学校が無くなることは地域にとって大きなマイ

ナスとなる。都会からの山村留学を受け入れるなどの工夫をして、統廃合を防ごうとしている所もある。

Q: 韓国では、先生の権威が昔と比べて地に落ちてきている。日本はどうか。

A: 日本も同様の傾向がある。子どもや保護者から信頼される教師になることが重要だと考え、保護者とのコミュニケーションをとったり、資質向上のために教員自身が研鑽を積んだりしている。近年は「モンスター・ペアレント」と呼ばれる保護者もいる。

自分の子どものことしか考えず、無理な要求を学校にする場合があり、対応に苦慮している。

Q: 日本人の「秩序を身につけさせる指導」はどうしているのか。

A: 協調性を重んじる国民性があり、幼いころから礼儀、がまん、思いやり、助け合い、という価値観が育っている。それらは特別な場での指導に限られるのではなく、幼稚園から学校生活や地域のあらゆる場で育てられている。

<日本側からの質問>

Q: 校区内の子どもに限って入学できるのか。別の校区からでも希望があれば受け入れるのか。

A: 現住所が校区内にある子どもたちを受け入れている。

Q: 3年間の取組を通して教員・生徒・保護者が変わったと思えるところはどんなところか。

A: 1年目は保護者が戸惑っていたので校長と教頭で説明した。生徒は戸惑っていたが喜んでいた。保護者は学力低下を心配していた。2年目は足りないところが見えてきたので補っていくようにした。3年目になると保護者が信頼してくれている。教員と保護者で一緒に考え、協力して取り組んでいる。

Q: 教員が異動したらESDの取組などはどうするのか。

A: ESDは学校の取組なので、学校運営や教育の中に位置づければ教員の異動は関係ない。

Q: 教科書選択はだれがするのか。

A: 数国理社は全国共通だ。他は教科書選定委員会で考え、学校運営委員会（学校、PTA、教育委員会）で決定する。

Q: 国旗が掲げられている教室と無い教室があるが、担任の裁量か。

A: 全教室にあるはずだ。前後を逆にして使っていたのでそう見えただけではないか。大韓民国国民なら、みんな教室に国旗があるのを当たり前と思っている。

Q: 国境が近いので何か特色ある平和教育はあるか。外国语教育は力を入れているのか。

A: 鉄原（チョルウォン）郡、東海（トンヘ）市、高城（コソン）郡を平和ゾーンとして北朝鮮と共同で自然調査をしようと考えている。外国语教育は李明博（イ・ミョンバク）政権時代から「世界化」ということで英語教育に力を入れている。そのおかげで最近の子どもたちは英語が話せるようになっている。

（香川県立観音寺中央高等学校 教諭 石原康代）



紙芝居で勤務校を紹介する日本教員

【参加者の感想】

辻本和孝…………いくつかの学校訪問の中で、最も印象的で興味をもったのが公峴津小学校の訪問であった。私自身が小学校の教師であるからということ、交流授業をさせていただいたということは勿論であるが、公峴津小学校の教育理念とカリキュラム編成には驚かされた。シャタイナー教育の理念のもと、詰め込み教育ではなく子どもたちが体験を通して知識を獲得していくと考えているようだ。少人数であるからこそできるという部分もあるが、子どもたちの発達段階に合わせたカリキュラム編成がなされているのだと感じた。極端ではあるが学校の特色を出し、熱心に研究を進めているということがよくわかった。文化交流授業は、とても楽しかった。韓国の小学生も日本の小学生と同じでかわいいかった。2年生らしく、どんなことにも興味・関心を示し、日本の伝統的な遊びを楽しんでくれた。しかし、この小学校を卒業した後、中学生になってどのような効果があるのか、また、将来的にどのような大人になっていくのか、未知な部分が分かってくると、この小学校の評価ができるよう思う。

久田麻衣子…………高城農楽のパフォーマンスに目を奪われ、続いてのサーカス教育にも興味を持った。

体と空間のバランスを高めているからこそ、初めての日本のけん玉にもすぐに対応でき、上手に出来ていたのではないかと思った。「公園があるから学校に来るのが楽しい」と語ってくれた1年生の笑顔がとても可愛く輝いていたのが印象的であった。

石原康代……………シュタイナー教育を実践している学校を初めて訪問したので驚きの連続でした。小規模校だからできることかもしれません、児童の集中力や粘り強さはサーカス教育を通して身についたものだろうと思いました。日常の指導において、「注入ではなく待つ教育」を心掛ける必要があると思いました。

中出安彦……………学年ごとに教室の配色を変えたり、低学年では座卓を利用したりするなど子どもの発達段階に応じて学校環境を整備している点で子どもを中心の学校づくりについて深く考えさせられました。森の中の家づくりや動き教育の様子から子どもたちが意欲的に学校の活動に参加していることがよく分かりました。先生方の教育に対する自信と情熱に感心しました。

韓国教員大学附設月谷小学校

(B グループ)

8月27日

代表者:韓基煥(ハン・ギファン)

特色:2009年にユネスコスクールに登録され、現在は週1回(金曜日)各学年でESDの授業を実践している。具体的には、ESDの柱(リサイクル・畑作りなどを通じた生態教育、ローカルフードの消費やエネルギー問題等を取り上げた経済教育、今後の課題として人権教育などを行っている。「愛の中に夢を育む教育」を教育理念とし、校内の挨拶は「サランハムニダ」(愛しています)だという。忠清北道の授業大会で賞を受賞した教員が多数在籍している。

2グループに分かれて授業見学を行った。特別支援学級(6名、学年混合)では、韓国語の授業を見学した。担任とアシスタントの2名によって授業が運営されていた。1年生(28名)の総合教育では、「おとなりさんと仲良く」いうテーマで授業が行われ、日常生活でのルール等を考えるなど道徳に近い内容だった。4年生のESDの授業は、美術とのコラボレーション授業だった。障害者の人たちの暮らしやすい施設を考

えたり(多文化理解)、学校内の様々な表示について考えるという内容だった。クラス内にはESDに関する生徒たちの様々な取り組みが掲示されていた。小さなことでも教室に掲示することで、達成感を実感できるのであろう。3年生の英語は、担任とネイティブ教員2名により授業が行われていた。机はなく教科書以外に多様な視覚教材を使用していた。音楽に合わせて英語を覚えるのが印象的だった。6年生のESD(環境教育)は、新聞紙・韓紙・コピー用紙を使ってリサイクル紙を作るという内容だった。環境教育が浸透しており、日ごろから裏紙を使ったり、電気の節約が徹底しているという。続いて、ランチルームで給食をいただいた。ビビンバ、キムチ、お味噌汁、蒸しパン、ヤクルトなどが出ていた。給食後、2チームに別れて日本人教員による授業を行った。南・村上・後藤・木村先生チームは、日本の観光地や小学校の一日について説明した。木村・後藤両先生はゆかたを着て授業に臨んだ。その後、お手玉・けん玉・コマの体験、折り紙を渡して手裏剣づくりを行った。菊本・永山・高井・中口先生チームは、日本の小学校の一日、校外学習について説明した。また折り紙体験を行った。意見交換会では、菊本先生、村上先生が学校見学・授業後の感想を述べ、松山先生が日本のユネスコ教育・ESDの現状報告を行い環境・地域とのつながりを重視したESDの重要性を強調した。

<日本側からの質問>

Q: ESDの6年間の積み重ねでみられる変化は?

A: 月谷小学校はESD開始2年目のため、評価はこれから。地域との連携もうまく取り入れていきたい。

(市川中学校・市川高等学校 教諭 本川梨英)



ランチルームでの給食の様子



日本教員による授業の様子

【参加者の感想】

田中幹子…………ESDを取り入れて2年目ということであったが、整備された環境の中で、低学年から高学年まで、ESDに関する教室掲示等がみられ、授業の中でも自然にESDの観点を取り入れた展開がされていた。児童に対し、服装等の生活指導面での制約はあまり厳しくないようであったが、学習規律は徹底されており、落ち着いた雰囲気の中で授業が実施されていた。ICTを取り入れた授業展開が基本とされており、授業内容からも教員の技量の高さを感じた。

永山裕基…………まず驚いたのが、学校の設備である。国立なので公立校よりも古いとはいえ、全教室にPC・プロジェクタ・大型TV完備はさすがICT教育先進国という印象を受けた。そして何より衝撃だったのは教員の情報機器活用力の高さである。どの教室に行っても活用されていた。日本ではめったに見られる光景ではないと感じた。また、英語教育に対する意識の高さも教室の環境からうかがうことができた。環境を作ることで子どもたちの意欲を高められると感じた。

菊本慶子…………韓國の小学校で、日本の文化や小学校を外国として紹介するという貴重な体験をさせて頂きました。自分が当たり前だと思っていたことが、韓国小学生からすると新鮮な外国の文化であることに私自身が気付くことが出来ました。また、子どもたちは韓国の文化と似ているところに親近感を持ったり、違うところに驚いたり、興味を持っており、日本を身近に感じる良い機会になったと思います。

興徳高等学校

(B グループ)

8月28日**代表者名:金昌浩(キム・チャンホ)**

特色: 創立は2003年、70人の教職員が在籍する。また、退職警官等を警備員として採用して、安全管理を実施している。伝統を大切にしつつ、現代の流れも取り入れた教育を実践し、開校5年で「美しい学校」として認定された。「他人と通じ合い世界市民の力量を蓄える興徳人」をテーマに個別ポートフォリオを制作し、自己の夢や体験活動などを記録している。クラブ活動が盛んで、84のクラブが存在。募金活動や模擬裁判など、活動は多岐にわたる。ASPネット活動も盛んで、クラブを中心に行われている。学期ごとに討論会や福祉活動の実施、地域の小学校とリンクしての活動を行っている。

音楽の授業（1年9組・女子クラス）は、作曲の授業だった。理論を行ってから実践へという流れで授業が進行した。生徒による「アリラン」の披露があった。「集中履修制」をとっており、10クラス中5クラスは1学期に集中して音楽の授業を行い、残り5クラスは2学期に授業を行うという。数学の授業は習熟度別に上中下に分かれて行っている。また教科教室制度があり、授業は数学教室で行われる。電子黒板だけでなく、教室の壁面（横・後方）はホワイトボードマーカーで書ける壁となっており、教師と生徒が一緒に考えるときなどに活用されている。日本と同じように机間指導も行われており、一人一人に応じた指導を行っていた。英語の授業は、グループ学習（4名）が行われていた。「『B』のつくフルーツ」はという問い合わせに対して、グループで単語を出し合う活動が行われたが、意欲的に取り組む姿を見る事ができた。射撃部5人が出席する体育の授業の見学では、出席者の中に今年のアジア大会に選手として出場する生徒もいた。生徒たちの実演の後、教員も射撃を体験したが、生徒たちの説明が上手で的の中心近くに当ることができた。授業見学の後、ランチルームで給食をとった。メニューはビビンバ、キムチ、お味噌汁、魚のフライ、漬物などで、座席数がかなり多いのが印象的だった。仕切りはないが男女別に分かれていた。日本教職員による授業は4つに分かれて行われた。①1年1組（女子クラス）を担当した西浦先生・塚本先生チームは、日本文化に

について説明し、寿司屋で事前に取材を行った内容を動画にまとめ説明した。②1年4組（女子クラス）を担当した原田先生・荒平先生チームは、日本の音楽やクラブ活動について説明した。アイドルを中心とした動画を使って説明したが、知っている子が多く反応が返ってきた。③2年1組（女子クラス）を担当した高橋先生・香川先生・板橋先生・後藤先生チームは、日本から着物を何着か持参し、着物の着付け体験を行った。プレゼンテーションソフトを活用し着方を説明した。④2年6組（男子クラス）を担当した千葉先生・松倉先生・本川先生チームは、日本の伝統的な遊び「トントンずもう」を実施した。土俵を作り、折り紙で力士を作成。4、5人グループで活動を進め、最後はトーナメント戦を行った。

<韓国側からの質問>

Q: 日本の文系生徒の入試に必要なものは？

A: 筆記試験だけでなく、面接や小論文の指導も実施している。面接は入退室の仕方、考え方など、小論文については、過去のテーマや今日の社会における問題についてテーマを設定して書かせるなど、実践を多く取り組ませるようにしている。

Q: 日本の高校生に人気の職業は？

A: 「将来就きたい仕事がある」という生徒は全体の7割ほど。残りはない、もしくは考えていない。男子からは公務員、女子からは看護師が特に人気だ。保護者の7割は希望しているところへ就職してくれればと考えている。

<日本側からの質問>

Q: どうして男女別クラスを実施するのか。

A: 保護者からの要望があるため。勉強の集中力を高める目的もある。

Q: 進学率はどのくらいか。

A: 進学率は95%で、主な進学先は地元の大学（普通の大学、職業大学）である。

Q: 授業後に生徒はどのように学習するのか。

A: 授業後、2時間ほどの有料の授業を実施している。さらにそのあと自習等に取り組み、23時ごろ終了する。寮に入っている生徒も多く、遅くまで取り組める環境となっている。

(八千代市立阿蘇小学校 教諭 永山裕基)



日韓教職員による意見交換会

【参加者の感想】

後藤たき江…………こちらの高校は、男女共学だが、男子クラスと女子クラスに分かれて学習していた。ユネスコクラブの学生が出迎えてくれた。日本語を話せる学生もあり、日本に対する興味関心を持ってくれているのだと感じた。数学の授業を拝見したときに印象に残ったことが3つあった1つ目は、ノートは使わず、A4の紙にどんどん問題を解いていく、なくなればまた次の新しい紙に解いていくところだ。ノートをまとめるよりも、問題を次々と解いていくことに重点を置いていた。2つ目は、考えを発表したり、問題を解いたりするために教室の壁一面360度に貼られたホワイトボードだ。書かれた物を手がかりにすることもできるので大変便利だと思った。3つ目は教師の手厚い指導である。わからないと手を上げた生徒のそばまでいき、解き方を丁寧に教えていた。日本の小学校では当たり前のことだが、高校でもそれをしていたので、わからないままで放っておかれることがなく、着実に力につけることができると感じた。

佐光美穂…………自分の勤務する学校と校種が同じなので、とても興味深く見学しました。校舎は新しいものではないけれど、とても充実した施設となっていたのが印象的でした。生徒が一人ひとり作るというポートフォリオの取り組みは、生徒が自分の成長を実感するよい手がかりになるように思います。自分の学校でも取り入れたいと思いました。生徒の学校でのびのびとしている様子、生徒の人懐っこさもとても印象的でした。音楽の授業の見学では作曲理論を学んでいて、演奏中心の日本の音楽教育との違いを感じました。ただ、この学校でも夜の10時まで学校に残って勉強するという現実があるようで、教育庁などで聞いた「大学入試が隨時行われるようになり、学力試験重視の入試から、人物も問われる内

容になった」という説明との乖離を感じました。

菊本慶子…………教育において、日本とは大切にしているものが違うということを実感した。授業中の姿勢や話の聞き方には特に重点を置いていないものの、しっかりと生徒が学習に取り組んでいる様子を見させていただいた。一方で、男女関係なくみんなで一つの物を作り上げる日本の文化祭や体育祭といった行事の大切さにも改めて気づくことができた。韓国の高校生に浴衣の着付けをすることで、日本の文化に触れてももらうこともできた。

塚本和敏…………日本の食文化について授業をしました。お菓子の抹茶・わさび味、すしの作り方、キャラ弁について話をしました。生徒の反応もよく、これから異文化理解についてもしっかりと研究したいと思いました。生徒はメリハリがあり、素直で、落ち着きがありました。ICT授業が充実していて全ての先生が活用していたのには驚きました。

八木絵美…………ユネスコサークルの生徒たちを中心に日本語で挨拶を返してくれた。高校生なのに非常にノリが良く、授業も活気にあふれていた。95%以上が大学進学するとかで、通常授業にプラスした授業などが整備されており、希望すれば11時くらいまで勉強することができるのには驚いた。隙間時間が充分にあったため、高校生と英語で交流でき、非常に楽しかった。小グループでの先生方との懇談でも詳しい学校生活について知ることができてよかったです。

忠清北道教育庁北部英語体験センター

(B グループ)

8月28日

特色: 1、2階にアクティビティコーナー、3階に女子とスタッフの宿泊施設及びカフェテリア、4階に男子とスタッフの宿泊施設、倉庫がある。ALTや調理員、寮母などを含めた10名のスタッフがいる。グローバル化に対応した人材の育成を目指す(英語を通して世界をリードする人材の育成)。実用的な状況に合わせた活動を通して、英語コミュニケーション能力向上させる。A~Dの生徒向けコース、家族や親、英語教師向けのコースがある。

パワーポイントや動画を用いて、学校目標や理念、カリキュラムについての説明があった。その後、授業を参観した。実際の施設を模したそれぞれの部屋



病院を模した教室

でグループ毎に活動を行っている。生徒はグループ毎にハングルと英語での名前、クラス名(英語)などが書かれた名札を下げている。続いて、施設内のレストランでUNICEFの紹介映像を見て理解を深めた。レストランでは、調理実習をすることもあり、調理器具には英語での呼び名が表示されている。サイバーワールドというプログラムでは、4~5人のグループで、英語で書かれた5つのミッションをこなす。ミッションの指示に従い、写真や動画を撮影し、ALTの先生に見せてOKが出たらミッションクリアとなる。場所を移動して行うこともある。カルチャーラームでは、英語でやりとりしながら、ストロー、糸などを使って卵を吊り上げる立体を設計するという授業を行っていた。ダンスホールでは、ALTと韓国人教師のTTが授業を行っていた。授業では、英語でのいくつかの条件を聞いて、相談しながら工夫をこらし最小限の回数で全員が真ん中に敷かれた長い布を横切るというゲームを行っていた。

英語体験センターには、さまざまなコースが用意されている。2014年度実施分としては次のようなものがある。(A) 小学生対象の基礎コース。1セッションにつき48名。忠州、堤川、丹陽の5、6年生。全25セッション。4泊5日のキャンプ。(B) ミドルスクールの基礎コース(夏休みと冬休み)。1セッションにつき48名。忠州、堤川、丹陽の1年生。全8セッション。4泊5日のキャンプ。(C) 特別なニーズのある生徒のコース。1セッションで48名。忠州、堤川、丹陽の特別な学校。全2セッション。1日のキャンプ。(D) 小学生リーダーキャンプ。1セッションにつき48名。忠州の生徒会代表。4泊5日のキャンプ。(E) 教員向け1日英語トレーニングコース。1セッションにつき48名。忠州、堤川、丹陽の小学校英語教師。(F) NEC(Northern English Center)ファミリーキャンプ。4年生の子ども(96名)と父母。1泊2日のキャンプ。(G) 保護者向けキャンプ。

忠州の小学校父兄 48 名。2 日間のキャンプ (H) 英語才能開発コース。月・水の 18:30~20:30。小中学生 (才能開発コース) 30 名。

いずれのコースも生徒の参加にあたって、英語教師の推薦が必要であり、該当プログラム参加中は、学校では欠席日数にカウントされない。

(石川県小松市立板津中学校 教諭 八木絵美)

【参加者の感想】

高橋一勝…………韓国がいかに英語教育に力を注いでいるかを感じられる施設であった。英語教育においてロールプレイは非常に重要であるが、この施設は、様々なロールプレイを行うための教室が多くあり、それらを活用できる能力を持った職員も働いていた。また、この施設に通うことが珍しいことではないということにも驚いた。このような施設が日本にあれば、大いに活用できるのではないかだろうか。

板橋奈緒…………施設・設備も素晴らしいが、その施設をフルに活用して指導できる人材が確保されている（育成されている）ことが重要だと感じた。ここでの 4 泊 5 日間をどのように普段の学校での英語教育に活かしているのかなど興味が尽きなかった。韓国が英語教育に力を入れていることは聞いていたが、早期からの詰め込みというよりは、楽しみながら英語に慣れることや情操教育も大切にしたいという職員の話にもいろいろと考えさせられることがあった。

本川梨英…………日本でも、「少年自然の家」などの公的な宿泊施設があるが、英語に特化した宿泊施設が整備されていることに驚いた。現在、本校では 1 泊 2 日で代々木のオリンピックセンターを利用して国内英語研修を行っているが、講師は外部委託である上、施設利用費等もかかり、費用がかさんしまうことが問題点となっている。しかし、NEC では食事代のみで、英語のプログラムを受けることができるとのこと、行政側の英語に対する意識の高さをうかがい知ることができた。制度や設備面の充実を実感する一方で、中学高校の視察で生徒たちの英語を見て、少々ギャップを感じた。英語が堪能な女子中学生に話を聞くと、「ソウルの英会話スクールに通って英語を習得した」とのこと、学校教育や NEC などの利用のみでいかに英語力を高めていくことが課題

となりそうだ。日本も同様の問題を抱えているため、いかに生徒に意識付けしていくかがポイントになるのではないか。

菊本慶子…………本気で子どもたちが英語を話せる環境を制度として整えている様子が伝わってきた。日本では机上で買い物の場面など学習するが、これほど完璧な施設でネイティブの先生と一緒に学習できたら楽しく英語が身につくに違いないと確信した。日本の制度がやはり現場任せであること、また現場でも机上の学習中心になってしまっていることに改めて気づかされた。自分の授業づくりに置いても、活動を中心として組み立てていけたらと思う。

佳谷小中学校

(B グループ)

8 月 29 日

代表者:安商冕 (アン・サンミョン)

特色:・農山村の幼稚園と小学校、中学校の統合学校である。教師と生徒が家族のようにお互いをいたわる教育を実施し、地域住民と共に山登りや運動会を開催するなどユネスコの理論に通じる教育活動を行っている。朝のプログラムでは小学生は縄跳びを、中学生は図書室で読書活動を行う。1人が1つの楽器を演奏できるように指導している。1 泊 2 日での読書祭りや異文化キャンプや中国との交流も行い、学校・地域・保護者が密接につながる教育実践が行われている。

中 2 の技術家庭の授業では、韓国の伝統衣装である韓服の着付けが行われた。グループ学習 (3 つのグループ) 形式で、1 グループの構成メンバーは 4 人。それぞれがリーダー、モデル、発表者、記録者となり韓服を着ることと韓服を世界に広めることについてという 2 つの課題に取り組んだ。中 3 の国語の授業では、日本の芸能人が自分について語る DVD (韓国語字幕付き) を見たあと、生徒が前に出て、自分の過去・現在・未来について語るという内容であった。一人の生徒は過去には先生との関係がうまくいかなかったことがあったが、佳谷小中学校では楽しい学校生活を送ることができ、将来は技術を身につけて働きたいと話していた。中 1 の音楽の授業は、リサイクル品を活用して楽器を作るという内容であった。学校のゴミを集め、それらを工夫して楽器にし、グループごとに演奏をした。リズム、音の強弱

など一人ひとりが工夫を凝らし素晴らしい音楽を創作した。ゴミを活用することにより物を大切にすることの重要性にも気づかされたと生徒が感想を述べていた。体育館で行われた生徒による演奏では、日本のアニメソング2曲をリコーダーと電子ピアノで演奏してくれた。日本人教師の授業は3つのグループに分かれて行われた。中1を担当した松倉先生、本川先生は、日本の紹介（千葉県・埼玉県・福島県）、紙相撲体験を行った。中2を担当した田中先生、中村先生は、百人一首とカルタ取りを紹介した。またカルタ取り、百人一首のカルタを用いて3グループそれぞれで坊主めくりを行った。中3を担当した佐光先生、八木先生は、筆ペンを用いた書道の基礎練習を行った。続いて自分の好きな言葉を習った書道で表現しオリジナルの扇子を作った。

<韓国側からの質問>

Q: 日本の生徒たちはどのようなことに関心があるのか。

A: 部活動に所属している生徒が多いので、部活動（スポーツ、文化）に関心があるが、ボランティア活動、生徒会活動にも関心を持っている。また流行、アイドル、持ち物、恋愛にも関心があるが、男子は特に友人関係、部活動、ゲーム、漫画にも関心を持っている。

Q: 日本の生徒の生活規定について教えてください。

A: スカートは膝丈、頭髪は中学生らしく清潔感があるようにという一定の基準を示し指導している。装身具は禁止である。学校と保護者が連携して指導に当たるようにしている。

Q: 学校の適正規模について、また小さな学校に対する政策について知りたい。

A: 日本でも学校の統廃合が大きな課題である。統廃合を進めていくという国からの方針が出たが、賛否両論がある。通学距離の問題もある。どういう規模で行うのが良いのか、通学距離のことも考えてガイドラインを作成しようとしている。

<日本側からの質問>

Q: 地域との関わりについて教えてください。

A: クッキー作りを行い地域の方々へ販売し、収益を老人ホームへ寄付をした。

Q: 読書活動について教えてください。

A: 1泊2日の読書キャンプを実施している。クイズ、映画鑑賞、ゲーム、読書をして意見発表などを行う。

今年で6~7年目を迎えた。保護者も参加し、おやつを作ってくれる。

Q: 山間留学生はどれくらいいるか。

A: 小学生30人、中学生10人が留学センターにいる。キリスト教団体へ保護者と一緒に移住し、通学しているケースもある。

Q: 中学生の進路についてはどうなのか。

A: 丹陽では選択できる学校が1校減った。8~9割の生徒が丹陽高校、観光ホテル高校に進学する。

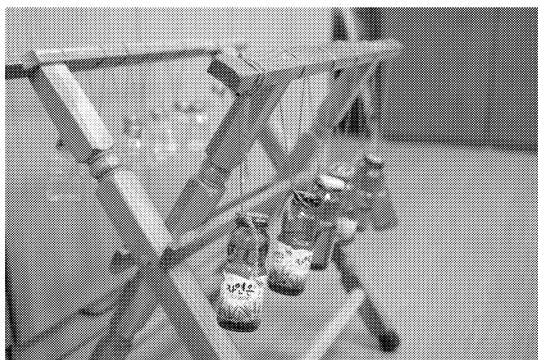
Q: 進路指導について教えてください。

A: 進路指導に力を入れている。体験授業、進路指導を行い、1年生では進路相談の先生が授業を行い、職業について学ぶ。job world centerに関する授業では、報告書をまとめるなどしている。

Q: 防災学習ではどのようなことを行っているか。

A: 避難訓練、安全教育に焦点を当てて行っている。土砂崩れや火災防止について話をしている。年間10時間以上実施している。

(徳島県立城西高等学校 教諭 香川敬子)



ペットボトルや瓶で作った楽器



日本教職員による書道の授業

【参加者の感想】

佐光美穂…………音楽の授業は、ESD の理想形だと感服しました。教科として教えるべきことは教えながら、作曲など生徒の創造性を高める活動や、共同学習も行い、その上でリサイクルという環境教育の要素をすべて融合させていました。総合学習や特別な授業でなくても、工夫次第では通常の教科の授業の中で実践できるのだと理解できました。模擬授業もさせていただきました。不出来な授業だったにも関わらず、生徒がとても協力的で何とか終わらせることができました。家族のような関係を作るという教育が浸透しているため、このようなすばらしい生徒なのではないかと思わされました。

後藤 たき江…………佳谷小中学校の中学生のESD の授業参観が印象に残っている。まず、韓国の伝統衣装である韓服について調べ、実際に着る授業である。韓国ドラマの韓服が出てくる場面を見た後、「日本に着物があるように、韓国には韓服があります」と説明し、これまでに自国の伝統衣装について調べたことを発表したあと、実際に韓服を着る学習は、伝統的なものが次の世代へと受け継がれていく、まさに ESD であると感じた。つぎに、ペットボトルや空き缶といった廃品をつかって楽器を作る音楽の授業である。空のペットボトルを棒で叩いたり、ペットボトルでつくったマラカスを鳴らしたりしながら、韓国の伝統的なリズムを奏でる様子は感動的であった。

「ゴミだと思っていた物も、まだまだ使えるとわかった」と、子ども達の心にしっかりとリサイクルの意識や環境への配慮の心が育っていた。また、中学3年生が、これまでの自分を振り返り、これから自分の進路や人生について考えを発表する授業を見た。

1人の男子生徒が、「前の学校では、先生との関係に悩んだがこの学校では本当にいい思い出ばかりなので卒業するのは寂しいが、これからは自分の人生をしっかりと考えていかなければならない」と話すのを聞き、佳谷小中学校がいかに温かい教育現場であるかということを感じた。農村部であるこの地域は、少子化による学校統廃合で、この校舎での学習は今年度で最後と聞き、日本も韓国も同じ問題を抱えているのだなあと思うと同時にとてもさびしい気持ちになった。また、私たちが訪問した日が、佳谷小中学校での最後の勤務日であったにも関わらず歓待してくださったアン・サンミョン校長先生、並びに教職員の方々、本当にありがとうございました。

木村真由美…………佳谷小中学校へ向かう車中から見える景色、学校周辺の風景が、和歌山の山間へき地を思わせ、安らぎを感じる学校訪問であった。2年後に中学校が統合予定であると伺った。同じ課題を抱え、ますます親近感を覚えた。ユネスコスクールとしての活動は、世界全体との関わりを考えた学習へと広がりが期待できる。より広い視野で物事を考え、行動できる児童生徒の育成のために、小規模校でこそ、国際理解教育や ESD が求められるのかもしれないと佳谷小中学校を訪問して感じた。

村上峻…………現在の勤務校は全校児童31名の小規模校であるが、佳谷小中学校も豊かな自然に囲まれた小規模校であったため、児童・生徒の様子や学校の良さと課題が似ていると感じることが多かった。授業の様子からは、教師も学級の仲間同士も互いに家族のような関係を築いていることが伝わってきた。見学させてもらった授業では、ICT や自作教材の活用などたくさんの工夫がなされており教師の授業力の高さも感じた。少人数であるからこそその良さがある反面、様々な教育活動を維持していく大変さという課題があるが、地域と合同で行事を行うなど佳谷小中学校では保護者・地域からの協力を得ながら教育活動を維持していることが分かった。読書に力を入れている学校で、1泊2日で読書キャンプを行っているそうだが、宿泊を伴わないよう削減することも検討したが「伝統なので継続したい」という意見があり、例年通り実施したという話は勤務校の状況と重なる部分があった。自然に囲まれた環境であるため災害の危険に配慮しなければならないが、セウォル号の沈没事故などをきっかけに安全教育や防災教育に力を入れているとのことだった。

4. スタディーツアー ホームビジット

A グループ

韓国 DMZ 平和生命の丘

乙支展望台、第 4 トンネル

雪岳山国立公園

B グループ

救仁寺、古藪洞窟、鳴潭三峰

清州古印刷博物館

AB グループ

ホームビジット

スタディーツアー

韓国 DMZ 平和生命の丘・乙支展望台

第 4 トンネル (A グループ)

8 月 28 日

特色: 非武装地帯には、南北両方の人が入れないため、約 60 年間自然が守られ、生態系が維持されている。北との休戦ラインにあたるため、軍隊が多く駐留しており、民間人統制区域内に入るのには、厳重なチェックを受ける。北との休戦ラインに接する場所であるという特色を活かして、韓国 DMZ 平和と命のキャンプ教育村が作られた。

民間人統制区域の境界に到着すると、車窓の撮影が禁止となった。銃を持った若い軍人がバスの中に入ってきて、ひとりひとり名簿と照らし合わせて点呼しながら服装などのメモを取られる。韓国 DMZ 平和と命のキャンプ教育村事務局長のファン・ホソプ氏が同乗し、説明を受けながら乙支（ウルチ）展望台へ向かった。もともと幅 4km あった DMZ が、現在はだいたい 2km に狭まっているため、バスは 4 km の内側に入っていった。車窓には黒や青いビニールシートで覆った畑が多くみられたが、朝鮮人参を育てる畑だという。乙支展望台に到着すると、施設内で北側を見ながら林慶花（イム・ギョンファ）さんから説明を受ける。10 時の方向に、北側・南側の防衛ラインが、一番狭いところで 780m にまで狭まっているのがよく見えた。1 時の方向には、1 年に 80 日

間ぐらいしか見えないという朝鮮半島の名峰・金剛山が見えた。かつて北朝鮮は防衛ラインの鉄条網に 2200~3 万ボルトの電流を流していたが、現在は電力不足のため電気は流しておらず、周辺の土をいつもきれいに保つことで、ついた足跡から人の出入りを追跡するような方法をとっている。韓国側は、電気ではなく熱感式センサーをつけ、誰かがくればわかるようにしている。この周辺で北側からの進入があったのは 1 度だけで、約 30 年前に、その脱北者が北側が南進のためのトンネルを掘っていることを教えてくれたために第 4 トンネルが発見されたという。北朝鮮側の写真撮影ができないため、韓国側のパンチボールと言われる亥安面（ヘアンミョン）を背景に団体写真を撮影。第 4 トンネルではトンネルで韓国軍人から説明を受けた。私たちが歩いてきたトンネルは、韓国が北が掘ったトンネルを見つけるために掘ったものであり、右手に伸びるトンネルは北が掘ったものであるという。脱北者の証言により、北が南進のためのトンネルを掘っていることを知った韓国は 249 回目の試掘で北が掘るトンネルを発見し、そのトンネルにむけて横穴を掘っていった。韓国の作業は、27 個の工業用カッターがついたもので掘り進め、1990 年 1 月 24 日、ついに北側のトンネルを発見した。北朝鮮は、このトンネルを使って 1 時間に 3 万人の兵を南に送ることができるということで、1 日 2m ずつ手彫りで掘り進んでいたようである。発見当時、すでに北朝鮮軍の姿はなく、韓国側が掘ったトンネルと出会ったところから北へ 900m 行ったところがダイナマイトの爆破によって埋められ、向こう側へ行けなくなっていた。韓国は発見後、そこをコンクリートで埋め、確実に行き来できないようにした。

韓国 DMZ 平和と命のキャンプ教育村では鄭聖憲（チョン・ソンヒョン）理事長の講義を聞いた。

「平和の定義とは…。我的平和、我と汝の平和、それから真の平和がある。欲をなくすのは難しいが、欲を減らすと平和になる。韓国は今、平和ではない状態である。学生が先生を尊敬しなくなってしまっている。ある調査では、学生が尊敬すると答えたのが、中国では 69% だったのに対し、韓国では 11% だった。日本と韓国の関係を平和にするにはどうしたら、いいだろうか。来年の 8 月 15 日、日本による支配が終わって 70 周年を記念して、両国でなにかできないか計画中である。国と国の平和は難しい。友邦は難しいが、友民はできる。日本海を北東アジアの

地中海と考えて、「平和の海」と名前を変えた方がいい。眞の平和とは、自然との一致、自然との和解、自然との共存である。自分は松の木のそばに行くと平和を感じる。だから、死んだら火葬して灰を松の木の側に播いてほしいといっている。人は地を見なさい、地は天を見なさい、天は道をみなさい、道は自然を見なさい。ここで平和と生命の教育運動と事業をしている。労働、自然体験を通し、自分を振り返ることができる。自然は人の欲を受け取って、平和を返してくれる。分かちあいが平和の基本で、何事もやってみることが大事。**100**をしようと思えば、**40**はすることができる。自分を見つめ、相手を見つめた時に平和のドアが開く。人を責めるのは簡単だからしがちである。日本と韓国という国が仲がよくないのは、安倍首相のせいだけではない。私たちのせいでもある。やりがいを見つける人生を歩みましょう。私は悲観的樂觀主義者である」

(立教新座中学校・高等学校 教諭 田中麻子)



乙支展望台

【参加者の感想】

林留美子…………韓国にとって 1950 年から 3 年間続いた朝鮮戦争は大きな傷であると感じました。平和について深く考える機会となりました。戦争を境に家族親戚が別れてしまうことは切なく思います。北と南の歴史があつて今の韓国が成り立っていて、国民間でも統一への気持ちは様々でした。隣国のこととして、もう一度韓国について歴史を学び、自分の考えをしっかりと持って、日韓の平和を考える会・協議会があれば参加したと思いました。

菅沼祐子…………朝鮮戦争によって南北両国民が分断され、特に周辺地域の住民は困難な時期を送ったという話を知り、戦争の悲惨さについて考えさせられた。また同時に戦争はまだ終わっていないのだと実

感させられた。DMZ の存在が戦争・平和教育のみならず環境教育、市民教育の現場となっているのだと感じた。また、理事長先生の話を聞き、私達はまず「世界市民」であり、「共生」を目指す ESD のベースになる考え方方に触れることが出来た。ESD 活動の最初の課題でもある、周辺を巻き込む方法についても、「必要な物は必要な人（自分達）で作り出す」という姿勢の大切さを学ぶことが出来た。このような体験型学習によって、平和を希求する意識もより高まると考える。

西嶋淳…………韓国が抱える政治的・歴史的問題を、目の当たりにできた体験であった。この南北間に横たわる問題が、彼らの人生、生活に与える影響はとても大きく、日本人である我々には想像し難い部分がある。今回のプログラムで出会った若者が徴兵制や「北」のことを語るときの表情は、文化や娯楽について語るときの彼らの表情とはやはり異なるものであった。その境界線が生む特定地域の中に貴重な生命が息づくことも、私にはアイロニーのように感じられた。

雪岳山国立公園 (A グループ)

8月 29 日

特色: ・雪岳山(ソラクサン)国立公園は、韓国に 20カ所ある国立公園のうち最北に位置する。韓国第 3 位の標高 1,708m を誇る大青峰(デチョンボン)を中心に 181 の峰があり、花崗岩の峰々がいつでも雪が積もったように白く見えるところから雪岳山と名が付いたとされる。1970 年に韓国 5 番目の国立公園となった。1982 年にユネスコの指定する生物保全地域となり、2005 年には国際自然保護連盟(ICUN)により韓国で初めてカテゴリー 2(国立公園として生態系の保護とレクリエーションを主目的として管理される地域)に認定された。現在では年間約 360 万人の観光客が来園しており、韓国政府が提出する世界遺産の暫定リストに記載されている。1983 年に最後の熊が射殺され、その後ロシアから 10 頭の熊を移入して繁殖に努めていることから、月の輪熊が公園のシンボルになっている。国立公園にはビジターセンターがあり、国立公園市民大学を設けている。ここでは環境教育プログラムを実践して子どもをグリーンリーダーとして育成するなど、ESD を推進している。



ハンカチ染色体験

雪岳山国立公園到着後、シンボルである月の輪熊像の前で現地ガイドの説明を受け、飛竜滝を目指して出発する。公園入口付近の飛竜（ピリヨン）橋を渡ると、そこから見える花崗岩の雄大な景色に早くも圧倒される。くるみの多いなだらかな森林地帯を約1.6kmハイキングし、いよいよ山岳地帯に入る。最初の鉄橋を渡り、急峻な山道を川沿いに登っていく。しばらく歩いていると、谷間に架けられた大きな吊り橋が見え、橋まで行くと六潭（ユッタン）瀑布が見える。数日前の降雨により滝の水量も豊富で、その壮大な風景に息を飲む。また、吊り橋渡りはちょっとした冒険気分にさせられる。小さい橋を右に左に渡り、最後に急坂を登ると、ついに飛竜（ピリヨン）瀑布に到着する。ここは昔、白い大蛇が現れ、人々が美しい女性を生け贋として捧げたところ、白蛇が竜になって飛んでいったという伝説がある。公園入口から約2.4km、山道約800km（標高差250m以上）を登り切り、達成感を味わう。記念写真を撮り、下山開始。山岳エリアを抜け、森林地帯の説明を受け公園入口に帰着する。5分ほどバスに乗り、「雪岳山ビジターセンター」に到着。チョ・ヘジンさんの説明に従い、カレー粉を利用したハンカチ染色を体験した。その後、ミニシアターのような会場で映像を見ながらクアク・ヒョンジンさんから国立公園の概要や、約400名の卒業生を出し2011年にESD認証を受けた国立公園市民大学の活動、国立公園市場の運営、環境教育プログラムの実践等の説明を受けた。

(愛媛県立三島高等学校 教諭 合田明典)

【参加者の感想】

合田明典…………韓国の雄大ですばらしい自然に触れ、体感することでその尊さを感じた。それと同時に、

1910年から1945年までこの地は日本領だったということに思いを馳せ、当時の日本人や韓国人のそれぞれが、それぞれの立場で抱いたであろう心情を想像せざるを得なかった。日本には日本の、韓国には韓国のですばらしい自然や伝統文化があり、相互に尊重し合うことの大切さを改めて感じた。

武田國宏…………私は専門が理科教育です。環境学習の第一歩は指導者や児童・生徒が豊かな自然とふれあうことだと考えています。個人的に有名な山でのトレッキング・ハイキングが大好きです。ESDの構成要素の重要な位置を占める、環境教育の推進と私自身の研修のストレス解消にも非常に有効でした。

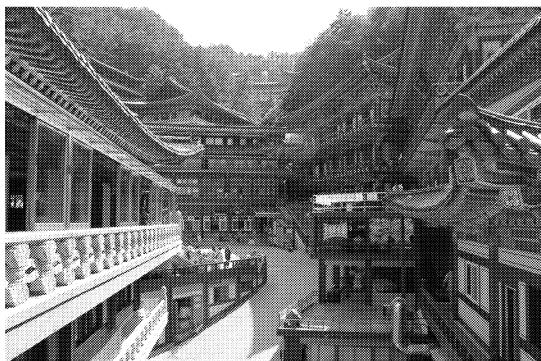
救仁寺 (B グループ)

8月29日

特色：千天台宗の総本山であり1945年に創建された50棟の建物が備わる寺である。主な建築物は大法堂、高光堂、説禪堂などがあり四天王門には国内最大規模の青銅四天王像が安置されている。

駐車場でバスを降り、30分上り坂を歩き、頂上の大法堂を目指した。途中で経堂に立寄り、修行されている方々と出会う。頂上からはうつくしい景色を眺めることができた。韓国らしい色使いの建造物を眺め、伝統的な文化に触れながら歩くことができた。

(埼玉県上尾市立東中学校 教諭 松倉紗野香)



救仁寺

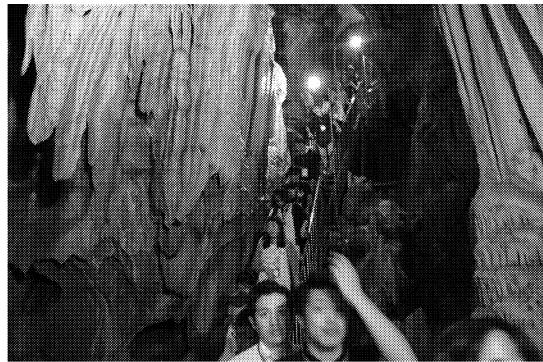
古藪洞窟 (B グループ)

8月 29日

特色:天然記念物に指定された場所で、1300m の距離を持つ国内で一番長い洞窟である。学術的価値が高く、国内最高の洞窟と評価されている。

洞窟の中を 40 分程度歩いて見学。歩道は整備されているが狭い道や低い場所もあり洞窟のつくりを感じすることができた。また、洞窟内の神秘的な雰囲気に触ることができた。古藪洞窟の内部は常に 15 度に保たれており夏は涼しく、冬は暖かい。洞窟内には約 25 種類の生物が生息しており、動物の形をしたライオン岩、たこ岩、わし岩などの岩や人の形をしたマリア像などもあり見所が多くあった。

(埼玉県上尾市立東中学校 教諭 松倉紗野香)



古藪洞窟

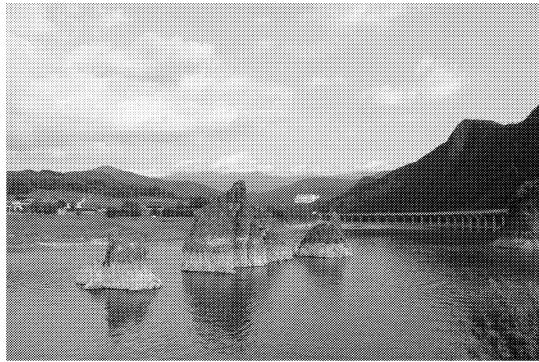
鳴潭三峰 (B グループ)

8月 29日

特色:丹陽八景の 1 つに数えられる絶景の場所。

南漢江の蒼く澄んだ水が悠悠と流れる川の真ん中に 6 メートルの将軍峰を中心に左に妾峰、右に妻峰など 3 つの峰が水上にそびえ立つ場所。鳴潭三峰周囲には 1998 年、音楽噴水が設置され鳴潭三峰や石碑を見に訪れる観光客のためにお店や景色を眺められる場所が用意されている。

(埼玉県上尾市立東中学校 教諭 松倉紗野香)



鳴潭三峰

清州古印刷博物館 (B グループ)

8月 30 日

特色:広く世界の印刷を視野に入れながらも、日本・アジアの印刷に重点を置いて展示されている。「感じる」「見つける」「分かる」「つくる」といった体験を通して、印刷との関わりを自然に発見できる博物館を目指している。今までの技術中心の印刷研究に加え、文化的側面からのアプローチを積極的に行い、「印刷文化学」の確立を目指している。

清州古印刷博物館研究室長のファン・ジョンファ氏から金属活字印刷の歴史と「直指」などの説明を受ける。木版印刷は 751 年以前に始まったという。木版印刷は型を作ると繰り返し印刷できるが、型を作るのに手間がかかるそうだ。木版印刷では、海印寺の 8 万 2 千もの大蔵経が有名で、空調管理の工夫がなされているため保存状態が良く、ユネスコの世界遺産となっている。高麗時代に社会的混乱が起り、書房政治で文臣養成のため多くの本が必要となつたため、木版から活字（金属）印刷へと変わった。1377 年に「直指」が金属活字で印刷されたが、これは金属活字で印刷された現存している世界最古のものとされており、2001 年にユネスコ世界記録遺産として登録された。「直指」は白雲和尚がお釈迦様と徳の高い僧の言葉の要点を整理し編集したもので、本来の題名は「白雲和尚抄録仏祖直指心体要節」である。現在はフランス国立図書館に保管されている。「直指」は興徳寺で印刷されたという。金属活字印刷は、「中国で原理がつくられ、韓国で実用化され、ドイツで普遍化された」とされている。2007 年にユネスコ「直指賞」が制定され、清州市やフランスのパリで授賞式が行われている。

続いて展示物を見学した。金属活字印刷の「文字の数や書体を決める」、「型をつくる」などの印刷工程が人形の展示によって説明されていた。日本の古書は4カ所縫い目があるが、韓国では5カ所の縫い目となっており、一目見ただけでどちらの国で印刷されたものか判断できる。また金属活字は油性の墨で印刷される。金属活字では大きさが変わったり、曲がったりすることがあるという。印刷を間違えると叩かれるなどの罰があったそうだ。

興徳寺跡の見学。1984年、韓国土地開発公社で施行していた「雲泉地区宅地開発」の事業の途中で関連遺物が発見され、1985年に清州大学博物館により発掘された。その結果、「興徳寺」という名門の刻まれた青銅の太鼓と青銅仏鉢などの遺物が出土し、興徳寺の跡地であることが確認された。興徳寺は印刷のための寺として利用されていたと考えられている。

近代印刷展示・文化財展示スペースには、印刷機の展示や色を重ねてカラー印刷ができる過程が分かる展示などがあった。文化財展示スペースでは、展示品の見学と映像の見学を行った。

(気仙沼市立月立小学校 教諭 村上峻)



説明を受ける訪問団

【参加者の感想】

香川敬子…………2013年夏にドイツのグーテンベルク博物館を訪れた時にも感動したが、今回それ以上に心を動かされた。グーテンベルクよりも80年も古い金属活字本として2007年にユネスコ記憶遺産に認定された「直指心体要説」の存在、その認定のいきさつを知るとともに、清州興徳寺跡地を見ることもでき、韓国の素晴らしい歴史に触れる良い機会となつた。

佐光美穂…………学芸員の方に、丁寧な説明をしていただき、今回の訪問の中で一番内容が理解できたと満足できました。15世紀にどうやって活字を鋳造し

ていたかというプロセスや、なぜ「直指」が世界最古だと証明できるのかという話は、とても知的好奇心を満足させてくれるものでした。ここへ来なければ、グーテンベルクが世界最古の金属活版印刷を実現したと思ったままだったことでしょう。隣の国で偉業がなしとげられていたと知り、世界観が変わったかのような新鮮な驚きを感じました。知ることがいくつになってもとても大切なことだということを改めて認識する機会になりました。

原田海希…………世界史や日本史の教材として有効に活用できる資料がいくつもあり、今後の授業などで生かしていきたいと思います。資料集でしか見たことのないものの実物が数多く展示されており、社会科教員としてはとても興味深い博物館でした。

千葉崇…………世界最古と言われる印刷技術を間近で見ることが出来て大変良い体験となりました。当時の人々の技術、費やす時間等を想像することは非常に面白かったです。現在の印刷技術への進化は大変なことで、当時の人々が文字を印刷し後世へ情報を伝える熱意に打たれました。

ホームビジット (AB グループ)

8月30日

【参加者の感想】

西嶋淳…………訪問した家庭は、自動車部品関係の工場を営む父親、専業主婦の母親、高校生の長男、中学生の次男の4人家族である。日本語に関心があり、高い日本語運用能力をもつ高校生の長男の希望でホームビジットを受け入れることになったようである。父親の工場の裏庭でバーベキューをごちそうになった。家族に加え、工場の従業員や得意先の社長も加わり、賑やかな夕食となった。長男の韓国語・日本語の通訳と簡単な英語を用いてたくさんの話をした。休みもなく働く父親、活発で元気な母親、少し恥ずかしがり屋の次男、そして日本の文化をよく知り、鳥取県を訪れた経験もある長男、寡黙ではあるが優しい笑顔をもつ従業員の若いエンジニア、そして気さくな社長さんとの会話が、韓国という国を私の中に生活感のある、実体のあるものとして、存在させてくれる有意義な機会となつた。母親が焼いてくれる肉と、父親と何度も何度も乾杯した焼酎の美味さを私は決して忘れないであろう。食事の後は、春川の人気スポットに連れて行っていただき、美しい夜

景を見ながらまた話をした。「母親とは友達のような感覚で話しができる」という長男の言葉通り、親しみを率直に表現し合う親子関係が微笑ましい。自分の家族が恋しくなった瞬間でもあった。公的な立場での人的交流や歴史・文化施設等の訪問はもちろん必要である。しかし、こうしたひとりの人間同士としての交流は、何よりも国際理解を促進する大きなきっかけとなる。ぜひ今後も継続して行っていただきたいプログラムである。

大橋佑基…………韓国的一般的な家庭を拝見する機会を得た。日本と同じような15階建てのマンションで、エントランスや家の中の作りなども良く似ていた。お家の人はこの日のために、夕飯のメニューや観光の場所など、多くの計画を立ててくださっていた。メディアから得る情報の不確かさを実感した。国にやってきた外国人をもてなし、自国の魅力を伝えたりする気持ちは同じだった。これは、初めてであつた人同士が、話をしてお互いのことを理解し合うことと共通していると感じた。

菊本大樹…………歓迎されるまではとても緊張していたが、とても優しくて明るく迎えていただき、すぐに打ち解けることができた。英語がほとんどできずに不安だったが、何とか意識して英語を使ってコミュニケーションをとろうと努力した。お互いの家族のことや、文化のことを話し、すべてを受け入れていただいたことに感謝したい。普段の生活の様子を知ることができ、とても勉強になるいい機会であった。

西浦博之…………韓國のお宅を訪問して風習や文化・伝統などを直接感じて体験する事が出来た。韓国を訪問する前は、日本との違いばかりに目を向げがちであったが、今回の訪問では自然と共通点を感じ、「日韓はひとつ」・「地球市民」との認識を深めることができた。頭で考えるのではなく、実際にふれあい心の交流が出来たことによる成果である。

田中麻子…………春川市内に林立するアパートの中に入り、外から見るとベランダがないように見えるけど中はどうなっているかなどの疑問が解消しました。キムチ冷蔵庫も見ることができ、おばあさま自作のキムチ（6年物など）も食べることができてとてもよかったです。家父長制が強いとは聞いていましたが、実際にお母さんが専業主婦でお父さんは遅くまで働くので家事はしないなどということもわかりました。「族譜」を見たいと思っていたのですが、お父さんが次男だということで訪問先のお宅にはありません

でした。次男の家にはないということもわかつてよかったです。また、中学生の英語の発音がとてもよいのも印象的でした。そのことを伝えると、「発音よりも内容が大事だ。潘基文事務総長は、発音は下手だけいい働きをしている」とお父さんが言つていて、潘基文氏が韓国人にとっての誇りであることを改めて感じました。

細野紀子…………ご家族みなさん英語が堪能なので色々な話ができる、とても充実した時間を過ごさせていただいた。息子さんはジブリの映画音楽をピアノで弾いてくださり、ご夫婦には春川の夜景を見に連れてていっていただいた。日本の推理小説から、立花隆、俳人の石橋秀野まで日本文学をよくご存知で驚かされたが、同時にとても嬉しく思った。あなたの国に興味がありますよ、ということが一番のおもてなしであるのだと教わった。ヘイトスピーチの報道で、日本に家族で旅行をしたいが心配であると聞き、日本国内の認識とはかなり温度差があると感じた。

両国が安心して行き来できるような関係を作っていくために教育が果たす役割は大きいと改めて感じた。

宗像洋…………ご主人は国立公園で店舗の経営をされている方だった。韓国的一般的なお宅で日常生活の一部をのぞかせていただいたことは、韓国家庭での教育感や国を支える根底の部分が見られてとても有意義だった。ご家庭の第一印象は、まず温かいということ。友人や兄弟を含め3人の中学生も同席していたのだが、どの子も一緒に食卓を囲み私たちの近くで会話を楽しんでいた。お互いに言葉がわからないので会話は英語である。極簡単な日常会話程度であるが、どの子も積極的にコミュニケーションをとろうとする姿に感心した。思春期まったく中の年代の子が家族と食卓を囲み初めて合う日本人と英語で会話をする。日本ではなかなか難しいことではなかろうか。帰りに大龍中学校まで送っていただいた。中学2年生の娘が父親と手をつないで歩く姿に驚いた。聞けば不自然なことではなく、食卓を家族で囲むこと・家庭を大切にすることは当たり前の感覚だという。各学校訪問で感じた児童・生徒の温かさの根本は家庭教育にあるのだと実感した。日本で失われつつある家庭教育。その大切さを改めて感じさせられた。

5. 成果

A グループ

韓国訪問から見えてきた私の ESD 池見 繁

今回の韓国訪問に当たって、私が最も有意義であったプログラムは DMZ 平和生命の丘の施設を訪問し、そこで聞かせていただいた理事長の話である。そこには ESD に取り組んでいこうとする私にとって、大きく 2 つの収穫があった。

ESD は持続可能な開発のための教育と言われるが、いまひとつ理解しにくい。私にとっては、「今生きている世代のニーズを損なうことなく、将来の世代のニーズも満たすことができる社会を作るための教育」という言葉のほうが分かりやすい。世界では先進国を中心に豊かな生活が送られ、そのつけは開発途上国が背負うという形になっている。世界中が先進国のような生活を続ければ、地球の資源は枯渇してしまう。この話を聞いたとき私にとって ESD の必然性が明確になった。

しかし、ESD について学ぶにつれ「今生きている世代のニーズを損なうことなく、将来の世代のニーズも満たすことができる社会」など本当に存在するのかという疑問が私の中に浮かんできた。その中で今回訪れた DMZ 平和生命の丘でのプログラムが大きな示唆を与えてくれた。それは平和生命の丘の理事長がおっしゃった、「欲を無くすのは難しいが、欲を減らすことはできる。一人ひとりの市民が小さなことを実践して、世界市民としてつながっていくことが重要である」という言葉である。この言葉を聞いて自分の目指すべき方向が見えてきた気がした。欲を減らすということは非常に難しい。子どもたち

にとって、目の前にあるものは当然で、だんだんと当たり前のものになっていく。たとえば、韓国の子どもたちが当たり前のように給食を残すことや日本の子どもたちも同様に給食を残したり、まだ使えるものを放り出して新しいものを購入したりすることなどである。このようなことは韓国や日本の子どもたちの間で、恐らくさしたる罪悪感もなく行われている。まずはこの価値観を変えていくことが小学校教諭としての自分のできることではないかと考えた。これが一つ目の収穫である。

そしてそのために重要なのが国際理解教育ではないかと考えるようになった。これが 2 つ目の収穫である。私にとって国際理解教育というと「外国のことを知ること」という文字通りのものであり、何のために行うのかという目的や意図が明確ではなかった。しかし理事長の「世界市民としてつながっていかなくてはならない」という言葉を聞いてその目的や意図が見えてきた気がした。グローバル化が急速に進む中、今 ESD で取り組まなければならない環境や人権、平和などの課題はすべて地球規模の問題であり、一国だけで解決できる問題ではなくなっている。言い換えれば国と国、そこに住むすべての人と人が協力して取り組まなければならないのである。そのため国際理解教育を通して、国家間、たとえば日本と韓国の文化の共通点を見せていくことで、子どもたちに「同じなんだ」という認識をもたせることが重要となる。違いではなく共通点を見せるのである。国際理解教育を通して子どもたちに地球規模でのつながりを意識させることが、ESD の取組をよりいっそう効果的なものにしていくのではないかと考えた。

今回の韓国訪問でいくつかの学校現場を見せていただいた。これをもってすべてとはできないが、それぞれの学校が特色ある教育の中で ESD の取組を行っていた。そしてその目指すべきところは「欲を減らし、一人ひとりの市民が小さなことを実践して、世界市民としてつながっていくこと」であると信じている。そのための大龍中学校の自主性を尊重したサークル活動であり、江原外国语高等学校の豊かな語学力と高い学力をベースとしたグローバル人材の育成であり、公峴津小学校の豊かな自然を活用したシャイナー教育なのだろう。今回のプログラムで ESD の取組のあり方が多岐にわたることが理解できた。しかし決してなんでもありというわけではない。これから私が ESD の取組を行うにあたつ

ては、それが「欲を無くすのは難しいが、欲を減らすことはできる。一人ひとりの市民が小さなことを実践して、世界市民としてつながっていくことが重要である」という本プログラムで得た考え方に向かっていくものなのかを、常に振り返るようにし、様々な「つながり」を大切にしたと考える。

韓国での出会いと感動を忘れずに 石原 康代

今回のプログラムに応募するにあたり、私が設定した課題は、韓国の学校でのESDの実践や英語教育の実情にふれることと、韓国では生徒の「心」をどのようにして育てているかを知りたいということだった。

ESDの実践については、DMZの自然調査を北朝鮮と共に共同でしようという計画や、大龍中学校の生徒たちが取り組む「ローリングエコ」クラブの活動を知ることができた。地球環境問題について生徒が各自でテーマを設定して研究するとともに、地域社会への啓発活動に取り組んでいるのを知り、もっと学校の外に出ていく活動を生徒に考えさせなければならないと感じた。また、DMZ平和と生命のキャンプ教育村チョン・ソンヒヨン理事長のお話にあった「私の平和・私とあなたの平和・眞の（私たちの）平和」という言葉には感銘を受けた。自分の生活を世界とのつながりの中で意識させる“Think globally、act locally.”という考え方を、生徒にも分かりやすく伝えることができるのではないかと思う。

英語（語学）教育に関しては感嘆するばかりだった。生徒の英語に対する関心が高く、小学生でも知っている単語を使おうとする。この積極性は日本の生徒にぜひ見習わせたいと感じた。江原外国语高等学校の英語コースの授業では生徒の英語力と外国人教師の指導力に驚いた。また大龍中学校でも「平昌オリンピック」の広報活動をしている内容を英語で発表、質疑応答をしていた。彼は6年間アメリカとシンガポールで生活していたそうだが、同じグループにはカナダ等英語圏への留学経験がある生徒が複数いた。このような生徒が同じクラスで授業を受けることで、他の生徒にとっても大きな刺激となっているのではないかと推察した。また施設面では、外国語の学習には専用教室があること、ほとんどの教室でPCと教室前部のテレビが接続されていてすべてに利用できること、スライド式黒板で素早く活動を

切り替えられることなど、効率よく語学学習に取り組む環境が整っていると感じた。

8日間の訪問を通して最も印象に残ったことは、韓国で出会った生徒たちの明るく伸び伸びとした姿だ。どの学校でも、それ違うたびに笑顔で元気な挨拶を日本語・韓国語でし、積極的で人なつっこい。私の勤務校の生徒も挨拶をよくすると言われるが、とても比較にならないと感じた。日本文化紹介の授業では、生徒たちが協力的で「日本のことを探りたい」という知識欲を感じた。公開授業でも意欲的に取り組む姿が印象的だった。大龍中学校で生徒代表と懇談した際には、お互いに知りたいことがたくさんあり時間を延長するほどだった。最後に彼らに将来の夢を尋ねたところ、就きたい職業を即答した。ためらうことなくはっきりと表現できるだけでなく、互いにその夢を温かく認め合う雰囲気も素晴らしいと感じた。江原外国语高等学校でも同様に感じた。彼らの「知的好奇心・学習意欲・あきらめずに努力できる粘り強さ・創造力」はどこから生まれてくるのだろうか。どうすれば、これほど前向きに学習に取り組むようになるのだろうか。このような生徒たちと出会えたことは大きな喜びであったとともに、帰国後、何事にも受け身の生徒を目にしていると、大きな課題を突き付けられているような気がする。韓国では、子どもたちは両親・友人や教員を尊敬し、きちんと話を聞き、互いに愛情を持って接するという関係が確立されているように感じる。これは私が日頃接している高校生と大きく異なる点だ。最後の報告会でのKNCUの方の言葉にあった「家庭教育」を基盤として「学校教育」「社会教育」が成り立っていくという教育のあり方は大切だと再認識させられた。今回の感動を忘れずに、目の前にいる生徒の中で眠っているはずの知的好奇心や積極性を呼び覚ますことを目指しながら指導していきたいと思う。

ユネスコスクールの理念を 授業に生かすこと 大橋 佑基

「韓国を訪問する」というのは、メディアの情報だけを頼りにしていくと、大事になるとを考えていた。反日、嫌韓などの言葉と映像が、毎日、否が応でも目に入ってくるからだ。しかし、昨年度、このプログラムに参加した先輩教諭からはその言葉の独り歩きについて多くの話を聞いた。実際、自分の中にも

韓国に対して特別な感情はなく、このプログラムに参加することで自分の目で韓国という国を見て、お互いの国の現状や自分の仕事とつながる教育に関わる事、そしてふれあう人のことを見てみたいと思っていた。

また、昨年度から勤務校がユネスコスクールとなり、韓国、モンゴル、アメリカ、中国などたくさんの国の教職員をお迎えする機会を得た。また、勤務校のある稻城市が全校でESDを推進することになり、パイロット校としてESDの先行研究を行い、研究発表会を行った。ESDが持続可能な教育を目指していること、ユネスコスクールは海外とのネットワークを広げることができることは理解していたが、その二つがつながるはつきりとした理由は理解していなかった。

しかし、本プログラムに参加して、その答えにつながるであろうキーワード、「平和」、「教育」、「人」について深く考えることができた。そのきっかけは、公峴津小学校訪問である。公峴津小学校で文化交流授業をする機会をいただき、授業の内容について考えていた。そして、1時間の授業が終わった時に韓国の子どもたちに「日本の学校も楽しそう」、「日本の授業も楽しそう」、「日本と韓国は似ている」と感じてほしいと思い授業を組み立てた。算数の授業では、数字や演算記号が共通の言語だったため児童の関心が高く、発見した課題について児童が「知りたい、分かりたい」と思う気持ちは共通していた。最後に、勤務校の児童が書いた暑中見舞いのはがきをプレゼントした。そして返事を書いてもらえるか尋ねると「いいよ」と快い返事が返ってきた。子どもたちは訪問が終わるまでに書き終えるため休み時間も利用して書いてくれたが、その姿にとても感動した。さらに驚いたのは、児童が書いた手紙の中に日本と韓国の国旗を背景に手をつないでいる子どもの絵が描いてあったことだ。平和であることを望み、それを表現している姿に、感動とともに申し訳ない気持ちも生まれてきた。自分自身の中で日本と韓国が手をつないでいる絵が想像できていなかつたこと、自分の学級の児童の中に平和への思いを表現する気持ちを育てていなかつたことにである。

人と人が出会った時に、自分と違うところに目を向けるのか、似ているところに目を向けるのか、どちらか一方に目を向けるのではなく、両方をバランスよく見て共に歩き出すことができたら、学級の中からいじめや仲間外れなどがなくなっていくのでは

ないだろうか。そして、その考え方を身に付けた子どもたちが成長し、出会いの場が学級から地域となり、そして国と国となった時、また一步平和に近づくと考えた。ユネスコスクールの一員として、ユネスコの目指す「平和」のためにESDを教育の幹としてとらえ、自分の身近なところから始める道筋が見えた気がした。

韓国の「安全教育」と 日本の「防災・減災教育」

樋木 千枝

今回のプログラムに参加するにあたり、自分自身に設定した課題が2つありました。1つ目は、韓国の防災や減災についての先進的な教育の事例を知ること。2つ目は、東日本大震災のときに韓国の方々からいただいた支援や励ましに対して、感謝の気持ちを伝えることです。

1つ目の防災や減災について、訪問先の教育委員会の方々や学校の先生方と話をしました。江原道教育委員会で、「命を守るために教育については、どのように行っているか」と質問をすると、「2014年のセウォル号の事故を受けて安全について強く意識するようになった。各地で『安全！安全！』とデモ行進が起り、慌しい状況が続いている。教育委員会としては『旅行時の安全マニュアル』などを作って各学校に配布した。次世代を担う子どもたちには、『安全であることはとても大切なことなのだ』という教育をしていかなければならない」とのことでした。大龍中学校では、「火災を想定した避難訓練を年に2回程度行う。サイレンを鳴らし、各学年ごとに指定された避難場所に行くというもの」とのことでした。江原外国语高等学校の生徒は、「地震はごく稀にあるが、強くは揺れない」と話していました。先生は、「授業中の火災、寮での火災を想定して、年に1~2回避難訓練をしている」とのことでした。公峴津小学校では、「2011年3月11日の災害を重く受け止め、津波対応の避難訓練もするようになった。また、北朝鮮の攻撃に対応するための避難訓練もしている」と話していました。韓国それぞれの訪問先で、防災について話をし、教育の現状について知ることができました。

2つ目の、東日本大震災のときに韓国の方々からいただいた支援や励ましに対して、感謝の気持ちを伝えるという点については、文化交流で歌を披露する

ときに果たすことができました。訪問した学校や歓迎晩餐会で日本の教職員からの出し物を行い、「アリラン」と「花は咲く」を歌いました。私は、文化交流係として曲の紹介をする機会を与えていただき、それとあわせて韓国語で「東日本大震災の時には、韓国の方々からもたくさんの応援をいただきました。感謝の気持ちを込めて歌います」と話し、感謝の気持ちを伝えることができたと思います。

今回、プログラムに参加し、韓国の防災や安全についての教育の現状を知ることができました。海沿いの地域の学校では、東日本大震災を受けて津波への意識が高まっていることが分かりました。ただ、防災や減災について授業を通して子どもたちに力をつけるということは少なく、その点においては、現在の気仙沼の方が先進的な取組をしていると感じました。また、私達が東日本大震災を経験して、「防災・減災教育」をすることが大切だと考えているのと同じように、韓国ではセウォル号の事故などを経て「安全教育」を行うことが大切だと考えているところも分かりました。

国や地域の現状によって、どこに力を入れて教育をしていくかは異なると思います。ただ、日本でも韓国のように「安全教育」をしてくことは必要だし、韓国でも「防災・減災教育」が必要だと思います。それぞれの国や地域の現状に合わせて「安全」や「防災・減災」の教育をしていき、それらの情報を共有することで、より充実した教育活動を行っていくことができるようではないかと思いました。

私は今後の教育活動を通して防災教育を積極的に行い、その情報を発信したり共有したりしていきたいと思います。また、それと合わせて、東日本大震災のときにいただいた支援への感謝も伝え続けていきたいと思います。

韓国の教育改革について 川西 嘉之

数年前から韓国の教育事情（特に数学教育及び大学入試）に関心があり、数年前、個人的に韓国の高等学校を訪問したことがあった。今回は高校だけではなく、小中学校にも訪問できることになり、教育事情を詳しく聞くことができた。7月30日の事前研修で概要は少し聞いていたが、8月27日の江原道教育庁での説明及び8月31日の韓国教育開発院の講義を聞いてさらに理解が深まった。韓国教育開発院の講

義は「創意的な人材育成のための韓国教育の改革課題」というテーマで、第一にグローバル化時代に対応するためには創意性を持った人材の育成が重要であるとし、韓国の未来の教育の方向としては、創意性を中心とすることを打ち出している。生徒を誠実で正しい人間に育てるため、学歴やスペックよりは創意性と想像力を含むチャレンジ精神、冒険心、協同、誠実、忍耐、粘りなどの品性教育がさらに重要であるとし、生徒一人一人の「夢」と「才能」を最大限に發揮するためのものにしたいとしている。

韓国の教育はこれまで知識注入型の教育、教師による詰め込み教育等を中心に行ってきたが、2~3年前から従来とは異なる教育（「幸せ教育」や「高校平準化」など）が行われている。それは「行き過ぎた受験競争中心の教育」とそこからくる「学校生活が幸せでない、学校は子どもたちが楽しく勉強したいという場ではない」という親や生徒たちの反応に答えるためのものである。「幸せ教育」は、学ぶ主体である生徒の興味関心と創意性を最大限に保証するものとしている。その1つの方策として、中学2年生の1学期間に「自由学期制」を取り入れ、正規の課程を脱して生徒自らの発想に基づいた学習等を行うもので、試験的に研究校で実践しているらしい。具体的にはどのような内容なのか、どのような問題点があるのか等も含めて大変聞きたかったところであった。

2つ目は「高校平準化」と「入試競争の緩和」である。以前は高校入試についても、過度の受験競争があったようで、今回の改革では高校入試を行わず、生徒の中学校の内申点等を基に、コンピュータで公平に割り振りして、高等学校を平準化していると聞いた。しかし大学入試については、従来の過度の受験競争が残っているようで、科学高校、外国語高校や一般高校（普通科高校）では、生徒は夜10時ごろまで学校で勉強したり、塾に行っていると聞いた。大学入試についてはどのような改革が行われているのか聞きたかった。

ところで、日本は、2002年から2010年まで、「ゆとり教育」が行われたが、破綻してしまった。学ぶ内容と学習時間を減らした結果、学力低下をまねいてしまい、PISAの学力調査の結果に対する反動で、全国学力テストが、小学校6年生と中学校3年生で実施され、従来の学力観に戻ってしまった感がある。私個人としては、韓国の教育改革は、日本の失敗した「ゆとり教育」を十分検証して、その教訓を生か

してほしいと願っている。上記のことについて、韓国の先生方や教育関係者と、意見交換する時間がもっと欲しかったのが正直な感想だ。

最後に、Aグループの24名のパワフルな皆さんとお会いでき、有意義な時間と空間を持つことができ、さらに広いネットワークを作ることができて、大変良かったと思っている。皆さんに心から感謝している。

違いを知るより必要なこと 河邊 友美

私が参加にあたり設定した課題は、日本にとって最も近く、似たところも多い外国である韓国の文化を実体験として学び取り、理解することであった。しかし、このプログラムは韓国の文化を学ぶ以上に多くの学びがあった。最も大きな学びは、「違いを認め理解する以上に、共通点を探しそれを尊重し合うことが大事である」ということを知ったことだ。

地理的な距離が近いとはいえ、韓国はやはり「外国」であった。ことばは語順や文法が似ているとはいえ、全く違う。会話を聞き取ることができない。文字もひらがなやカタカナと違う。また漢字もほぼ使われていない。食事も食べきれないほど出され、少し残すことが礼儀とされている。人々も日本人と似た顔のようだがどこか違う。そのからだはやや大きめだ。スーパーマーケットは日本よりも欧米に似ている。入国したとたんに文化の違いというシャワーを浴び続け、毎分毎秒新しい情報が入ってきて目が回りそうであった。

韓国が「外国」であり様々な文化の違いがあることは日本にいる頃から知っていたことも多かった。一方でひとまとめに「韓国」、「韓国人」という認識をもっていたことも確かである。しかし、このプログラムにおいてそのひとまとめにしてしまっていた認識を改めることができた。江原道教育庁ではみんなが幸せになるための教育をしているということだった。みんなとは、児童生徒、保護者のみならず教員も含まれている。教員を分掌から解放し、児童生徒との交流時間を増やす施策を行っているとのことだった。日本の教員と同様に、韓国の教員の方々も分掌よりも生徒とかかわる時間を持ちたいと願っているのだと感じた。江原道の小中高校を訪問させていただいたが、児童生徒についてもやはり国に関わらず同じ子どもなのだと実感することができた。日

本の子どもたちよりも積極的ではあるが、友達とふざけ合るのが楽しかったり、机に落書きをしてみたり、大人と接し認められることを喜んだりと本質は同じであった。また、韓国の教員の方々も子どもたちを伸ばしたいと思い、授業への工夫を重ねていらっしゃった。ことばの壁さえなければ、何時間でも教育談義に花を咲かせることができるだろう。

また、韓国の人々を個々人として改めて認識することができた。各施設の訪問はもちろん、同行してくださったユネスコ韓国のみなさまが温かく接してくれたおかげである。一日中一緒に過ごすことで日常のさやかな悩みや喜びを共有することができ、日本人と韓国人というよりも個々人としてのつながりを感じた。また、ホームビジットにおいても、韓国文化よりも年頃の少年の家族観や思春期の子どもを持つ親の気持ちに触れることができ、多くの共通点を見出すことができた。むしろ、文化の違いをほとんど感じなくなってきた。

持続可能な発展をしていくための第一歩は人々が違いを認識し受け入れることだと、プログラム参加以前は考えていた。しかし、プログラムが終わった今は、違い以上に共通点に気づき個々人として認識し合うことが、その第一歩だと考えている。世界中の人々が国は違っても互いに共通点をたくさんもつ個人同士であると実感していけば、世界は平和になる。そして、いつまでも発展し続けられるのではないか。その気づきを、まずは自分の身近にいる生徒たちに伝えていきたい。

韓国の教育からの学び 菊池 和子

私は今まで夜間中学で十数名の韓国籍生徒を受け持ったのですが、老若男女問わず例外なくしっかりと自分の意思をもち、きちんと主張でき、かつ目上の人や先生を敬う儒教心をもっていました。今回このプログラムに参加するにあたりどのような教育、家庭環境によってそれが育まれるのか。その一端でも知ることができれば、それを今後の私の教育活動に生かせるのではないかと思いました。

この短いプログラムでもいくつかヒントはつかむことができました。まずは家族の結びつきの強さです。親の子に向き合う姿勢が違うと思いました。ホームビジット先でも感じたのですが、子供にかける教育費を何よりも優先しています。また何か問題行

動等があつたら体をはつて対峙するという覚悟も感じられました。親の愛情を感じているせいか自然と子供も親を敬い、愛情に包まれて自分に自信をもつて育っているのではないかと思いました。

次に教師が授業に集中できる勤務環境があります。事務作業や部活動がない分、教材研究や生徒に向こう時間が確保されていると思いました。日本の教員は忙しすぎて生徒の話をゆっくり聞いて上げる時間がとりにくく精神的余裕がない状況におかれ、その結果、生活指導におわれることになるなど悪循環に陥ってしまうこともあります。韓国では、ほめたり、認めたりするなど生徒と向き合う時間が多くとれないと感じました。

また宿舎生活や軍隊等、集団で生活する体験があります。長い集団生活の中ではそれこそ合わない仲間がいたり、葛藤があつたり、その中で自分を振り返り、言葉できちんと相手に気持ちを伝える必要性があり、その訓練ができているのではないのでしょうか。きちんと見守る先生、指導者がいるなかで、集団生活のなかで揉まれることは成長過程においてプラスに作用しているのではないかと思われました。

最後に今回ESDの概念や取り組みを改めて学習し、上記のこととはすべてESDにつながっていると感じました。また、今まで私が取り組んできたこと、一度挫折しやり直しのため夜間学級の門をたたいた生徒に生きる力をつけさせることもすべてESDにつながることだと感じました。この思いを仲間と共有し、広め、ともに生徒に向こう合っていきたいです。

ESD でつながる日本と韓国 菊本 大樹

「ESD」という言葉は以前から知っていたが、その意味をほとんど理解していなかった私にとって、この1週間の研修は、本当に有意義なものであった。これほどまでに奥深く学んだ研修はなかったと思う。

この1週間のプログラムを通じて感じたことは、持続可能な教育とは、「つながり」を重視する教育である、ということである。それは、日本と韓国がただ単につながるのではなく、教育・自然環境・平和・人権・政治など、あらゆる分野での持続的つながりが大切であると言うことである。

学校訪問では、一人ひとりの発達段階に合わせたカリキュラムで行われる教育、対話的コミュニケーションを重視し、将来の「生きる力」を養う教育、

生徒の知的好奇心を重視した表現力を伸ばす教育やグローバルリーダーの育成に取り組む学校など、学校によって様々であることを学んだ。それまで私は、「知識注入型」教育のイメージが強かったが、お互いに意見を交わし、他の人の意見も聞き、協力して取り組むというESDを着々と実践していることに驚いた。

また、私が日本文化授業を行った大龍中学校では、日本の文化に関心の高い生徒が多く、どうにかしてつながることはできないだろうかと感じた。交流をもつことももちろんだが、「いかに日本の教育に取り入れるか」をこれから重点的な課題にしたい。そのためには、まず「お互いを知る」ことから始めたい。今、中学校3年生を教えているが、政治に対して関心を持つ生徒が少ないと感じる。それは、「自分には関係ない」と思っているからだと思う。DMZ平和生命の丘で講演をしていただいた理事長は、「自分が幸せになることで、他人が平和になる」とおっしゃった。そのためには、今ある課題から逃げずに向き合うことがたいせつで、解決の兆しが見え、お互いの硬い扉が開くと思う。そのようになるために、事実を正確に生徒に伝え、どのようにすれば平和が訪れるだろうかということから目を背けずに、課題を設定し、その課題と向き合い、解決する力を身につけさせたい。そのようにすればお互いの距離が近づく。そのためにも今後、このプログラムは続けていくべきだと思う。国は違えど、やはり近隣国同士、学ぶべきことはたくさんあった。それを少しずつでも実践していき、学習指導要領にもある「生きる力」の育成に尽力していきたい。教育のレベルでのお互いの交流を継続・増進することで、日本と韓国の距離が近づくと思う。

このプログラムに携わっていただいたACCU、KNCUの皆様やグループを共にしたAグループの皆様にとても感謝している。これから実践していくことがスタートだと思うので、ここで終わらせることなく、日本の持続的発展のために、未来の日本を背負う生徒たちを全力で教育していきたい。そして様々なことを学び、またそれを実践するという良い循環でのサイクルをつくっていきたいと思う。

『反日』『嫌韓』で揺れる日韓両国と、市民交流の意義 合田 明典

近現代における歴史問題に加え、近年の領土問題、慰安婦問題、さらには安倍首相と朴大統領の政治姿勢から、現在の日韓関係は決して良好とは言えない。2003年の「冬のソナタ」をきっかけとして韓流ブームが巻き起こり、K-POPはすっかり一つの音楽ジャンルとして定着しているが、その一方で徐々に「嫌韓」の風潮が高まってきているように思われる。2012年の李明博前大統領による竹島上陸と天皇（日王）への謝罪要求、2013年に就任した朴槿恵現大統領による世界各国での日本批判は、ニュースでも大きく報じられた。感情的にヒートアップする韓国の姿に嫌気がさしてきたかのように、日本国内の書店には「嫌韓」の本が並び、韓国への嫌悪感が高まりつつある。マス=メディアを通して見える韓国は、反日教育を国家を挙げて推進し、「反日」がすべてに優先して「親日派」と見られることを極端に嫌うという姿である。このようなことから、多くの韓国民は日本人のことを心から嫌っているのではないかという疑心暗鬼が生まれ、韓国に対する否定的な国民感情が醸成されてきている。

私が今回のプログラムに参加した最大の理由は、そのような状況下だからこそ、韓国の人々と交流の輪を広げるとともに、彼らの考え方や学校教育の様子を、実際に自分の目で見、耳で聞き、肌で感じる必要性があると考えたからだ。つまり、今回の目的や設定課題は、学校の生徒や先生方、町の人々と少しでもたくさん交流を深め、マス=メディアで報じられているイメージの真偽を検証することで、「近くで遠い国」と言われてきた隣国との友好関係の構築を模索することにあった。

実際韓国の方と接してみると、前述のようなイメージとは全く異なる様子に驚かされた。日本人であるということで嫌な顔をされることはない、学校はもちろん町の中や市場でも全くなかった。それどころか、意外なほどみんなとても優しく親切かつ友好的だった。そのことは大変嬉しくもあり、逆にステレオタイプ化された韓国へのイメージとの大きなギャップにとまどいもした。大龍中学校では、生徒会の生徒と意見交換をする場があった。そこで私は「韓国に来て、私たちの接する際の皆さんの雰囲気が良く、

とても嬉しく感じている。日本では韓流ブームがあり、私の家族も韓国ドラマが大好きだ。その一方で、韓国の人々が反日を掲げる姿が報じられることが多い。皆さん自身は、そのことについてどのように思っているのか。また、友達の中で日本は嫌いという人はどのくらいいるのか」という内容の質問をした。これに対し、生徒会副会長の男子が挙手し、「自分はそういう感情はないし、自分の周りにそういう人はいない。政治的な対立と自分たちの気持ちは別もの」という回答があった。また、担当の先生からは「一部の活動家の言動がネット上を賑わしたりニュースで報じられたりすることがあり、マス=メディアの影響が強いのではないか。というのも、学校で歴史を学ばず、メディアの情報に左右されやすい生徒ほど反日の傾向を持ちやすい」という指摘をいただいた。韓国の高校における国定の教科書「国史」（日本語版）を通読すると、韓国の生徒が歴史を学ぶ中で、いわゆる「日帝支配に対する抵抗＝愛国＝善」という価値観が共有されていることは理解できる。教室には竹島（彼らのいう独島）の地図が掲示され、「日本海」は「東海」と書き直されており、安倍首相を強く批判する先生もいた。しかし、私自身の韓国へのイメージは今回の韓国訪問によって一変し、と同時に国家間の問題と市民レベルの交流について深く考えさせられた。そして、課題を抱えている関係であるからこそ、国際交流を推進していくことの重要性を実感した。また、国際交流で大切なことは個人と個人の結びつきではないかとも思った。今回訪問させていただき交流をした生徒の皆さん笑顔を私は忘れないし、韓国側スタッフとは友人になることができた。彼らに対する私の心の中での結びつきは、仮に国家間の関係がどのような状況になっても変わることはない。彼らのことを思い出すことで、どのようなニュースに接しても、今後韓国との友好を放棄しようとは考えないだろう。この体験は、学校現場で国際交流や歴史教育を推進していく上で、大きなヒントになった。

ESD の充実のための意識変革 武田 國宏

ESD の根幹はすべての人々の人権の尊重、平和の創造、多様性の尊重である。今回の韓国訪問は私にとって韓国に対して持っていた今までの作られたイメージを、体験を通してとらえた実像に変えるこ

とであった。韓国に対するネガティブなイメージを変えてくれた小学生・中学生・高校生・ホームビジットの家庭の方との出会いは感動的であった。日本文化授業での小学生の笑顔、中学生の真摯な態度は日本の子ども達と同じであった。外国语高等学校の子ども達との出会いは驚きの連続であった。英語の授業は英語のみで、日本語の授業は日本語のみで進められており、特に日本語を楽しそうに学ぶ高校生の姿には心癒された。親目的であり、日本を正しく理解し、日本語を話したいという気持ちが満ちあふれていた。ランチルームで一緒に給食を食べた女子生徒との会話は、人対人の交流であった。日本語と英語で会話をしながら、毎日の厳しい勉強のつらさ、親とはなれで寮で暮らす寂しさ、日本に家族で旅行に行ってみたいと話す姿が今も脳裏に残っている。

DMZ 平和の丘訪問の際に拝聴した講話の中に「あなたと私の関係に平和をどのように築くか」ということが最重要課題である」という言葉が心に残っている。話を聞きながら、今回の訪問で出会った子ども達、私の学校の子ども達、KNCU、通訳の方の姿が重なってきた。難しい理論や観念論ではなく、身近にいる人の人権や多様性を認めることは、私のとなりにいる人を正しく理解し、私のとなりにいる人が幸福（笑顔）でいられることにつながり、その広がりが持続可能な開発の社会を創る。このことは、私の学校の重要な教育目標の一つの国際理解教育推進のあり方に大きな示唆を与えてくれた。異文化をもつ、すばらしい人との出会いの積み重ねが多様性を認め、人権を尊重する態度につながる。

江原道の教育理念は、「幸せな学校、共にする江原教育、皆のための学校」であった。厳しい受験勉強に苦しむ子ども達、学力優先の社会が奪う子どもの夢や希望、そこから脱却して一人ひとりの適正や能力が最大限に引き出され、一人ひとりが幸福になる教育。そして一人ひとりが多様性を認め、地域・国家・世界の発展に貢献できる人づくりへの転換を図らなければならぬと深く考えさせられた。研修期間中ずっと私の価値観が揺れ動かされた。私が変わり、そして、私が関わる教師や子どもが変わる、この変化を大きな広がりにしていくことにより、眞のESD・EIUが進展すると痛感した。

A グループリーダーとして 24 名のメンバーに支えられ、感動的な学びをさせていただいた 7 日間だった。貴重な学びをさせていただいた関係者のみなさまに深く御礼と感謝を申し上げたい。本当にありが

とうございました。カムサハムニダ。

地図にあらわされる主張

田中 麻子

私は、中学 1 年生と高校 3 年生の地理の授業で、朝鮮半島の地図を毎年のように教えています。でも、ソウルやスウォンに 1 度行ったことがあるだけで他の場所に行ったことがなく、朝鮮半島のことをもっと臨場感を持って教えたいと思い今回のプログラムに応募しました。江原道を訪問し今まで行ったことのない都市を巡れたのでとてもよい経験になりました。そのような中で特に印象的だったのは、韓国で販売され、使用されている地図です。見学先の中学校においてある地球儀でも、本屋で売られている地図でも、朝鮮半島は一色で、1 つの国として表現されていました。江原道の教育庁でも、「江原道は、大韓民国の中央部に位置し・・・」という説明でしたし、雪岳山国立公園でも、「大韓民国の中央部に位置する国立公園です」という説明を受けました。実際には、江原道自体が南北に分断され、DMZ が存在するわけですが、「朝鮮半島唯一の国家」ということで、説明も地図もこういう表現になるんだということが実感できました。自由時間に町中の小さな本屋で買った子ども向けの壁に貼るタイプの地図では、休戦ラインは全く目立たない点線で表されていて、見つけるのに 38 度線を頼りにしないと見つけられませんでした。私たちは、実際に DMZ を訪れ、第 4 トンネルの中にも入り、韓国ではこういうところも使って平和教育をしているのかなと思いましたが、ホームビジットで訪れたご家庭の中学生は、「行ったことがない」ということでした。40 代の母親は、「3 回行ったことがある」ということでしたが、中学生の子どもは小さい時に連れて行ったため、「全く覚えていない」ということでした。DMZ を色々な角度から教育に使っているのかと思っていたので意外でした。帰国後、韓国で購入した地図を中学 1 年生、高校 3 年生に見せて授業をしました。地図にどのように表されているかということが、その国の主義や主張をよく表しているということを伝えました。私たちが無意識で見ている日本で制作されている地図についてもそういう視点は必要であるということを伝えました。

今回のプログラムでは、個人的に韓国の教師や学生、またホームビジットではその父母と話す機会に恵ま

れ、韓国の教育をそれぞれの立場でどう思っているのかを率直に聞くことができました。もちろん、私が話をした人の意見がすべてを表しているわけではないのはわかっていますが、でもその人にとってはそれが真実であるということには変わりはないと思います。普通の旅行では出会えない人と出会え、交流できることに感謝し、今後も交流を続けていきたいと思います。その中で、たとえば地図に表されるような、お互いの立場の違いは認め合うことが大事だと思います。変に遠慮するのではなく、お互いの政府がこのように考えているからこうなっています。と言うことができ、さらにその上で自分はどう思うのか、どうしたらしいと思っているのかを伝えることができるといいと思います。人ととの関係ができていれば、政府間の関係には影響されずに友好のパイプを築いていくことができると思います。

韓国の ICT 教育・理科（科学）教育とかかわることについて

辻本 和孝

私自身、韓国を訪問するのは今回で3度目であったが、それまでの2回はソウル市内を中心に観光するだけで終わっていた。しかし、今回の韓国訪問プログラムでは、江原道の教育庁、小学校、中学校、高等学校といった教育施設を訪問、ホームビジットやDMZ 平和の丘の訪問、雪岳山国立公園での体験活動など、今までに経験したことのない内容がたくさんあり、韓国の教育や文化、ESDなどについてたくさんのこと学ぶことができた。そこで、今回のプログラムで私自身が学び感じとったことで、とくに伝えたいことを報告したいと思う。

まずは、私自身の課題であった「韓国におけるICT教育を知ること」と「韓国における理科（科学）教育を知ること」について報告する。

以前から、韓国におけるICT教育が進んでいるということは理解していたが、実際に学校の施設を見学するとそのことがよく分かった。各教室には大型のテレビが設置されており、天井からはプロジェクターがつり下げられていた。日本でもICT化は進んでいて、各教室に大型の液晶テレビは設置させているが、プロジェクターまでは設置されていないところが多い。私の訪問した大龍中学校の中国語の授業では、作成したコンテンツを使って楽しく学習できていた。生徒は映し出された画面に集中し、興味・

関心を高めるという効果が現れていた。また、春川外国语高等学校では、生徒が学校紹介映像を作成し、私たちをもてなしてくれた。その映像のできもよく、ICT教育の質の高さが伺えた。実際に生徒がPCを使っている様子は参観できなかったが、ICT化が進んでいる韓国教育の一端を知ることができた。理科（科学）教育については、大龍中学校の科学の授業を参観させてもらって感じたことであるが、生徒がグループになって、種子植物やシダ植物、コケ植物の繁殖様式について、粘土を使ってモデル作りをしていた。これは、学習したことをまとめ、定着させるという目的があったようだ。グループで協力しながら、知識を共有している姿に感心した。日本でもグループ学習や協同的に学ぶことが大切にされているが、韓国でも同じように考えられているのだと感じた。公峴津小学校では、シュタイナー教育の理念に基づいて、独自のカリキュラム編成で教育が行われているため、自然に親しみながら自然の事象を理解していた。理科学習における最も重要な「自然を愛する心」を育もうとしていることに感心した。韓国におけるICT教育、理科（科学）教育は、日本と同じところが多く、それほど変わっているとは感じなかつた。ただ、ICT教育については設備面では充実しており、国や自治体が教育にたくさんの費用を投しているのだとわかり、日本でももっと教育に予算を費やしてほしいと思った。

次に、韓国で築くことができた「かかわり」について報告する。7日間という短い時間であったが、たくさんの人と会うことで、私の視野が広がり価値観も変化した。まずは、ホームビジット。普通の家庭におじゃまして、奥様の手料理をいただき、夜景を見せてもらったり繁華街でデザートを食べたりと、普段の生活を体験しながら楽しく会話できたことがよかったです。次にDMZ 平和の丘の理事長さんのお話。平和についての講義が心に残っている。とくに、「国と国は難しいが、人と人では友好関係を築くことができる」と述べられたことが、とても共感できた。そして、今回のプログラムにかかわって下さったACCU、KNCU、江原道教育庁の方々との交流は、韓国の教育と文化を理解するためにはとても重要だった。当然、7日間生活を共にしたAグループのメンバーとの交流も、私にとって価値のあるものとなった。共に交流授業を考えたり、日本の教育について語り合ったりと本プログラムに参加しなければ実現できなかつたことである。つまり、他からの情報

や偏見だけで物事を判断するのではなく、実際に交流をしながら「かかわり」をもつことで、相互理解が可能になるということを、身をもって体験した。

最後に、本プログラムを通じて感じたことを述べる。日本と韓国では文化や教育に違いはあるが、平和を願い子どもたちのために教育を行うという根幹の部分は同じであるということである。そして、「かかわり」から相互理解が始まるということである。これらのことを見頭に置き、これから自分にできることを探り、日本と韓国がより友好な関係を築くことができるよう教育実践を行いたい。

韓国の教育から学んだこと 中出 安彦

私が本プログラムに参加し研修したいと思った点は大きく二点あります。一点目は、主に初等中等教育の教育制度、学校の施設設備の整備状況、教師の指導方法、児童生徒の学習面や生活面の様子等を総合的に研修し、教育成果の要因を探ることです。二点目は、持続発展教育の柱である環境教育、エネルギー教育、国際理解教育、世界遺産や文化財等に関する教育等について韓国の状況を見学し、プログラム後の ESD に役立てていきたいと思った点です。

大龍中学校は、「主体的、協同的」を柱に、「実験・討論・書く」を重視し授業を進めているとのことでした。参観した理科の授業では、グループで課題について調べたことをプレゼンテーションボードにまとめていくというものでした。生徒は、お互いの考えを出し合いながら、上手に作業を分担し、できぱきと作業を進めており、「実験・討論・書く」の一連の流れが、きちんと授業の内容に表されていました。また、第二外国語の中国語の授業では、家族を題材に必要性のある言葉をお互いに紹介するもので、笑顔が絶えない楽しい授業となっており、生徒の積極性が導き出されていました。放課後のサークル活動の紹介は、平昌オリンピックを宣伝する活動等を通して、生徒の自ら学ぶ姿勢、自主性、責任感、自己有用感等を高める有効な手段だと感じました。江原国際高等学校は、「グローバルリーダーの育成」をめざし、英語、中国語、日本語のコースが設けられていました。生徒は、意欲的に授業にのぞんでいましたが、何より明るく楽しそうにグループ活動を行っている点に感心しました。本研修の最後に「グロー

バルリーダーになる人間には、リーダーシップを發揮する前にメンバーシップを発揮してほしい」とのお話がありましたが、まさにその通りに育っているように思いました。お互いを思いやり、楽しく交流する姿勢は、中学校までの自主的な活動等で育まれているものではないかと感じました。また、自分の目標を掲示することで生徒に常に目標を意識させて努力させていく方法や、自習室などの環境もたいへん素晴らしいものでした。公峴津小学校は小規模校の学校で、近年大胆に改革を行ったとのことでした。建物にかけてある絵、楽しく遊ぶことのできる地面の線図、子どもたちの年齢に合わせた教室の配色、掲示物など、学校の環境はすべて子どもを中心に考えて作られていました。授業の一環として作った森の中の家については、家作りの過程で算数などの評価も行っており、総合的に学習する中で各教科の力を育んでいることがわかりました。平和と命のキャンプでは平和についての講義がありました。「真の平和とは、自然との一致・和解・共存である。人法地、地法天、天法道、道法自然」のお話は、平和教育であるにもかかわらず、環境教育の大切さに通ずるものだと思いました。この講義は、大変熱意が感じられ大変納得のいくものでした。「まず実行しなくてはいけない」の言葉通り、日々の学校の活動の中で、現実的にできる実践等を具体的に考えていかなくてはいけないという思いをもつことができました。その他に、江原道教育庁の教育ビジョンや雪岳山国立公園での環境教育などについても学ぶ点が多くありました。韓国の学校現場の様子について、また、ESD につながる点について研修し、理解を深めることができました。この貴重な体験で学んだことを具現化し、成果をあげていきたいと思います。

ESD に必要とされる視点の獲得 西嶋 淳

今回参加させていただいたプログラムは、緻密に構成され、高い効果が期待されるものとなっていた。長年の取組の成果・課題の積み重ねの賜物であろうと考える。自国と異なる環境に置かれた時、我々はまず「日本人」としての定点で目の前の存在を見つめることになる。しかし、目の前の現象をつぶさに観察するだけでは不十分であり、その背景にある様々なつながりの中で、そのものを捉えなければならない。木を見て森を見なかつたり、森を眺めて木

に気づかなかったりしては不完全な把握に終わってしまう。その意味で今回のプログラムは自然にそのつながりを考えることのできる構成となっていた。空から世界の中の韓国全体を見つめる視点は、江原道という一地方にフォーカスされ、やがてその中の校種が異なる3校にスポットが当てられ、ついにはひとつの家庭の食卓に落ち着く。さらに、そのすべての場面において、それぞれの立場を背負う「個人」と語り合うことができるプログラムとなっていた。ひとりの日本人としての瞳をもって、その瞳を望遠レンズやマクロレンズのように変化させながら、すべての被写体を貫通する糸、つまり普遍的なものを探し求める視点こそ、ESDが必要とするものである。具体的には、まずDMZや国立公園を訪れるることにより、韓国の自然や文化、そして歴史というものを俯瞰することができた。そこでは、韓国の人々すべてに深く影響を及ぼしている南北の問題と、そこに横たわる希望や悲しみというものに少しでも触れることができたと考える。江原道教育庁においては、国の進める「幸せ教育」の流れに従いながらも、地方の実情に適していない内容に関しては國の方策であろうと異を唱え、特色ある地方行政を力強く進めている様子が印象に残った。決して同じデザインで染めあげられるものではないタペストリーの一片を見る思いであった。小・中・高等学校訪問では、それぞれの学校が「目指す学校像・育てたい生徒像」をしっかりと描きながら、その目標達成に向けて全教職員が協力し、特色ある教育を展開している様子が見られた。子どもたちは確かにそのフィールドの中で輝いて見えた。そしてプログラムの中でも、最も印象的なものであったホームビジットである。働き者の父親と明るく元気な母親が、2人の息子たちと腕を組みながら笑顔で我々を歓待してくれた。しかし、この兄弟も、学校の給食で懇談した生徒たちも、自分の将来や兵役のことに話が及ぶとやはりその瞳に一抹の緊張が走る。北朝鮮との国境（乙支展望台）に向かう途中で、我々のバスに乗り込み、ひとりひとりの身元確認を行っていた若き兵士の姿が彼らに重なった。

私は現在、教育庁において「グローバル教育」を担当しているが、「グローバル人材とは？」と聞かれたときに、このように答えることにしている。「グローバル人材とは、自らが所属する国や故郷を愛し、それによって育まれた自己をしっかりと自分の中に抱き、他国や他の文化を誠実に理解しよう

とする態度をもち、また行動を起こし、意見の対立や理解し合えない部分があつても、相手を尊重し、共存していくとする努力を惜しまない人のことである」と。そして、プログラムを終えた今、この考え方方は、ESD の在り方とも軌を一にするものであるとより深く認識するようになった。現在携わっている仕事においては、「ESD」に関わるものを担当していないが、グローバル教育等、他の分野の中でそれを消化していくことは可能であろう。そして、その取組の中で、今回与えていただいた ESD に必要とされる多角的な視点を失うことなく、それを活用しながら、ESD の普及に尽力していきたいと考える。

韓国の特別支援

林 留美子

今回韓国を訪れ、1週間滞在する中で日本において報道だけでは知ることのできない韓国を知ることができた。韓国の小学校、中学校、高等学校を小規模校や進学校などを幅広く見られ、さらにそこで教職員と意見交換ができたことはとても有意義であった。

特別支援学級の担任の先生と話す時間を設けていたが、教師の「子どもたちへの想い」は同じであることが分かった。生徒が卒業して社会に出る時にこんなことができていたらいいな、こんな力が身についてほしいなど将来を見据えた指導が明確になっていた。社会に出た時に支援を必要として生きていかなかで、いかに「愛されながら支援を受けられるか」までを考えていた。日課表には花を作る授業があり、作業療法の要素が組み込まれ、日本でいう自立活動のような授業が設けられていた。課題学習では個別に行う時間も設定されていた。韓国でも個別の指導計画が実践されていることが分かった。意見交換会をしている間に、生徒が教師にさよならを言いに来た。生徒の行動の様子から自閉的傾向のある生徒と思われた。生徒が下校する前には必ず教師に挨拶をするのが決まりになっているのだろう。言葉ははっきりと聞き取れなかったが、教師と生徒のやりとりをみるとなかで教師と生徒の信頼関係がもてていることが良くわかった。また、カフェでのおもてなしは精神障害をもつ生徒も参加していた。教師は障害種を考慮し、それぞれの子供たちの力を引き出すやり方を実践していた。子供たちは見知らぬたくさんの人をおもてなしする気持ちが仕事として終わってしまうことなくできていたことにも感心

した。韓国には高等学校にも特別支援学級がある。今日本が取り組んでいるインクルーシブ教育のシステム構築にもつながるように感じた。様々な学びの場の多様化、地域の学校で教育を受けること、子供にあった学習の場の確保がされていた。日本の障害者教育を推進していく上で今後も韓国の先生方と関係をもって関わりを深めていきたい。

もう一つ、通訳を通じてより多くの韓国の方と直接お話をすることで「韓国人はこうである」とひとくくりにしてしまうことのできない人々の思いや国民性を感じることができた。自分の気持ちを熱く語る方もいれば、物腰が柔らかく静かに話す方もいた。訪韓してみなければ分からぬことだった。各学校の教職員の方々、複数の通訳、韓国ユネスコの方達、ホームビジットでお邪魔したク・ボンジンファミリー、ガイドさん…たくさんの人と深い交流をもつことができたことに感謝したい。そして韓国の方だけでなく、同じプログラムに参加した方々の授業を参観したり、コミュニケーションをとる中で、自分自身の授業や指導観、生き方を考えたり見直すきっかけとなった。今回出会った人たちは今の私に幅広い視野をもたせてくれた。今後の私に大きく影響するであろう。

最後にESDは今だけに留まらず未来につなげていく教育である。私たちの年代から若い世代につなげていくことが今の私に与えられた使命だと思った。本プログラムでつながりを得ることのできた人達、韓国で得られた知識を活用・大切にしながら自分が感じたことを自分の言葉で子供たちに伝えていき、持続可能な開発のための教育に貢献できるように教師としての責任を全うしていきたい。様々な人々、地域とのつながり、支え合うシステム、今確立できることを次世代の教師・子供たちに引き継ぎ、豊かな人間性を育んでいきたい。

「つながる」ことの大切さ

久田 麻衣子

5年ほど前から韓国への興味関心を強く持つようになった。音楽やドラマを通じて韓国を身近に感じていたが、もっと韓国について知りたい、学びたいと思っていた。しかし、このプログラムに参加するまでは、ESDについて「持続可能な開発のための教育」という認識はあったが、どのような取り組みをもってESDというのかをあまり理解していなかつ

た。参加にあたり、韓国の学校施設の訪問・見学を通してESDについての知識理解を深めるとともに、韓国の人々と積極的にコミュニケーションを図り、文化交流を行いたいという思いを持った。

Aグループが訪問した江原道では「幸せな学校・共にする江原教育・皆のための学校」という大きな目標を掲げ、この理念のもとに学校教育が行われていた。生徒の知的好奇心、学ぼうとする姿勢、学習意欲が高い点に感銘を受け、どの場面でも笑顔が溢れているのが印象的であった。さらには、中高では、日本語で積極的に挨拶をしてくれる生徒の多さにも驚いた。日本文化体験授業ではどの学校でも生徒の日本への関心の高さを伺うことができた。異文化に触れ、学ぶことは大変刺激的で興味深いものである。文化の相違に注目されがちである異文化理解だが、共通性を重視した「つながり」を持つことが大切であると感じた。また、特別支援学級の先生との懇談も大変有意義であった。「つけさせたい力」を伺ったところ、社会で生活していく力や、高校へは特別支援学級に進学するため、職業活動の基礎となる力・自己決定ができるようになって欲しいとの回答であった。特別支援に携わり日が浅いが、障害がある生徒への思いは国が違っても同じであることを実感した。学校訪問を通して全体的に感じたことは様々な教育方法、支援の根底には子どもたちに対する大きな愛情があり、生徒との信頼関係をしっかりと築いているといこうとであった。体験プログラムでは平和教育と環境教育について触れる事ができた。DMZ平和生命の丘では、「自分を見つめ、相手を見つめた時に平和のドアが開かれる」という言葉が大変印象に残った。今なお軍事境界線では臨戦態勢が続いている韓国の現状に触れ、平和の尊さを改めて感じた。春川での家庭訪問も大変印象深い。高校2年の娘を介してほぼ英語でコミュニケーションをとったが、彼女の英語運用能力の高さには大変驚いた。私が韓国語を話すとホストマザーは驚かれていたが、日本人が韓国語を話すことは思った以上に嬉しいことなのではないかと感じた。言葉を重ねることでお互いを理解し、距離が近くなり、そこにもまた「つながり」を感じることができた。このプログラムを通して感じたことは、すべてはESDにつながっているということである。「ESDって何?」と問われると難しいと感じるが、学校訪問や先生方と話をする中で、自分が行っている教育実践や授業で大切にしていることはESDにつながっているのだと思うことがで

きた。また、日韓問わずたくさんのすてきな先生方やスタッフの方に出会うことができたことも大切な宝物である。国や地域が違い、それぞれが異なった考え方や価値観を持っているが、確かに「つながり」を持つことができた。他人との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重する態度の育成を目指すESDの概念を、身を持って体験できたのではないかと思う。

最後に、個人旅行では決して行くことのできない場所を訪問し、独学で学んできた韓国語の力を試す機会を持つことができたことで、韓国をもっと知りたい、もっと勉強したいという気持ちが強くなった。なにより、韓国が一層好きになった。このプログラムで得た「つながり」を大切にし、経験を自分の教育実践に生かしていきたいと考える。

「変わること」を楽しむ 広木 敬子

このプログラムに臨む前に私が自分に設定したテーマは、「韓国の教育を学ぶことを通して「教員としての自分と日本の教育を角度を変えて外側から眺める」、そして学んだことを元にして「自分の学校のESDをさらに推進していきたい」ということでした。

昨年度、ユネスコスクールである現任校に赴任し、初めてESDの概念に出会いました。それが自分を変えるきっかけとなりました。「角度を変えて物事を見ようとする」、「つながりを意識する」ことが日常的にできるようになり、学校において見える景色がそれまでとは少しづつ変わっていったのです。私にとってそれはとても楽しいことでした。今ある教科等の垣根を低くしていくこと、また、環境教育、国際理解教育、エネルギー教育等を個別に考えて行うのではなく、環境・経済・社会の各側面から総合的につなげていくことを学びました。そして、「教育のあり方は柔軟に変えていくのではないか」、「従来のあり方が当たり前にあるのではなく、新しい視点で今まで行われていたことを見直す必要があるのではないか」と考えるようになりました。韓国では新しい刺激に次々に出会うこととなりました。江原道の教育庁でお聞きした、「皆のための教育（幸せ教育）」の説明の中には、「子ども達に幸せになる方法について教えたい」、「競争と差別を超えて共同性や自己指導性を育てたい」というメッセージがありました。また、公峴津小学校では、シャタイナー教育につい

ての思いを伺うとともに、「先生が変わらなければ教育は変わらない」、「やる気になれば変えられる」との言葉を受け取りました。大龍中学校、江原外国語高校訪問でも、先生方が現状の課題に向き合いながら、本気で「幸せ教育」に向けて、今までの教育を変えていくとする姿勢と夢をもち主体的に自分の考えを表現しようとする生徒達に出会い、心を動かされました。心配だった「嫌日感情」については、ある生徒が「歴史を学ばない人の方が感情的になりやすい。ニュースや政治の世界だけで終わらせてくれればいいのに」とはつきり述べてくれたことに救われた思いになり、改めて政治の世界にまで手が届かずとも、教育の役割が大きいことを実感しました。

日本の学校でもあらゆる課題が山積しています。特に教師の「忙しさ」についてはまるでそれが当たり前であるかのようです。しかし日本文化授業を行ったり、日本の教育についての説明を聞いたり話し合ったりする中で、日本の教育の特徴や素晴らしいところについて実感する場面も多くあり、「学習指導要領の考え方はESDの概念と一致するのではないか」と考えるようになりました。これが私にとってこのプログラムで見えてきた新しい視点でした。日本全国の先生方、韓国の先生方、スタッフの皆様と知り合えたことも大きな収穫でした。韓国はもちろん、先生方のいる日本各地が身近に感じられるようになったのです。これが「つながりを尊重すること」なのだと実感しています。新たな見方やつながりが得られるとやる気が湧いてきます。ESD推進にあたっては、「幅広いためにつかみにくい」、「何でもありになってしまう」との声を聞くことがあります、今までの考え方の枠組みの中にとどまるだけでは変わることはできません。このプログラムで学んだことや得た仲間をエネルギーにして、今日の前にある課題に向き合いながら、「変わること」を楽しんでESDを推進します。

“つながり”を意識して 細野 紀子

このプログラムに参加した理由は、自分自身のESDに対する理解を深めることと、ESDの好事例を探ることであった。3.11の震災後、4月に入学した中学1年生たちとESDを実践してきた3年間ではあったが、学習をなかなか深めることもできず、発展もさせられないでいた。今年度、スーパーグローバル

ハイスクールの指定を受け、自分が担当する高校1年が課題研究を行うこととなり、これまでのESDの取り組みを見直し、SGHの学びに生かしたいとも思っていた。

ESDに対する理解が深まってきたのは、DMZ平和生命の丘の鄭聖憲理事長とのセッションであった。これに先立って訪問したウルチ展望台や第4トンネルの見学を通して、南北分断と、韓国が休戦中であるという事実を改めて認識したところではあったが、理事長の話される「平和」の概念が、「我的平和」から「我と汝の平和」、そして「眞の平和」へと展開していくにつれ、いかに我的平和は訪れ難く、我と汝の平和は成立し難く、眞の平和はいかに遠いかということがわかつってきた。自然と調和して生きることが、眞の平和をもたらすならば、この地球で持続可能な社会を築こうとすることが、人の心に平和の砦を築くことになる。つまり ESDの実践そのものが平和な世界へ至る道となるわけだ。ESDが今なぜ大事なのかという大前提が腑に落ちた気がした。この「平和」という観点から、生徒の日々の活動を俯瞰すると、いかに ESDの実践となりうる活動がたくさんあるかということに気づいた。足りなかつたのは「つながり」を意識することであった。他国と共有する課題、問題同士のつながりなどを意識することで、これまでの活動はより意味を持って生徒の学校生活に浸透していくと思える。またそれぞれの教科で取り上げる問題を、教科間のつながりや委員会活動やHR活動ともつながりを持たせていけば、学びはさらに発展し深まるだろう。まずはこれまで行ってきたことを振り返り、整理してつなげてみる作業を行っていきたい。大龍中学校と江原外国语高校を訪問した際に気づいたことも「つながり」であった。それぞれの歓迎式典では、日本との「つながり」が表現されていたのである。日本でもよく知られている音楽が演奏されたり、日本で人気のある曲を使って動画を作ったり、両校とも日本の文化と韓国の生徒たちとのつながりが意識されていた。また、相手の文化に興味関心を示すことは、おもてなしであるということにも気づかされた。今回訪問したどの学校でも生徒たちと交流する機会が用意されていた。生徒たちは積極的に日本からの来訪者に話しかけ、笑顔で質問に答えた。文化紹介の授業では、表情豊かに声を出して反応し、授業後の感想には、「もっと日本語を勉強したいです」と書いてくれた。日本語も英語もまだ思うようには使えない小学生でさえ、給食

と一緒に食べながら、身振り手振りでコミュニケーションを図ろうとした。韓国の生徒たちの「つながり」を持つとする積極的な姿勢に、大いに学ばせてもらった学校訪問であった。

成田前泊を含めての8日間、日本全国から集まった校種も様々な教職員の方々と親しく交流できたことも、貴重な体験となった。教科の研修で外へ出る以外は、他校の先生方と一緒に活動したことがなかったので、全てが自分にとって新しい挑戦でもあった。いわば外に向かっては閉じていた自分が変わってきたことも、このプログラムに参加して得られた成果の一つである。全国に散らばるAグループの先生方との「つながり」を大事に、地球規模の課題に、関係国に心を寄せ、共に解決の道を探ることの出来る開けた若者の育成を目指して、ESDの実践を進めていきたいと考えている。

教育の根底は同じ 宗像 洋

私がこの韓国訪問で最も関心があったのは、学校、学級、家庭レベルでの教育事情や教育観である。日本全体の傾向として、学級、学校崩壊が身近な問題となって久しい。特に児童生徒同士の肯定的な人間関係を築くことが年々難しくなっているのではないかと感じている。また、学校教育においても「詰め込み教育」から「ゆとり教育」への移行、そして「ゆとり教育」の見直しと、時代の背景を受けて変革し続けている。まさに「生きる力の育成」が学校教育に求められている。教育に対する意識が高く、儒家思想が強いと言われる韓国では何が問題とされ、その問題に対して教師や家庭がどのように向き合っているのか、それらを実際に肌で感じることが、自分自身の教育観を見直す一助になると考えた。

高等学校教育の様子を見ることができたのは、韓国の公教育の現状をつかむ上でとても有意義であった。思春期の子どもたちに対して、どのように目標意識や向上心をもたせるのか、コミュニケーション力をつけるのか、とても興味があった。歓迎のセレモニーを鑑賞し、授業を参観し、給食を生徒と一緒に食べるうちに、いくつかの特色に気がついた。①語学力が高い…簡単な英会話が当然のようにできることも驚きだが、日本語コースの生徒の日本語が予想以上に上手である。入学後3ヶ月の学習で簡単な会話ができるレベルに達している。②自分のなりた

い職業、将来の展望をしっかりともっている…歓迎セレモニーの動画の制作を担当した生徒は、給食時にプロデューサーになりたいと語っていた。③肯定的な人間関係を結ぶのが上手である…給食時に数十名が集まって、1人の友達を囲み盛り上がっている場面があった。聞けば誕生日を祝っているらしい。男女仲良く微笑ましい光景であった。また、食事をしながら積極的に日本語で話しかけてくる子が多くかった。④教師の確かな授業力…日本語の授業を参観したが、1時間の授業の目標が明確で、活動の中に必ずグループや全員でコミュニケーションをとる場面が設定されていた。何より先生との信頼関係がしっかりと築かれていた。授業を通して学級経営を行い、学級経営の機能を生かして授業をするという点においては、日本でも韓国でも教師に求められる資質であることを実感させられた。

日本よりも教育改革への意識が高く、その実行力の強さも顕著に見えたが、その根底には子どもの人格育成に力を注ぐ学校や教師の姿がある。このことを知ることができたのは大きな収穫であった。江原外国語高等学校での生徒の姿は、ホームビジットの家庭の様子と重なる部分が多くあった。招待された家庭には中学3年生と2年生の兄妹がいた。まさに思春期の子どもたちである。その子たちが、私たちの近くに寄り添い、英語で積極的にコミュニケーションとろうとするのである。帰りに私たちを送ってくれるときには、父と娘が仲良く手をつないでいる姿が印象的であった。聞いてみると、家族の時間を大切にするために、1日に1度は全員で食卓を囲むようしているらしい。どの家庭でも珍しいことではないということだ。韓国の教育改革には目を見張る勢いがあるが、その根底には子ども一人一人を大切にする思いがあるということを実感した。**ESD** の理念でもある豊かな人間性を育むことは、家庭レベル、授業レベルで実践できる部分も大きい。この点については学級担任として日々の実践に自信をもって生かすことができる。今回の韓国訪問で再認識したことを、どのような形で現場に還元するのか。大きな課題であるが、形にこだわるあまり本質を見失わないように留意し、前向きに取り組んでいきたい。

韓国の教育現場を見て 森 務

韓国の工業が発展して目覚ましい活躍を見せている。携帯電話の液晶画面や薄型テレビ、2000年代に入ると一時期世界の造船竣工量の世界一位を占めている時期もあった。韓国は独立当初は世界の最貧国とよばれていたが、「漢江の奇跡」とよばれる経済発展を遂げ世界的な工業国となった。こんなことを地理の授業では取り上げるのであるが、どうして韓国はここまで工業力を高めることができたのか、経済力を強めることができたのかに興味があった。韓国の受験競争は有名である。試験に遅れそうになった受験生を白バイで会場まで送る、そんな写真が地理の資料集に載っていたこともあった。そのようにするからこそ韓国では優秀な人材が育ち、経済力も強くなってきたのではないだろうか、そんな思いから韓国での人材育成のようすをみることができないか、訪韓前はそのようなことを考えていた。実際に訪問をしてみると、苛烈な受験競争の中で傷ついている人が多くいるとのことだった。江原道の教育庁を訪問した際、勝者も敗者も傷つく競争を止める。みんなが笑顔になれる学校を目指して改革を進めることで、過度の競争を止め、健全な学校生活を取り戻そうとする試みであった。この話を聞いた時、日本人教職員からは、不満は出ないので、通学時間の問題は?などいくつか質問が出たが、諸々の問題はありながらもそれらに取り組んでいくことであった。翌日訪問をした江原外国語高等学校は、全寮制の高校という特殊な環境にはあったが、韓国で唯一の取り組みをしているという先生方の絶対的な自信が感じられた。通常授業後、夜の12時までは学校側が義務として自習を課し、それ以後はしないように指導をしているということであったが、自主的に学習をする者はいるようであった。私たちが圧倒されたのは「Dream&vision」と書かれた垂れ幕であった。そこには生徒の名前と将来の夢、そのために進学をしたい大学名が書かれていて、高校入学の段階から将来に向けた取り組みがなされていることが分かった。Home visit をした際は、放課後はやはり塾など習い事が多く、私たちが訪問したご家庭でも子どもはソウルへ試験を受けに行っているとのことであった。日本も韓国も経済発展の中で、教育はい

かにして社会に有能な人材を育成するかという点で取り組んでいた。しかし、今の韓国の教育行政はすでにその点を脱し、個の発展ということを目指していた。私たちが考えていかなければならないところがそこにはあるように思う。「個」の存在を認め、どのような個を育んでいくか、このことは日本も韓国も私たち教育者が抱えている課題のように思う。

日韓両国の懸け橋としての きっかけづくり ～交流授業を通して～

吉岡 大輔

応募の際、参加目的に、「重要なことは『国』と『国』という関係だけでなく『人』と『人』との関係性を築くことが大切であると考える」と記載した。この考え方をプログラムの中でどのように意識して取り組んでいくのかが自己の課題であった。その中で最も有意義であったのは、江原道高等学校の外国語（日本語コース）の高校生に対する文化交流授業の実施であった。私を含む高校の教員（実際は小中高の教員）が中心となって実践した文化交流授業では、「お互いの文化を理解することを通して両国の懸け橋として『つながり』意識を持とう」と目的を設定した。韓国の高校生が考える日本の文化、日本の高校生が考えた韓国文化の紹介（事前調査）と日本の有名なドラマ・CM（半沢直樹、予備校講師の林修の『いつやるの？今でしょ』、韓国俳優チャン・ドンゴンの『あなたが好きだから～』）を紹介した。チャン・ドンゴンの「あなたが好きです。あなたの肌が大好きです。いつまでも。変わらないで、死ぬほど好きだから～。」というセリフを、韓国の高校生と日本の教員で交互に言い合ったりした。最後に、韓国の高校生に好きな日本語を言ってもらい、それをメッセージとして筆ペンで色紙に書いてもらい、教室にいる全員でチエキ（カメラ）で集合写真を撮影した。そして、メッセージ付きの色紙の中央に写真を貼って韓国の学生にプレゼントするという、交流が「形」として残ることを意図した実践を行った。韓国人ならば誰でも知っている俳優チャン・ドンゴンが日本語で話す「好き」というセリフを、日本語を学ぶ韓国の生徒や大人（韓国の先生、KNCU スタッフ、通訳の方も含む）と日本人（教員、ACCU スタッフ、参加者）が、その場で一緒に「言う」という場面（空間）は、言葉以上に「つながり」を意識できる一体感のある瞬間であ

り、韓国の子どもたちの記憶にも残り、かつ私たちの心にも残り、それが持続可能な社会を築いていくきっかけとして、まさに「人」と「人」を土台とした日韓交流になったのではないかと思う。日本の教員が韓国の学生に授業をするという試み、まさしくこれが教師として「眞の交流」ではないかと強く感じた。教師は教育哲学を持って、それを子ども達にどう伝えていくか、どう一緒に考える姿勢を育んでいくか。特にその哲学の中に「ESD」という考え方が含まれているのであれば、日本の子ども達だけでなく、韓国の子ども達にもそれらをどう伝えていくか、どんな内容や方法であれ私達教師が「ESD」を意識して交流授業を実施することで、日韓における「つながり意識」ができる。日本の教員からすれば、授業を通じて韓国の子ども達からの「わかった！」、「なるほど～」、「お～～！」という生の反応、「人」と「人」とのコミュニケーションが成立したその瞬間の記憶というものは、教員人生の中でも一生残る。その実践経験が国内に戻ってから、他の教員への報告、授業での実践、また日本の子ども達への共有によって「つながり意識」が広がっていき、さらに深まっていく。このようなきっかけづくりができたことが、今回の研修で得られた一つの成果である。

B グループ

グローバル人材の育成 荒平 豊

世界的にグローバル化が進行する中で、学校教育の現場においてもグローバリゼーションに対応した教育内容、研究開発プログラムが要請されている。本校一条高校においても、これまでにない、思い切った形でのプログラムを設定しようとしている。その先にあるのは、私たちがどのような生徒を育てようとするのか、という具体的なイメージ、生徒像である。教育現場で新しいことにチャレンジするのは容易ではない。今現在、決定的な危機を迎えており、という職員全体の共有認識があれば現場が全体として改革の機運を持つであろうが、そうでない場合は困難である。その困難性を認識した上で、新しいことをやろうとするのは、斬新で魅力的なビジョンがなければならない。そのことを今回の韓国研修で深く感じた。現在の私が置かれている現場でのミッシ

ヨンは、グローバル人材を育成するための新しい教育プログラムを開発することである。まず、その認識を現場の職員たちとしっかりと共有しなければならない。誰のために、何のために新しい教育プログラムを開発し、実践するのか。また当然、生徒たちに説明し理解してもらつたうえで、前述したように育てようとする生徒のイメージを明確に提示し、職員全体の理解と協力のもと、新しいことにチャレンジする必要がある。今回一番に感じたことは、韓国教育のチャレンジ精神である。新しいことをはじめるには勇気がいる。公務員という立場、教員という立場が長くなればなるほど、その性質上、まもりに入る。失敗や批判をおそれて新しいことを始めようというモチベーションは生まれにくい。責任を考える。教育には失敗は許されないという、強迫観念。日本の教員現場では少しその傾向が強くなっているのではないか。既得権益をまもり、ただ日常を繰り返すだけの現場。わくわく感のあるものは生じない。私は教育には幾ばくかのロマンが必要であると思う。多少なりとも夢やロマンがないところに教育は成立しない。例えば、韓国の教育には子供たちが幸せになるために、という共通の理念が感じられた。「子供が笑うと世界が幸せです」という忠清北道教育庁の教育理念に象徴されるように、子供たちの笑顔に力点が置かれている。訪問前には、もう少し暗いイメージを抱いていたが総じて明るく力強いものを感じ、大人たちの愛情を感じた。もちろん日本の教育も根本は同じだろうと思う。韓国と日本の教育に違いがあるとしたら、チャレンジ精神ではないのか。子供たちがチャレンジ精神を持てるような教育内容を設定するのであれば、それを支える社会も失敗や批判をおそれて何もしないではなく、本気で変革を遂行しなければならない。また、それを推進するのは現場で働く教員であり、教員が自ら考え行動しなければならないだろう。

国際教育交流事業に参加して 香川 敬子

私は三つの参加の目的を考えていました。

第一の目的は、韓国の教育、特に日本を遙かにリードしていると言われる英語教育と読書の取り組みについて知ることでした。韓国教育大学校附設月谷小学校、興徳高等学校、佳谷小中学校の3校を訪問し、全ての学校において特色ある充実した教育が行

われていることに感銘を受けました。月谷小学校では暖かい雰囲気の中で一人ひとりを大切にする教育が行われていました。興徳高等学校ではアカデミックな雰囲気の中、国際的な視野に立ち、生徒の可能性を伸ばす教育活動の実践を見てとれました。また、山間部の佳谷小中学校では、日本と同じような過疎化や学校統廃合の問題を抱える中で、民族の誇りや伝統を継承していくという信念あふれる教育実践を拝見することができました。ALTの配属状況や活用状況についても知ることができ、国際交流や異文化理解に結びつく校内の環境整備等も小学校から自然と行われていて、それらが未来のグローバル人材へと繋がっていくのだと実感しました。また、忠清北道教育庁北部英語体験センターでは実際の場面で英語を使えるように作られた部屋がいくつも用意され、3階、4階には宿泊施設や食堂もありました。韓国にいながら英語圏に行ったような状況で学習できることがとても羨ましい気がしました。最初は英才教育だと思いましたが、英語が得意な生徒もそうでない生徒も研修を受けることができると知り、一層その素晴らしさを実感することができました。英語教育は非常に進んでおり、かなりの予算が投入されていると感じました。さらに、私自身、7年間にわたり図書課を担当し、読書の普及に努めていますが、韓国の学校における読書の推進についても知ることができました。インターネット、ICT教育の普及はありますが、書物を媒体とした活動はこれからも継続されるという気がしています。韓国での漢字教育の復活、小学校での一部導入についても既にニュースで報道されており、とても興味持っています。

第二の目的は食文化について知ることでした。

2013年に日本の「和食」と韓国の「キムチ」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことは記憶に新しいところですが、韓国の豊かな食文化の継承について、学校給食や滞在中の食事を通じて知ることができました。訪問校でいただいたバランスのとれた学校給食から未来を担う子どもの食育教育は充実していると感じました。

第三の目的は人脈作りでした。日本と韓国が同じアジアの一員として良好な信頼関係を構築するために、一番大切なのは人ととの触れ合いであると考えていましたが、本当に多くの素晴らしい方々との出会いがありました。出会えた皆様と今後も交流を続け、関係を深めることができればと思っています。最終日の講演は交流事業をさらに実りあるものにす

る素晴らしいものであり、韓国で経験したすべてのことが一つに繋がったような気がしました。先日も、韓国のICT教育の効果についての検証が報じられていましたが、韓国の教育は今後どのような方向に進んでいくのか非常に興味深いです。いろいろな面で韓国は注目すべき隣国だと思います。私が韓国で吸収した多くのことを学校現場で生徒に伝え、今度は若い世代から交流の輪がどんどん広がっていくようになります。

外国として日本をみつめて 菊本 麗子

本プログラムに参加するにあたり、私が設定していた一番の課題は、「客観的に日本をみる視点を持ちたい」である。国際理解教育に取り組んだとき、いつも日本から見た外国という視点になってしまい、異文化を理解するところまでは到達させられないことが課題だと私は考えていた。私自身が、日本文化がたくさんある文化の一つであるという視点にあまり立ておらず、授業の工夫だけでは乗り越えられない壁を感じていた。しかし、韓国の教育施設を見学し、日本と比べることができれば、自分の視野が広げられるのではないか、違った切り口で異文化を伝えられるのではないかと考え、本プログラムへの参加を決意した。外国としての日本を意識する第一歩となったのは、文化交流の授業である。日本で国際理解教育をしたときのように、韓国で新鮮な反応がある日本の文化とは何か。こんな難しいことを考えても、何もわからない。思いつかないので難しいを考えるのはやめて、日本の地域や観光地の紹介、ありのままの小学校の様子を伝えることにした。日本で勉強している教科、小学校生活の一日の流れ、学校行事など、自分では当たり前としか思えない日常を紹介する資料を作成した。しかし資料の作成が終わるころには、これが日本の小学校の紹介だとう自信が湧いてきた。このとき私は、自分でも深く考えた事のなかった「当たり前の日常」が日本文化であることを初めて認識できたように思う。プログラムの2日目に授業をさせていただいたことで、私は日本文化をさらに意識することができた。子どもたちは、紹介した事柄に新鮮な反応を見てくれた。私たちが当たり前と思っていることは、韓国の子どもたちからすると決して当たり前ではない。日本は外国である。授業をしているうちに、日本を紹介す

ることが大変楽しく感じられた。帰国後、私は日本の子どもたちに韓国の紹介写真とともに、このときの授業資料を見せることにした。子どもたちからすると誰もが知っていることばかりである。それでも、「これは日本だけで、韓国にはないよ」、「韓国でも同じようなことをしていたよ」という比較を交ながら紹介することができた。このような切り口から話すと、子どもたちの反応は明らかに違った。日常を文化として意識し、異文化に興味を示したのである。この流れで韓国についての調べ学習や、他国の調べ学習をすれば、きっと日本の文化を客観的に見る視点を持つことができるだろう。しかし韓国には、国際理解教育という枠にとらわれず、柔軟な発想で異文化を学習に取り入れるという教育技術があった。家庭科の授業では韓服の着付けを学習する際、日本の着物と似ているところや違うところを比較し、まとめるという学習が行われていた。このように、普段から国際意識を高められるような授業を私も取り入れたい。今回の研修での成果は、韓国の教職員の授業力の高さを目の当たりにし、日本の教育と比較することができたこと、貴重な経験によって自分の視野が広がったということである。そしてもう一つは人と人との繋がりが持てたことだ。私は事前に日本の子どもたちに自己紹介カードを日本語と英語で書かせたものを用意していた。このカードに直接、韓国の高校生からメッセージをもらうことができたのである。直接関わりを持てない子どもたち同士を、言葉で繋ぐことができた。難しく考えず直接関わること、違うところだけではなく似ているところにも目を向けることで他国は身近に感じられる。このような姿勢で私は今後も国際理解教育に取り組んでいきたい。

韓国の教育から学ぶ 木村 真由美

今回参加するにあたり、(1) 教育熱が高い韓国で今どのような教育が行われているのか。先進的な英語教育、ICT活用の実態、また課題も含めて現在の韓国の教育事情を知ること。(2) 韓国の持続発展教育(ESD)について学び、本市の教育(世界遺産学習等)に活かすこと。この2点を目的としてプログラムに臨んだ。

- (1) 韓国の教育の現状について
現政府の教育改革で「自由学期制」が導入される。

厳しい受験競争社会の中、子ども達の幸福感が低いことが背景にある。中学校の1学期間において、体験学習などに大幅に時間を割くカリキュラム運営を行い、この学期間は定期考査などの筆記試験は行われないという。2013年にモデル校の運営が開始され、2016年から全国の中学校で全面実施となる。夢と才能を育む「幸せ教育」を掲げ、「自由学期制」導入で、大舵をきった韓国の教育のこれからが興味深い。英語教育とICT活用については、かなり進んでいる印象を受けた。ICT機器については、どの教室にも完備され、様々な教科で効果的に活用した授業が行われていた。日本においても、電子黒板の設置やデジタル教科書の普及に力を入れているが、自治体によって差があるのが現状である。しかし、近い将来、日本においても韓国で見たICTを活用した授業がどこにでもある教室の風景になるだろうと思った。

(2) 韓国の持続発展教育(ESD)から学ぶ

訪問した学校はいずれもユネスコスクールに加盟し、ESDの推進体制が整っているように感じた。韓国教員大学附設月谷小学校では、年間20時間、学年別に社会、経済、環境分野のプログラムを実施。佳谷小中学校では、エネルギー節約や給食の残飯を減らす取組を学校全体で行っている。当日は音楽の授業で廃材を利用した手作り楽器を使ってすばらしい演奏を披露してくれた。興徳高等学校では、ボランティアやサークル活動が充実していた。リサイクルプロジェクトや地域文化の発掘など多様な活動が行われている。ESDは学校や地域によって、その方法も内容もさまざまであるが、活動の価値や意義を明確にしながら学校として体系的にESDを位置付け継続して取り組んでいくことが大事であると思った。本プログラムで学んだことを活かし、本市のESDの推進に努めたい。今回、本プログラムに参加させていただき、韓国の学校や教育庁の訪問、また教員や子ども達との交流等を通じて、韓国の教育への関心と理解を深めることができた。今振り返り、改めて貴重な経験をさせていただいたと感謝している。韓国の先生方やスタッフの皆さん、出会った方は皆、温かで親切だった。今回、初めての韓国訪問であったが、韓国への親近感が深まり、もっと韓国の先生方と交流を深めたいという気持ちになった。1月に本プログラムに参加される韓国の先生方の受け入れも積極的に行っていきたいと考えている。

共に手を携えて歩んでゆきたい、韓国 後藤 たき江

(1) 英語教育の充実

韓国では、1997年に国際通貨基金から支援を受けた時から、韓国が世界で生き残るために外国語教育に力を入れ始めた。そして、英語及び外国語教育のための教育環境や設備を充実させてきた。充実した施設の一つが、今回見学した忠清北道北部英語体験センターだ。ここは、体験型英語学習施設で、空港、レストラン、コンピュータールーム、銀行など9つの本物そっくりのエリアで英語体験できるようつくられており、明るくきれいな色合いの室内は訪れるだけでワクワクするところだった。こちらの施設は2泊3日のプログラムで構成され、忠清北道の中学生で英語に興味関心があり、本人の希望と英語教師の推薦状があれば誰でも参加することができる。参加費用はプログラム滞在期間中の食費のみだそうだ。施設のすばらしさもさることながら内容についても大変楽しいものだった。レストランエリアでは実際にホットケーキを調理して食べていた。コンピュータールームでは、英文で「図書室の机の下に潜って笑顔の写真を撮ってくる」などのミッションが出され、正しく遂行できたかどうか携帯電話で写真を撮って確かめるという活動をしていた。自分が子どもだったらぜひ体験してみたいと思わせる楽しいプログラムだった。韓国の英語教育に対する熱意の高さを感じると共に、日本の子どもたちもグローバル意識を高めるために、楽しく英語を学ばせることが大事だと改めて感じた。

(2) ICT機器の充実

各教室にはパソコンと接続された大型テレビやスクリーンが設置されており、児童がどこからでも映像を見られるようになっていた。また、教卓にパソコンが設置され、教師が提示したい情報はクリック一つですぐに画面に表示されていた。教師のPC操作もなれていて、効率よく視覚的な教材を提示できる環境になっていた。

(3) 本当の幸せをめざす教育改革 自由学期制

韓国では日本で噂されている通り、大学受験が成功しないと就職もうまくいかないのが現状だそうだ。親は自分を犠牲にして子どもの塾通いに投資し、子どもは夜中まで勉強をし続け、浪人生も多くいるという。しかし、それで本当に幸せだと言えるのだろう

うかとの疑問を持ち、韓国政府は今、生徒の興味と創意性を最大限に保証する「幸せ教育」への改革を目指している。人が生きるとき、物事にチャレンジし、そして失敗してもその苦難を受け入れ乗り越え、再びチャレンジができる環境づくりをめざし、個々の夢と才能を伸ばす教育に力を入れ始めている。生徒の創意性をはぐくむための取り組みとして自由学期制の導入を始めている。自由学期制とは一学期にあたる期間を生徒が計画した教育課程で実施する取り組みである。例えば、「アイドルになりたい。そのためにはどんな勉強をするのか」ということを生徒自身が決め、学習を進めていくのである。一見遊びのように見えるかも知れないが、生徒の自主性を重んじたこの学習を大切にし、**2016**年までに全ての中学校で実施の予定なのだそうだ。生徒がつくる創意的な学習の成果がどのようにできるのか楽しみである。

(4) 国際理解の第一歩として

韓国には独特の文化がたくさんあった。民族衣装のチョゴリ、キムチやビビンバなどの食べもの、お酒の飲み方、年上の人に対する言葉の遣い方などの道徳観念、赤や緑に塗られた寺院や宮殿、伝統家屋、ハングルなど数え切れないくらいの文化を体験した。日本とは違う、けれどどこか似ている韓国。このプログラムで知り得たことを児童に伝え、異文化理解を深める一端としたい。また、今回出会った韓國の人たちはみんな、私たち日本人に対してとても優しく親切であった。日本での報道から感じた韓国の印象は今回の訪韓で一変した。私の体験した韓国は、優しく温かい人々が、自国の伝統と文化を愛し大切にしながら、国際感覚の中に生きる国だった。政治的には難しいことも多いのかも知れないが、国の発展と人々の幸せを願う気持ちは日本と同じであった。お世話になった方々に感謝の意を捧げると共に、微力ながら韓国と共に未来を切り開く児童の育成に尽力していきたいと思う。カムサハムニダ。

高校で ESD に取り組むために 佐光 美穂

私が設定した課題は二つありました。一つは韓国で古典文学が国語の時間にどのように扱われているかを知ることです。これは授業見学をすることで確かめることはできなかったので、ガイドさんや通訳の方、訪問先の学校の先生などにお伺いしました。もう一つは、自分自身を異文化の環境に置き、異文

化コミュニケーションのスキルを磨くことです。今回のレポートでは、最初に挙げた古典文学のことを中心に扱います。

一点目の課題については、結論的には韓国の国語の授業の中での古典の扱いはかなり小さなものであることがわかりました。大学入試科目に漢文はあるそうですが、選択制であるため、履修者は非常に少ないとのことです。その他に古い時代の詩歌などは小学校以来国語の教科書に載っているとのことですが、取り上げられる作者や作品の数は限られていると聞きました。日本で言えば、松尾芭蕉の名句が小中高いずれの教科書にも載っているのに近い感覚ではないでしょうか。古語について学ぶことはあるようですが、日本の高校生のように自力で古典作品を読み解く必要はないとのことでした。ESD の活動には自国の歴史文化の学習が含まれます。実際、今回見学した中でも、たとえば佳谷小中学校の技術家庭の授業（韓服の着方を学び、韓服の魅力を世界に発信するはどうしたらいいかプレゼンする）などがありました。古典文学を ESD の枠組みの中で教えていた事例はおそらくあるでしょう。受験科目として教える必要がないなら、自国の伝統文化理解の枠組みで扱った方が、むしろ生徒には親しみやすい存在になるように思いました。

次に、二つ目の課題とその成果について記します。英語と韓国語、中国語の学習経験はあったのですが、韓国語に関してはもう数年もブランクが開いている状態でした。少しおさらいはしましたが、コミュニケーションにはかなり不安な状態でした。もちろん言葉はできるに越したことはないでしょうが、今回、交流した現地の学校の生徒さんや先生方とは、言葉が十分に通じなくても気持ちが通じる場面がたくさんありました。今年度自分が担当した「多文化コミュニケーション学」という授業で、生徒に伝えた「コミュニケーションのうち、言語が担う部分は**20～30%**だ」という研究者の説を自分自身で体感できました。今回の経験は**10**月の初旬に生徒たち向けにプレゼンする予定ですが、生徒たちにコミュニケーションの意欲が大切だと説得力をもって伝えられるようになったと嬉しく思っています。

最後に、今回の訪問中に得た、これから取り組んでみたい課題について記します。それは通常の教科の授業（今年度の私であれば、古典の授業）の中で、ESD を展開できるように教材を作り、授業を試行することです。日本では ESD の取り組みは小学校・中

学校が中心であるようです。高校では熱心に取り組んでいる学校と、そうでないところとの差が大きいように思います。大学受験はその軸の一つでしょう。高校の現場で特別な機会を設けなくても、一年間の学習のうち、数時間だけでも ESD の活動が展開できるプランを作つておけば、自分だけではなくほかの教員も取り組みやすくなると思われます。手始めに、**10月末までに国内の事例を集め、自分の取り入れられること、参考にできることを探します。**そして、年内に教材、教案を作り、学年末試験が終わったころに一度授業を実践して効果を確かめてみる予定です。

韓国の英語教育から学ぶ

高井 優子

日本でも小学校での英語教育が進められているが、現状の授業を続けることに漠然とした不安を感じていた。そのなかで、メディア等で韓国の子どもたちの英語力の高さを目にする中で、どんな教育が進められているのかと興味を持っていた。韓国の英語教育の現状について学びたいと思い今回の韓国訪問プログラムへの参加を決意した。

英語教育について見学してきた中で、特に関心をもったのは、「忠清北道教育庁北部英語体験センター」である。そこは、子どもたちが各学校から推薦を受けて、約一週間英語のプログラムを受ける施設であった。そこでは、空港や銀行、レストラン、病院などのセットのような部屋があり、子どもたちはそれぞれの部屋で、日常生活の様々な場面で使う生きた英語を学ぶことができる。また宿泊施設も整えられていて、合宿のような形で英語を学ぶことができるようである。日本でもキッザニアのような職業体験をする施設があるが、そういう施設で英語を学ぶプログラムを取り入れるときっと子どもたちは楽しみながら英語を学ぶことができるだろう。施設面や制度面など実際に取り組むうえでの課題はあると思うが、ぜひ日本にも作つてほしい施設であった。本校の ALT も将来日本でこのような施設を作り子どもたちに英語を学ばせたいと言っていた。また、見学した小学校でも、ENGLISH room があり、壁面掲示など学校のいたるところに英語を学ぶ環境が整備されていた。その中で学ぶ子どもたちは、英語の授業を自然と受け入れ楽しんで学んでいるようを感じられた。授業の内容は日本で行っている授業

と似ているところも見受けられたが、このような環境整備の大切さも実感した。そして、韓国の教育現場を見学する中で、特に印象に残ったことは、教室の ICT 環境がすべて整つていてことである。それぞれの学校で形は違うものの、大型のテレビとパソコンが整備され、それをどの先生方も効果的に活用していた。日本でも自らが研修を深め、ICT 機器を効果的に活用し、授業を進めていきたいと決意させられた。このプログラムの授業や懇談会などを通して、韓国の先生方と教育について考えたこと、一緒に参加した先生方と交流ができたこと、ここでは語りつくせないほど、かけがえのない貴重な体験ができたことに感謝の思いでいっぱいである。この経験をこれから日々の教育活動に生かし、子どもたちとともに学び続けていきたい。

人間力を高める学校の在り方

高橋 一勝

私は、教育水準の高い韓国の ESD について理解を深め、自らの授業技術の向上に役立てたいという目的で本プログラムへ応募しました。韓国への訪問を通じ最も感じたことは、「授業の教え方が日本と異なる」という点です。日本では教員が壇上に立ち、生徒に一方向的に知識を伝達する形式の授業が依然として一般的です。受験大国であり教師の地位が尊重されている韓国は、その形式がさらに顕著であると思っていました。しかし実際は見学した授業のほぼすべてが生徒主導で行われ、教員はそのサポートやナビゲーターに徹していました。また、授業の目的が提示されることが生徒の動機づけとなり、情報機器の活用により、授業の内容が鮮明にイメージできるような工夫が施されていました。このような点から教師の授業力の高さをうかがい知ることができました。訪問した各学校で ESD 活動は実践されていましたが、何よりも「授業を通じて生徒の人間力を向上させている」という点が私にとって強く印象に残りました。自分の調べたことや自分の考えを人前で発表することを頻繁に行つことで相手に自分の意見を伝える能力が育っていると思います。

ホームビジットは、私にとってプログラム中で最も有意義なものとなりました。高校の英語教諭の先生に対応していただき、そこで韓国の英語教育について伺うことができました。韓国では毎月学力試験が行われ、そのためには生徒は勉強に励むということ、

日本では文法中心の授業であるのに対し韓国では内容理解とアウトプットを中心に授業を行っていることなどを聞き、英語教諭として見習うべき点が多くありました。また、校内でユネスコ部の顧問もなさっており、その活動についても伺いました。その話の中で韓国の教育の問題点が話題になりました。韓国では、学力試験のレベルを引き下げ、その分ボランティア活動を重視するという方針に変わりつつあり、ボランティア活動が盛んなのはそのためである、つまり本当の意味で自主的に率先して活動している生徒は少ないそうです。また、文化祭でクラス団体の発表がないという話を聞き、韓国の学校におけるクラスは「学業をともに学ぶ存在」というイメージが強いと感じました。この点は日本と学級觀と異なると思いました。

今回の研修を通じて韓国の教育がいかに先進的であるか、設備がいかに整っているかなどを知りましたが、私はその根底に「教師は生徒という一人の人間を育てているのだ」という強い思いがあるように感じ、忘れかけていた教育の在り方を再認識しました。また、韓国の学校の現状を知ることで日本の学校のもつ魅力に気づくことができました。それは「学級の絆の強さ」です。1つのクラスの中には、別々の考え方を持った多くの生徒が混在しています。そのバラバラな集団が、文化祭や体育祭などの学級行事を通じて、衝突と和解を繰り返しながら絆を深め、一つにまとまっていく姿は、韓国にはない日本の学校の魅力だと思います。そして、その経験こそが人間力の育成そのものであると確信しました。韓国の高い授業力を見習い、日本の学校の魅力である学校行事の充実化を図ることで、人間力を高める学校を作りたいと思います。

人を育てること…不易流行其基一也 田中 幹子

私は本プログラムを2つの機会としたいと考えていた。1つめは、韓国の現状を知り、文化を体感し、様々な人々とつながりを深める機会とすること。2つめは、日本についてグローバルな視点で大きくとらえる機会とすることであった。現在の日本にいたる歴史の中で、日本の黎明期に大陸からの文化の伝播が果たした影響を考えると、今でも日本の基礎となっていることが多いことに気付く。様々なことがらについて、違いを挙げて比べることは容易にできる

ことであるが、理解を深めるために違いを知ることは難しいと感じる。隣国である韓国と日本が、様々な形で古くからつながり続けているということの意義を、この機会に直接見て感じ、考えたいと思っていた。

韓国の現状を知るという点では、忠清北道教育府訪問や学校訪問は大変有意義なプログラムであった。韓国の教育行政の取組についての具体的な施策の説明を受け、知識を得てからの学校訪問は、施策と学校の校種や特色を生かした学校づくりとを関連づけて捉えることができた。また、校種の異なる学校を訪問し、子どもたちの発達に応じた授業内容や展開、ICT機器の整備された教育環境、地域性を活かした学校づくり、ESDの観点の取り入れ方等について、学校現場の現状を直接知る貴重な機会となった。韓国の規範的、伝統的な様式が、学習活動全般にとりいれられている印象を受けた。ICT機器を使った授業は、都市部・山間部ともに展開されており、教育環境のハード面とソフト面の双方の充実を感じた。学校訪問では、日本の教員が日本文化についての授業を韓国の子どもたちに実施する機会もあり、ICT機器を活用した授業が多かった。授業者のスムーズな授業展開は、通訳の入った授業もあったが、機器の活用によるところも大きいと感じた。私も、中学校で百人一首を紹介する授業を実施した。ICT機器を活用し、体験的な学習と組み合わせるという授業展開は、子どもたちの興味関心を高め、理解を深める有効な方法の一つであると改めて認識し、また、教員にとっても授業資料を作成する過程から国際理解が始まると感じた。授業については、授業案作成や準備に関して、プログラム中にチーム内で相談することができ、よりよい授業づくりのためには、いろいろな意見を取り入れ研究するという授業づくりの基本を再確認する機会ともなった。全体を通して、韓国と日本との違いを探すよりも、共通する点や再認識する点が多く、「人を育てる」という観点では国が違っても同じ課題があることがわかった。また、様々な教育活動において、教員が子どもたちに機会を提供する立場であることを考えると、教員の役割や影響がとても大きい。教員自身が、子どもたちに対し、教え、伝え、導く役割を担っているという自覚を持つことも大切なことだと感じた。また、ホームビジットや夕食会、昼食会等のプログラムを通じて、様々な世代や立場の人々と交流することができ、私自身、国内外ともに公私にわたるつながりをつく

ることができたことも大きな成果であった。KNCU のスタッフをはじめ、訪問する先々で出会った方々から、大変温かく心をこめたもてなしをうけた。その丁寧な対応や思いに感激しながら改めて日本人として身に付けていた規範や一般常識について自分自身を振り返ることになった。また、国という枠でとらえるのではなく、人間性という本質的な部分でのありようをもとにつながりを考えることも大切であると感じた。ESD とは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育である。本プログラムで得た体験をもとに子どもたちの学びと育ちに還元できるように努めていきたいと考えている。

韓国における英語教育

千葉 崇

私が今回の訪韓で期待したものは、韓国の英語教育の実態を知ることであった。韓国の英語教育は日本より数段進んでいるというのが訪韓前に私が聞いていた情報である。それは各メディアから得た間接的な情報であったため、韓国の英語教育事情を自分自身で知りたいと思っていた。今回は小中高校訪問やホームビジットの経験を通して、また韓国の先生方や生徒達、通訳の方々とお話をし、様々な事を知ることができた。韓国教員大学附属月谷小学校では3年生から ALT と英会話授業を行っている。実際に3年生の英会話の授業を参観したが、ALT との会話練習、映像その他を使ったコミュニケーションを中心とした内容であった。このような内容の授業を3年生からきちんと行つていれば、中学生になった時点である程度英会話に苦労することはないのではないかと思った。佳谷小中学校では基本的に ALT が常駐している。この学校は過疎化の影響もあり、小規模校であった。それゆえ、おそらく一人一人ときめ細やかな指導での英会話時間が取れると予想された。ある中学1年生の女子生徒に英語で話しかけると返してくれたので、どうして英語を話せるのかを聞いてみた。彼女は小学6年生までソウルに在住していた。ソウルでは幼稚園の時から、放課後に英会話スクールに通っていたという。だからここまで話せるようになったとのことであった。他の生徒は英会話があまり得意ではなく、明らかに彼女だけが英会話のレベルが高かった。興徳高校では1年生の ALT の授業を参観した。生徒達は ALT の言っている内容は大体聞き取れているようだった。2年生の教室で何人

かの生徒に英語で話しかけてみた。簡単な質問事項であったが受け答えの様子を聞くとあまり英語は話せない様子。おそらく一般的な日本の生徒達と同じで英語は読んだり聞いたりすることはできるが話すことは苦手という感じであった。また、ホームビジットで会った女子生徒は、別の高校（大学進学を目指す高校）であるが、その学校の英語授業はリーディングや文法中心で週1コマだけ ALT の授業がある。彼女は大学受験のため、毎日午後10時まで学校で自習をし、週2回、その後家庭教師が来て英語を11時30分まで勉強する。一方、江原外国语高等学校の様な語学に特化した高校もあり、そこではアカデミックな英語教育が行われている。All English で ALT がメインで授業を行い韓国人の英語教師がサブであり、内容は ALT が英会話中心、韓国人英語教師は文法やリーディングを行っている。今回は学校とは別の英語体験センターも訪問できたことが収穫の一つだ。この施設は各自治体が設置している。各小中高から選抜された数人が英語プログラムに参加できる。放課後だけでなく何日間か通しての授業もある。そのための宿泊施設も完備している。公私扱いとなり児童生徒の不利になるようなことはない。こういった施設はおそらく日本にはないのではないか。

以上のことを踏まえて、韓国の英語教育について気付いたことを挙げてみる。第一に英語の教育環境の良さである。小学校から高校まで、英語教育に対する熱意は強いものがあった。設備や人員配置、そして教員に対しても海外研修を義務付けるなど十分な投資をしていると思う。第二に様々な格差である。都市部と周辺都市の格差、大学進学に向けての学校間での格差、そして保護者の経済状況により英語のレベルに差が出てしまう。これは日本にも共通する悩みであろう。全体の印象としては韓国の英語教育は日本より遙かに進んでいるという印象は受けなかった。日本同様に大学進学に関する問題で試行錯誤するという面があった。しかし、各学校への予算配分や英語教育への投資率、ALT の常駐率、そして実践力とそのスピードは日本より勝っていると感じた。今回の訪韓で得られたことは、もちろん英語教育についてだけではない。実際はそれ以外での収穫の方が大きかったと思う。様々な方々と接し、自分自身、一層視野を広げ勉強したいという向学心を刺激された。何より、これからもっともっと頑張りたいと素直に思えたことが嬉しかった。このような機会に恵まれたことに心より感謝したい。

ICT、英語教育等について学ぶ 塚本 和敏

この2年間、勤務校で訪問団を受け入れさせていただき韓国教員との交流を体験することができた。また、本校では市が主催する海外研修プログラム引受先として様々な国の方々と交流を持つ機会がある。ただ、教員同士が交流できる機会は限られているのが現状である。そして、私自身がアジアでの教育について深く学びたいと思いプログラムへ参加した。

今回のプログラムに参加できたことで、色々な交流方法を学ぶことができた。また、教員として日本の食文化授業を韓国の高等学校で行うことができたことは非常に有意義な経験となった。私は英語が話せるわけでもなく、ましてや韓国語についてもあいさつ文を何回も見返しながら覚えるに精一杯であった。韓国で授業をすることが決まっても日々の仕事の中で準備が不十分であった。その状態の中で私自身が、韓国の先生方と交流することができるのか不安でいっぱいであった。しかし、二日目の歓迎会で、ホームビズット受け入れ先の方が日本語の先生であることや、言葉が通じなくても身振り手振りで伝えたりすることで交流ができたので非常に安心した。その中には、同プログラムでの日本訪問者の方もおられ、訪問地での体験を、「充実した交流であった」とおっしゃっていたのが印象に残った。

韓国の教育について全く知らなかつたため、今回はICT教育とその活用について勉強したいと考え、学校や教育施設の見学を行つた。実際に学校を訪問し教育施設を見学したが、韓国の教育にかける情熱は並々ならぬものがあり、教育に対する姿勢に刺激を受けた。小・中・高や教育施設どこを見ても設備が充実していて、ICT機器についてはどの教室にも整備されており使いやすそうであった。小学校では、ICT機器を駆使した英語の授業を参観させていただいた。教室の中には英語に関するものが多く置いてあり英語に力を入れていることがわかつた。今回のプログラムでは、受け入れしてくださる関係者の方の体制が非常によかつた。旅行ガイド方や通訳、韓国ユネスコ国内委員会のスタッフに助けられ、また、私たちの質問にも快く答えて下さつた。

現地で行つた日本の食文化の授業は、非常に有意義なものであった。私は高校1年生女子クラスで、日本のお菓子の独自の味の紹介、わさび味や抹茶味

のお菓子の試食、パワーポイントを使用してキャラ弁、お寿司屋さんの紹介をした。生徒の反応もよく、楽しんでくれたので非常にうれしかつた。

1か月という準備期間であったが、今回の授業で国際交流について考えられたこと、また実際に経験できたことは非常に有意義な時間となつた。日本、韓国を問わず、今回のプログラムで出会つた先生方は、教育への関心が非常に高く、熱心であつた。日本の教育事情についても語り合う場となり、とても有意義な時間であった。今後も生徒のために異文化理解や異文化交流を続けていきたい。

日本の子どもに語れる教師に 中口 健太郎

「韓国」と聞くと多くの日本人には韓国ドラマ、K-POP、キムチ、焼肉などのイメージが沸き起る。その一方で従軍慰安婦問題、領土問題、歴史教科書問題、在日韓国人への差別問題などから「反日感情の強い国」という印象も強い。メディアの報道により、本校の児童に韓国の印象を聞いても「日本の方が好きではない国」、「日本とライバルの国」という答えが返つてくるほどである。「少女時代やKARAなどK-POPアーティストは好きだが、韓国という国に対してはいい印象をあまり持っていない」という心の溝がある。今回、本プログラムに参加するにあたり自分に設定した課題は、「日本の子どもたちに韓国の良さを、説得力を持って語るために、韓国の人々の良さを心から実感する」ということである。私はこれまでヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、東南アジアの国々を10カ国程度訪問してきた。そこから共通して学んだことは、「どの地に行っても親切な人がおり、言葉や文化は違えども理解し合い仲良くなることができる」ということである。だが、韓国だけは別であった。歴史的な心の溝が私自身にあったためである。渡韓前は、「韓国の人もきっといい人達だと思うよ」という言葉でしか子どもたちに語ることができなかつた。だが本プログラムを終えた今では、「韓國の人達はすごく親切だよ。優しい人たちがたくさんいるよ」と実感を伴つて子どもたちに語ることができる。それが、このプログラムで得られた最も有意義な変化である。では、その心の変化はどのようにして生まれてきたのか。韓国の教育施設を訪れた際、ICT教育環境の整備が進んでいることや英語教育が熱心に行われていることを目の当たりに

した。PISA調査の学力の比較では日本と同レベルに高い韓国である。また日本の隣国であることからも「ライバル心」を持たずにはいられない。「日本も負けではない」と素直に感じた。だが、それ以上に児童・生徒は元気で素直であり、我々の文化紹介の授業をきちんと受け止めてくれていた。廊下を歩くと「こんにちは」と進んで日本語で挨拶してくれる生徒もたくさんおり、日本人に対して良い印象を持ってくれている子がたくさんいることを感じた。また、職員もとても親切であり、懇談会の際には教育システムの違いのほか、同じ教員という立場での辛いことや大変なことを分かち合える話し合いができた。そして、何より心から韓国の人への優しさを感じることができたのはホームビジット（家庭訪問）の時である。受け入れ先の御夫妻はたいへん親切にもてなしてくださった。日本旅行の写真を見せて下さったり、韓国の伝統的な衣装「パジチョゴリ」を着させてくれたりと、とても親しくなることができた。そのホームビジットで市場に連れて行ってもらった時の事であった。御夫妻は偶然、知り合いの60代後半の男性と出会った。その男性に対してご夫妻が、「日本から来ている教員だよ」と紹介して下さった際に孫を連れたその男性は日本語で、「ようこそ。こんにちは」ととても気さくに話しかけてくれた。本プログラムで接する韓国人達は、教育関係施設やホームビジット、またお店の店員など日本人を受け入れることを前提としている人たちであり、そのためにどの方もたいへん親切なのだと思っていた。だが、彼は市場で偶然出会った男性である。日本と韓国との心の溝を知っているお年寄りの方ですら、日本人を気兼ねなく受けて入れてくれる。そこにリアルな韓国の人への優しさを感じた。そして韓国に対して心の溝を持っていた自分を恥ずかしく思った。「人は人なのだ」と感じることができた瞬間である。

「韓国人達はすごく親切だよ。優しい人たちがたくさんいるよ」。今の自分は心から韓国の良さを子どもたちに語ることができる。この感覚を大切にして韓国とのESD、ユネスコスクール活動につなげていきたい。本プログラムに参加できたことを本当に感謝している。

ICT教育のさらなる活用を目指して 永山 裕基

今回、1週間にわたり韓国の教育現場を観察するにあたって出発前に興味をもっていたことは、教育現場における情報機器の活用である。日本よりも普及率・活用率で進んでいることについては知っていたが、どのように活用されているのか、またどれだけの教員が効果的に活用しているのかなどを学び日本に持ち帰り、自校で活用することができればと考えていた。

実際に韓国の学校での活用場面を見て驚いた。観察したすべての学校の教室にパソコン、プロジェクタ、大型テレビが設置されていた。授業では資料提示や板書の補助的な使用等、活用方法はさまざまであった。自分の勤務する学校にも、教室に大型テレビはあるが、パソコンやプロジェクタはパソコン室での保管となっている。運び出してセッティングする時間を短縮できるのも情報機器を活用するハンドルを低くしているのではないかと感じた。また、若い先生だけでなく、ほとんどの先生が何の問題もなくパソコンを操作し、授業に活用していることにも驚いた。観察した日だけではなく、一人一人の先生方が毎日の授業で活用していることを感じた。さらに関心をもったことは、資料や指導案などのコンテンツの共有である。韓国の先生方の話の中に、優れた実践については共有し、ほかの学校の先生が使えるようになっているという話をうかがった。自分の勤務する千葉県においても、県の総合教育センターのサイトから指導案を閲覧できる仕組みがあるが、教員間のネットワークで資料や映像の共有については自分の知る範囲では聞いたことがない。こうした教員間で自由にやり取りできる強固なネットワークを構築することについては、今後日本においても広まっていければと感じた。そこから、今日取り上げられている「教員の多忙感」、「勤務時間超過」のような課題が減っていくと感じた。

自校では校務分掌の一つとして情報教育主任を担当している。今回韓国で学んだ「情報機器の活用」について、まずは自校から普及させていきたい。学校備品として、パソコンやプロジェクタなど同じような機器はそろっている。しかし、先生方の利用率は低い。それは先述した「準備に時間がかかる」という問題が大きいと考えている。気軽に使えるよう

にするとともに、自分が授業で情報機器を活用し、効果的であることを先生方に感じてもらえるように努力したい。また、他校にも実践を広め、今回自分が学んできたできるかぎりのことを市内の教員、そして子どもたちに還元していけるよう努力したい。

地球市民としての再認識

西浦 博之

1994年に関西国際空港が開港し、和歌山県北部が空港へのアクセスがよくなったことを受けて、海外への関心が一気に高まり、19年前の1995年から長期・短期留学生の派遣・受け入れ、国際交流（短期海外研修）、世界遺産学習等の国際理解教育に関わってきた。そのような中で「国際理解教育とは何か」、「海外で日本文化を紹介することとは」という問い合わせを持ち続けてきた。書道やお手玉・けん玉・紙風船・駒まわしといった日本伝統の遊びの紹介や浴衣の着付け、相撲、日本の四季といった文化や自然の紹介などを行ってきたが、果たしてそれが日本を本当に紹介することであろうかと。今回のプログラムでは、教育庁訪問やホームビジット、小・中・高校で授業参観や授業を行うなど直接児童生徒と接する機会を得られたことで、その反応を知ることが出来ることを楽しみにしていた。その答えは、日本を代表する遊びや文化の紹介は材料であり、手段であるということであった。何を材料としても日本人のきめ細やかさを伝えたり、ものの考え方を感じさせることが日本文化の紹介であるのだ。同じ空気の中でそれぞれの感じ方をすることで得られる感受性は、違いを理解するとともに共通性を発見する。方法を模索する中でさまざまなことを体得する。そして、これこそがESDにつながるのだと気付かされた。

本校は2014年にユネスコスクールに登録された。ESDの拠点校としてどのようなことが出来るのか。韓国のユネスコスクールを訪問して各校のESDの取り組みを学び、日本の各地から参加された先生と話す中でその答えが得られたように思う。まず、忠清北道の教育庁では「とともに幸せな教育」という教育方針を掲げていることであった。素直で簡単な言葉ではあるが、教育に求められる最も基本的な考え方である。教育が目指すものは「生きる力」であり、それは世界中のすべてのものが共に幸せを求めるための教育である。韓国では学歴偏重社会があり、成績主義が導入され、教育長であっても選挙によって

決まり、優秀教育長といった呼ばれ方が存在する。また、男女は別々のクラスで授業を受ける。そのような中で、生き生きする学校、楽しく学ぶ、暖かい心を培う具体的目標を打ち立てているには今までの韓国の教育への変革が求められているからであろうと感じた。

小学校を訪問して教卓にパソコン・大型テレビ・プロジェクター・タブレットが備わり、ICT機器が充実していた。韓国は2015年までに電子教科書をすべての小・中・高校に完備するという。日本は2020年までとするのに比べて進んでいる。しかし、あくまでもツールであって使いこなせなければ意欲がなくなっていく。教師も含めてサポートする体制が必要である。また、OECDの21世紀型の学力とは発想力、批判的思考力、表現力、グローバルコミュニケーション能力、論理力の5つであると定義されている。韓国では能動的に学ぶ意欲が低下しているとの懸念もされている。それは、ICT機器に依存しすぎたために結果が即時に得られるため、意欲が低下したというのだ。自分の考えを可視化したり個別の学習でICT機器を利用して調べることによって好奇心や探究心を高めることに役立て、グループ学習などを通してOECDの5つの学力を伸ばしながら、自然とICT機器の有効な部分を活用することが必要であることを韓国の実際の授業から得ることが出来た。

授業をする機会が与えられ、直接生徒と接する機会が得られた。生徒たちは日本文化に興味深々で発言も活発、届託のない笑顔に日韓の高校生と少しも違ひがない「地球市民」であると実感した。

日本からわずか2時間足らずの地において毎日が新しい発見という「非日常」生活の中で新しい人々との出会い、多くのアクティビティーを経験する中で一緒に参加された先生方や韓国の方々と信頼関係を築いていくことが出来たと確信している。

7日間という短い期間ではあったが、本プログラムで得られた経験は今後のESDや国際交流、国際理解教育に多大な成果が得られた。そして、この経験を元に今後「One World.」の思いを胸に、世界を視野に入れたグローバルリーダーの育成に寄与していくたい。

韓国で学んだ ESD 原田 海希

今回の研修は、私の中で3年間という一区切りが終わつた直後の参加であった。達成感でいっぱいで心情的にはもう空っぽの状態で参加していた。しかしながら同時に、次への目標と課題、そして原動力となる興味関心を持つて何かを見つけるといけないという焦燥感も持ち合わせており、このタイミングで韓国研修に参加できたのだから何か掴んで帰らないといけない、そう感じていた。韓国の英語教育が進んでいるということは聞いており、彼らはどのようなプログラムでその英会話技能を獲得しているのかということにはとても興味があった。私は高校生にセーリングを指導しているが、技能獲得という視点から、その指導法を観察するのが今回の目的の一つであった。また、ユネスコの提唱する ESD、持続発展する学びとは本質的にどういうことなのか、それを違った環境から観察したいと考えていた。

実際に韓國の小・中・高等学校を訪れて、ICT の活用が積極的であることや、小学校での英語学習を見学する中で、子どもたちの取り組む姿勢の良さにその効果を良く実感することができた。また、机上に日本語で落書きする高校生を見て、ハングルで落書きする日本の高校生と同じだな、と彼らに共通する部分も見ることができ安心した。反日や嫌韓といった言葉を生んだり、植えつけているのは大人たちなどと実感させられる出来事だった。それは韓国での授業実践でも感じることができた。通訳を介しての授業なんてできるのかと心配していたが、彼らと授業という形で交流が出来たことはとても貴重な経験となつた。

韓国での教育講義のなかで、「子どもたちにセカンド・チャンスを与える」という言葉が、もしくはそれと同義の表現がよく出現した。私はこの言葉に不思議な違和感を覚えるとともに、何かのヒントになりそうな気配を感じた。日本での教育は「できるまで教える」か、「さわりだけ教え、あとは自主性に任せる」の二者択一が主流になっているのではないかと感じたのである。セカンド・チャンスを与えるということは、それを掴みにくる子どもたちがいて、またそれに応える、それを期待している教師がいる。これは教師が計画的に、かつ忍耐力をもって挑まないといけない部分であり、日本においては、特に高

等学校ではあまり効果的に機能していない部分ではないかと感じた。ESD を実践していく上で、子どもたちの「自発的態度」というのは一つのキーワードでもあるし、高校生くらいになると、自発的にやっていること程度では実践として不十分となることもよくあることだ。そのせいか「自発的」ということが置き去りにされることもある。そのミックス・バランスをとることは教育の永遠のテーマもあるが、私は今回の研修で、韓国で実践されている教育がいかにこの「自発的態度」を重要視し、育てているかを見て、学ぶことができた。これをいかに自分の教育活動に取り入れ、生かすことができるかがこれからの私の課題となるだろう。違う環境を見て学ぶということがいかに大切か、日頃生徒たちに言っていることを自分で実感することとなった研修となつた。このような機会を与えていただいたことに感謝したい。

『つながり』づくりの旅 松倉 紗野香

私にとって韓国はとても親しみのある身近な国の1つである。学生時代からの友人も多く、お世話になった方々もたくさん住んでいる。しかし、ふと思うと韓国の教育、特に本プログラムの目的である韓国における ESD や国際理解教育については今回の研修において初めて得られる情報が多くあり、韓国への理解をより一層深めることができた。本プログラムにおいて、多くの「つながり」に気づき、また「つながり」をつくることができた。私は本プログラムに参加するにあたり、3つの課題を設定していた。

① 韓国における ESD 実践について

現在、私は ESD を国際理解教育・開発教育の視点から研究をしており、韓国における ESD 実践については強い興味があった。日本における ESD 実践の多くは環境教育に軸を置くものが多く、そこから「地域」の学習につなげる実践が多く見られる。今回、訪問させていただいた3つの学校においても、ESD 実践の中には環境教育に関する実践が多くあり、日本での取組みと大変近いものを感じた。学校の時間割の中に ESD の時間を設定する学校、掲示物を作成している学校や、学校全体の取組みとして自然や地域とのふれあいの時間を作つて ESD を推進しているお話を伺い、所属校での ESD 実践づくりの大きなヒントを得られることができた。訪問させていただい

た学校がすべてユネスコスクール加盟校であったので、海外の学校（特に中国）との交流を実施している学校もあり「交流」を通した国際理解教育について紹介をしていただいた。

② 教員同士の交流

教員同士の交流会の場においては、同じ「教師」という職業柄か、児童生徒の話や授業の話になると「そうそう、私の学校も同じ！」という教師としての「想い」を共有することができた。国や言語が異なっても同じ「教師」同士、共通の想いを共有することができ、改めて教師という仕事の「魅力」に気付かされた。いつでも児童生徒を想い、その地域を大切にする教師の姿というのは、日本の教師も韓国の教師も同じ想いであった。また同じ英語科の教員同士が話をすると、教科書の話題から授業の組み立て方法や留学の話など話が尽きることなく共通の話題が出てくる。日韓の教師同士が抱える共通の教育課題も多く、情報を交換し合うことが大変有意義な時間であった。特に携帯電話（スマートフォン）についての課題や、将来の職業についての比較など互いに気になっていることや課題として感じていることへの共通点が多く、今後もより深い交流を深めていきたいと思っている。

③ 所属校と ICT を通じた交流可能な学校の開拓

本校では昨年度より学校課題研修において ICT 機器の効果的な利用について研修を行っている。その一環として、ICT 機器を活用した韓国の学校との交流をスタートさせていきたいと考えている。忠清北道の先生方や訪問した学校の先生方と連絡を取り合い、互いの学校で「できること」から進めていきたい。本校では、英語科の授業を中心に日韓合同で英語の授業を行い、英語を用いて生徒同士が交流する場を設けることを考えている。また、日韓合同の教員研修を実施し、互いの教員が考える「グローバル人材」について協議できる場をつくりたい。韓国で見学させていた学校の ICT 機器のすばらしさと、それぞれの学校で先生が ICT 機器を活用する姿を拝見し、所属校においても韓国の実践をヒントに更なる研修を積み重ねたいと考えている。

今回のプログラム参加にあたり、快く参加を許可してくださった所属校や関係機関の方々への感謝と、実施にあたり準備、調整を実施してくださった方々、通訳やガイドの方々へ深い感謝を申し上げたい。今後は本プログラムで経験させていただいた内容を私自身の 1 人の経験としてではなく市や県全体の中で

の取組みとして実践・交流を積み重ね、「つながり」を継続できるよう働きかけていきたい。

学びのエネルギーはどこから…

松山武彦

韓國の小・中・高校を訪問し気づいたことは、三校とも児童・生徒の「学び」に対するエネルギーが日本を上回っているように感じたことであった。学習中に教師を見つめる目、友達の意見をしっかり聞こうとする態度、そして何より学ぼうとする意欲を感じることができた。また、学習規律が守られており、礼儀作法が確立されていた。学習中の私語はほとんどなく、だらだらした座り方なども見られなかった。小学校では授業時間中の移動の時、きちんと並んで手を後ろに組んで静かに歩いている姿が印象に残っている。私たちゲストに会っても、立ち止まり、おなかに手を当ててお辞儀をしながら挨拶をしてくれ、とてもすがすがしい気分になった。さて、日本の現在の学校（すべての学校ではないが）と較べてみるとかなり様子が違う。「〇〇したくない」「〇〇がめんどう」などと思うと、声に出して言ってしまい、おまけに同調する児童・生徒も出てくる場合もある。少し前までは日本でも、思っていても声に出さなかつたのではないか。そんなことを声に出すのが恥ずかしかったのではないか。学習規律・礼儀作法もできていない児童生徒が多い。できていなくても「恥ずかしい」と思わなくなってしまった若い大人（保護者）もいるように感じる。こんな風に日本の教育の現状を考察できるようになったきっかけをつくってくれた国際交流事業に感謝したい。児童・生徒と若い大人の意識を変化させることで、今の韓国の教育・少し前の日本の教育に戻すことができるよう思う。学習規律を守り、礼儀作法を身につけることは子どもだけでなく、大人にとってもすばらしいことであることを広く伝えたいと思う。詳しく話す機会が少なかったので残念だったが、韓国の徴兵制度が礼儀作法などに及ぼす影響が少なからずあるのではないかと感じた。個性や自由を大切にしすぎた今の若い日本人の未来を危惧している。意識を変化させることだけでなく、学ぶことに対するモチベーションを上げることも大切に思う。仕事をこなすだけでなく、学びを続ける大人としてよい手本となりたい。本校では地域学習をしながら ESD を進めている。たくさんの方々にお世話になり

ながら地域の現状を知り、地域の歴史等も学ぶ活動である。残念ながら韓国では画期的なESDをみつけられなかつたが、本校の地域を学ぶESDを進めていく必要を再認識した。児童に地域のことを教えるために、大人も学びを続けている姿を見ることは、児童にとっても貴重な体験だと思う。学びは学校だけで終わるのではなく、生きている間は学ぶという意識を持ってくれると信じている。最後に、教育長が選挙によって選出されたり、高校において有料の補習授業があつたりする教育庁（教育委員会）のシステムには驚いた。すべてを日本で導入する必要もないが、検討してみる価値はあると思う。特に教育長の選出方法は、教育長のリーダーシップを發揮しやすいという点ですばらしいと感じた。予算面においても忠清北道管内にある文化・学習施設の充実ぶりはその典型であるのだろう。

韓国の教育を目にして感じたこと 南 哲太

ICTの活用や英語教育は日本でも進められているが、韓国では非常に進んでいることを耳にしていた。自分自身ICTを活用した授業に非常に興味があった。また、英語が得意ではなく、授業で子どもたちの英語力やコミュニケーション能力を養うことができていてか不安に感じていた。そこで韓国のICTの活用や英語教育を実際に目にし肌で感じたいと思い応募した。

まず、韓国の教育現場を見学する中で、どの学校でもどの教室でもICT環境がすべて整っていることには驚いた。各学校に、大型テレビとパソコンが整備され、それをどの先生方も効果的に活用していた。自分自身、資料提示で使うことはこれまであったが、意欲を高めるためにこれまでの学習のダイジェストを作っていた先生もいらっしゃった。子どもたちのがんばりや成長を見ることができ、子どもたち一人一人を大切にされていることが感じられ、すぐにでも真似したいと思った。また、子どもたちが発表する際に、ICT機器を活用している姿も見られた。このような機会があることで人前で話す力を身につけているのだと感じた。やはり、ICT機器は子どもたちの意欲を喚起する有効な手段だと改めて感じた。

英語教育に関しては多くあった。特に印象的だったのは充実した学びの場である。忠清北道教育庁北部英語体験センターでは、様々な設

定の部屋があり、その場に応じた会話を学んでいた。ここは、子どもたちだけでなく、親子や教員の研修にも使われている。例えば、クッキングルームでは実際に料理することで料理をする際に使う英語を自然と話す。サイエンスルームでは、実験を通して実験に必要な会話を英語で話す。韓国語が禁止されているわけではないため、どうしても困った場合は韓国語を話しており、その安心感からか無理なく学んでいるように感じた。また、宿泊施設も整えられていて、合宿のような形で英語を学ぶことができる。子どもたちの表情を見ていると、どの子も楽しみながら英語を学んでいるように感じられた。英語が苦手な私にとってはぜひ参加したいと感じるプログラムだった。日本でも、こんな施設があれば子どもたちは喜んで参加するのではないか。

さらに、見学した学校はどこも教室ではなくイングリッシュルームで授業が行われており、忠清北道教育庁北部英語体験センターのような様々なシチュエーションで英語を学んでいた。そこには、ネイティブの先生がいらっしゃったり、大型モニターが完備されていたりと子どもたちがワクワクするものだけだった。それだけでなく、担任の先生方の英語力の高さにも驚いた。日本の教員も努力しなければならないと感じた。

このプログラムを通して、韓国の先生方と授業やホームビジットなどを通して教育について交流できたことや他県の先生方や文部科学省の方と教育について語り合い、つながりを持つことができたことは、私の教員人生でかけがいのない財産である。この経験を金沢市、職場、なにより子どもたちに還元していきたい。

韓国との数多くの共通点 村上 峻

本プログラムに参加するまでは、「韓国でどのような教育が行われているのか」ということに関してほとんどの知識がなく、日々教育活動を行うにあたって「視野を広げたい」という思いから本プログラムに参加した。実際に韓国を訪問すると、有意義だと感じられる事はいくつもあり、目に映る全てが新鮮に感じられるような7日間であった。小学校の訪問では、ICTを活用した授業をどの教室でも行っていた。ICT機器は準備・片付けの大変さがあり、自分自身日常的に使用出来ずにいたが、この小学校では

各教室にパソコンとつながっているテレビが設置されており、手間をかけずに済むような環境が整っていた。6年生の教室で授業を行う時には、日本で作成した資料を使う際にUSBメモリを挿すだけすぐに使用することができた。また、ESDの学習については、多文化理解や環境の分野を中心に創意の時間に**20時間**設定しているとのことだった。教室掲示にESDコーナーがあり、児童とともに目標を確認したり達成感を味わったりできるように活用されていることも参考になる取組だった。日本の地理や文化についての授業を行う際には、どのような反応を示されるか不安だったが、熱心にメモを取りながら話を聞く児童、日本について知っていることを積極的に話してくれる児童など素直で真面目な児童が多く、終始温かい雰囲気で授業が進んだことは非常にありがたかった。折り紙の「手裏剣」は、「幼稚園でやつたことがある」とのこと、自分で折れる児童が複数いた。「日本独自の文化だ」と思っていても、共通していたり、文化をお互いに取り入れ合ったりしていることを実感するような経験だった。ホームビジットは、事前の情報では夫婦で**2人暮らし**の家庭だということだったが、同じアパートに住んでいるご両親や兄弟夫婦も呼んで**6人**で出迎えていただいた。日本に留学経験があり、日本語が話せる方が複数いらっしゃったので、コミュニケーションは日本語で取ることができた。「遠慮しないでたくさん食べて」と、韓国の家庭料理をご馳走になり、韓国の文化や学校事情などについての話をして、韓国の家庭の文化に触れる大変貴重な機会だった。あつという間に時間が流れてしまったが、帰りにはご家族みんなでホテルまで送っていただき、ここでも韓国の方々の温かさに触れることになり、忘れない思い出となつた。この他にも勤務校と似た環境にある小規模校を訪問する機会もあった。小規模ならではの家庭や地域と密接につながりのある教育活動を展開している学校で、**2016年**に統廃合を控えているとのことだった。日程を縮小する案の挙がった行事でも、「伝統だから続けたい」という声があり、継続することになったそうで、児童数の減少により教育活動の維持が難しくなっているが、「これまでの伝統を守りたい」ということから簡単に行事を削減できない勤務校の現状と重なる部分が多々あった。また、この学校では川や山といった豊かな自然に囲まれた学校だったため災害対策についても話を聞いた。韓国でもセウォル号の沈没事故などをきっかけに安全・防災

教育に力を入れているということだった。この点でも、韓国も日本も共通する課題が多いことを感じた。

今回韓国人や文化に触れたり、学校現場の様子を見たりすることにより、韓国に対する心の距離がぐっと近くなったように感じる。言葉や文化が違うといつても似ているところが数多くあり、何よりも人の温かさがすばらしかった。本プログラムに参加したことにより学んだことを今後の教育活動に生かせるように努力していきたい。

多文化理解にむけて

本川 梨英

今回の訪韓プログラムでは私自身多くのものを日本に持ち帰ることが出来たと考える。例えば、興徳高校での「One book、One school」という取り組み。本校でも、読書を重視した教育が行われているが、読書の重視という点では共通するものの、同じ本を全校生徒が読んでディスカッションを行うという方法に触れて、読書の活かし方の新たな方法を見つけることが出来た。また、同じく興徳高校の数学の授業では、教室の壁いっぱいに設置されたホワイトボードに生徒たちが同じ問題の解答を書き、教員が様々な解法で解かれた問い合わせについて解説をするという授業が展開されているという。ここでも、「One book、One school」の取り組みと同様に生徒の多角的な思考を育てるための教育が施されている様子を実感することが出来た。

私自身が今回の訪韓で最大の目的としたのは、「多文化理解」のための教育をどのように教育の現場で実践していくかを見極めることだった。今回のプログラムを通じて、改めて世界の文化や価値観の多様性を認識するとともに、その**1つ1つ**がかけがえのない尊さを持っていることに気づかされた。「多文化理解」のためには、お互いの文化や歴史に触れそれを尊重することが何よりも重要なことだと考える。そのためには、まず相手を積極的に知ろうとすることが必要である。今回の訪韓では、随行して下さったKNCUの方々やホームビジット先のご家族、忠清北道教育庁のユチョル氏をはじめとして、多くの方々が様々な場面で私たちに関わりご尽力を下さった。また、夕食会や昼食会の場では、私が投げかける様々な疑問に真摯に答えて頂いた。個人間の関わりと国と国との関わりはレベルの違う問題であることは十分に認識しているが、一方で国を形成するの

は人なのだから、このような個人レベルの交流や相互理解が積み重なればいつしか大きな流れを作ることができると信じている。昨今はグローバル化が急速に進展する一方で、グローバル化の進展がむしろ国家間の対立や価値観の対立を誘発している感も否めない。特にネットなどを中心に偏狭なナショナリズムが醸成され、世界の文化の多様性を受容することに抵抗する人たちもいる。私たちは、時として国というマクロな次元で物事を捉えることを当たり前と考え、そこに生活する人たち1人1人に対する視点を忘れてしまいがちだ。お互いの文化を尊重し理解しあうためにまず必要なことは、マクロの視点から離れ日常的な視点に戻ることだと考える。では、私自身はこの経験をどのように教育の現場で還元していくべきか。日頃より専門分野である歴史学を通じて多角的な視点から物事を見ることの重要性を生徒に伝えたいと考えていた。歴史こそ、多面的な個別事例の集積から普遍性を見出すための「科学」でなければならない。「多文化理解」のためのステップ同様、マクロの視点のみで思考することなどできはしない。この視点を生徒に持たせるためにできるとの1つは、多くの個別事例の集積をできる限り継続的に生徒に提示し続けることだと考える。今回の訪韓の経験はもちろん、自分自身が積極的に多くの国や地域を訪れて多様な歴史や文化に触れることで生きた教材をつくることを忘れてはならない。最後に、私自身の教育活動に多くの視点を与えて下さった日本教職員の方々やKNCUをはじめとする現地の方々に対して心から感謝の気持ちを表したい。

共に 板橋 奈緒

今回韓国を訪問してみて日韓両国は似ているということを様々な場面で感じ、今まで以上に韓国を近くに感じることができた。訪韓前は、加熱する受験戦争、受験ありきのような学校教育について耳にしていたため、教育に対する考え方にはかなり違いがあるのではないかと思っていた。しかし、実際に韓国の先生方と話をし、授業をみていると、教育に関して感じている悩みや現在行っている取り組みなど、思っていた以上に共通する部分が多くあることが分かった。

今回の訪韓の目的の一つが韓国の英語教育を直に見てくることだった。訪韓前は、英語に関しても早

期から厳しいトレーニングで英語力を高めているのではないかとのイメージを持っていたが、実際に授業を見ると小学校段階では日本と同じような点を重視しているとの印象を持った。一つは、楽しみながら英語に慣れ親しむという点である。見学した小学校の授業では、体を動かしながらのチャンツ、ペアでの対話活動など、楽しく英語に慣れ親しむような活動が行われていた。もう一つは、座学ではなく体験を通してコミュニケーションの力を育てるという点である。英語研修センターでは、8人程度のグループでネイティブの先生と英語を使ってゲームをしたり、料理をしたりと、生のコミュニケーションを行う場面があった。「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ(活動する)」を中心にしているという印象であった。これらは、日本で自分が大切にしたいと思っていた点でもあり、似たような方向性を持っているからこそ同じ目線で学び合える部分が多くあると感じた。また、このような小学校での英語教育が、中・高にどうつながっていくのか、受験英語とどう折り合いをつけていくのかなどさらに知りたいことが多く出てきたので、今後も注目していきたい。もう一つ、今回の訪韓で気になっていたことが韓国の受験競争のことだった。実際に韓国人々、特に教育関係者はこのことをどう感じているのかを知りたかった。実際にやってみると、現在の韓国が受験学力・知識偏重の教育から、子どもの創造性を育てるに重点を移そうとしていることが感じられた。例えば、見学した学校では子どもたちのグループ活動や発表が中心だったり、内容も環境や伝統文化などのESDの視点を意識したもののが多かったりと、知識詰め込みとは違った形の授業を見ることができた。また、先生方に話を聞いてみると、「激しすぎる受験競争は好ましくない。自分の子どもたちにはもっと自由に学ぶことの面白さを体感させたい」、「何でも早期から詰め込み型でやればよいというものではない。芸術や文化などもっと大切なこと、教えるべきことがある」という考え方も聞くことができた。ただ、受験の制度自体は残っており、保護者からは受験対応への要望等もあるとのことで、先生方も模索しながら進めているという現状は日本とも共通する部分が多くあると感じた。

この8日間の経験は、外国の異なる教育システムに学ぶというよりも、「子どものために何をしていたらよいか」を共に考える仲間が韓国にも発見できた貴重な経験となった。思えば訪韓前は、「違う」に

学ぼう、「違う」を理解しようと無意識のうちに「違う」を前提に考えていたと思う。しかし、実際には、同じような課題を持ちながら同じ方向を向いて話をしていると感じることが多くあった。そして、教育の面でも文化の面でも似ている部分が多いからこそお互いに学ぶことが多いと感じた。今回の訪問では、韓国的一部分しか見ることはできていないと思うので、今後も共に学び続けていきたい。

自分の目で見た韓国

八木 絵美

日韓の国際関係が不安定である昨今、今回のプログラムに不安がなかったわけではない。最終的に応募を決めたのは、以前の勤務校で3日間クラスで迎えた韓国生徒との出会いが大きかった。彼の礼儀正しさがあまりに印象的だったのだ。マスコミが報じるのではない、自分の目で見た韓国を信じたいと思い応募した。参加が決まり、目標をいくつか掲げた。今年度、私は3年生の英語科を担当しており、この機会に韓国の生徒達と英語で交流したいというのが第一の目標だ。第二の目標は、実際に韓国の中学校で行う授業を成功させること。第三の目標は、韓国の教育事情について詳しく学ぶこと。

第一の目標達成のために、担当している生徒たちに学校や自分自身についての英作文を書いてもらい、持つて行くことにした。また、自分でも学校紹介の写真と英文を準備した。これは中学校の生徒だけではなく、ホームビギット先の子どもたちも関心を持ってくれ、会話の糸口となった。第二の目標に関しては、パートナーの先生がワークシートを作成して下さった。扇子に筆ペンで漢字を書く活動だったが、通訳が入らない予定だったので、いざとなったら英語で説明できるよう、下調べや英文資料の準備をした。それらを通して日本文化を見つめ直すきっかけになったと思う。少人数の静かな生徒たちだったが、たくさん字を書いたり、色ペンで飾りつけたりと、いろいろ工夫してくれた。第三の目標に関しては、事前研修で日韓の教育事情は似ていると思った。より深く知るため韓国について調べた。ICT活用と英語教育が盛んで、受検が大変との印象を受けたので、ぜひ体感してみたいと思った。実際に3つの学校を訪問し、ICTが整備されているだけでなく、教師も活用しているのが印象的だった。また、英語教育については、特に高校生はかなり積極的に英語でコニ

ュニケーションがとれていた。韓国語が全く分からない自分でも英語で意思疎通ができ、非常に助けられたと思う。国際語である英語学習の必要性を痛感した。受検に向けて夜遅くまで学校を開放しており、その分の教員手当が出る、という話にも驚いた。日韓の教育には相違点はあるが、どこでも子どもは大切である。韓国でも近年はいじめや暴力、登校拒否など日本と同様の問題がある。試行錯誤しながら将来を担う子どもたちを育てようという強い思いを感じられた。

今回の研修では、韓国人や日本人教職員との出会いも大きかった。東京での初顔合わせでは、取り組みへの不安も大きかった。事前にメールで交流して準備に臨んだが、日が経つにつれ、このメンバーで良かったと心から思えるようになった。地域や校種は違うけれども、様々な個性や特技、思いを持つ先生方と語り合うのは楽しく刺激にもなった。また、児童生徒や先生方、スタッフの方々、ホームビギット先の家族など、多くの韓国人たちとの出会いもあった。皆、笑顔で親しみを持って接してくれた。我々をもてなそうという一生懸命な思いが伝わってきたのも嬉しかった。韓国や教育に関する単なる知識だけでなく、人と人が関わるというのはどんなことなのか、同じ地球に生きる人間のあり方の根本について学ぶ機会を頂いた。今回のプログラムを通して知り合えた同じ空の下で頑張っている仲間を思いながら、今後も子どもたちのために頑張りたいと思う。

6. 今後の 活動予定

伝える

◆職場・職員に伝える

- ・自校の職員に韓国の教育を紹介し、有効と思われる方法を積極的に取り入れるようにしたい。
- ・9月末の職員会議で参加報告を行い、本校教職員の ESD に対する理解を深め、本校で行われてきた様々な教育活動を ESD の視点で見直す。また、韓国の教育事情を知らせ、韓国の教育に興味を持つてもらう。
- ・自主研修を行い、他の教職員へ自分が考えた事や学びを伝える。外国を知ることまで、理解するところまで授業で達成できずに悩んでいる教員は他にもたくさんいる。
- ・本プログラムで学んだことを職場でプレゼンテーションしたい。特に ESD についての報告に重点をおき、市内の小中学校において ESD への理解が深まり活動が広がるよう働きかけていきたい。
- ・韓国が充実した英語教育と ICT 機器の充実について教職員に広めていきたい。
- ・授業での情報機器の活用を進めていきたい。小規模(各学年1クラス)の小学校なので、学級担任は6人しかおらず、広めていくのは容易である。また、PTA 寄贈による液晶テレビが全教室においてあり、操作や活用方法の研修を行い、担任全員が情報機器を活用した授業を実践できるようにしたい。
- ・ESD について研修等を通じて、総合や食育、国際交流など普段の授業が ESD につながっていることを教職員に伝え、実践を深めていく。
- ・今回学んだことを本市の教職員に伝える。特に、英語教育や国際理解教育の分野で今回感じたことを共有したい。

◆児童・生徒に伝える

- ・今回の訪問で得たものを国際理解教育(ねらいは「日本と韓国の共通点を知る」)の視点から子どもたちに伝えていく。
- ・全校朝会において、本プログラムについて紹介した。韓国と日本の写真を混ぜて提示し、その写真を通して、「日本と韓国は似ているということ」、「違いを見つけるのではなく、共通点を見つけ、お互いを知りあい仲良くなっていく」というのは、国同士だけでなく学級の友達と仲良くなる時も同じだ」ということを伝えた。
- ・英語の授業で生徒に参加報告を行い、韓国に対する興味・関心を高めたい。訪問した学校や生徒の様子、韓国の教育事情を伝えるつもりだ。また、DMZ と平和について考えさせたい。
- ・韓国を訪れたことを担当クラスの6年生児童に紹介したい。衣食住や学校の様子について写真や動画を使って紹介し、日本との違いや共通点について理解を深めたい。また、全校集会の場で紹介し全校児童に韓国の良いところを広めたい。そして、国語科や読書活動に関わるよう、韓国の民話を児童に紹介したい。
- ・本プログラムに参加する前にアンケートをとったところニュースなどの情報からどの子も韓国に関してマイナスのイメージを持っていた。自分自身が本プログラムで、韓国で実際に見てきたこと、感じたことを写真を通して子どもたちに伝え、身近に感じてもらえるようにしたい。
- ・韓国の学校生活や食生活などについて、朝会や道徳の時間に本プログラムで撮った写真を用いながら紹介し、同じところや違うところを考える機会を作っていく。韓国に対して良いイメージをもっていない児童もいるので、親切にしてもらった経験などを話し、韓国の良さを伝えたい。

- ・最初に試みたいのは、近くで遠い国韓国について、生徒たちに知ってもらうことである。たくさんの写真や資料、記録などがあるので、それらを使って韓国について知ってもらいたいと思う。また、写真などを掲示して、更に関心を持ってもらいたい。
- ・学級において、韓国と日本の共通点を探し、韓国の小学校についての紹介をした。

◆保護者・PTAに伝える

- ・保護者会で本プログラムの報告会を実施した。また、ユネスコが求める平和について、ユネスコスクールとして何ができるのかを考え、保護者へ伝えた。

◆その他の公共の場で伝える

- ・教育委員会ではユネスコスクール、ESDをテーマとした研修等は設定されていないが、「グローバル教育」を扱う研修の中で、本プログラムに係る成果を報告、周知する機会の設定を検討したい。

改善・新しい取組みに活かす

◆ESD活動に活かす

- ・ESDに対する取り組みを学校全体のものととらえ、それを実践していく核となる生徒グループを組織し、学校の活動の中に位置づける工夫をしたい。
- ・ESDを通して育てたい生徒像をまとめた校内のESD実践概念図作成し、教員の共通理解を図る。
- ・職員研修としてESDの研修を行う。今回の韓国訪問を通してESDがどのように取り組まれているのか、何を目的とするのかを、学校の職員を対象としておこなう。その上で学校としてのESDの取組を整理する。
- ・ESD10年が今年で終わるが、今後も引き続き取り組みを行い、変化・変動の多い世の中において、将来をどのように生きるかを考えさせていきたい。具体的には、対話的コミュニケーション型教育を今後さらに増やしていくと考えている。歴史教育では、事実をありのままに伝え、その上で判断する力を身につける。自然環境教育では、現状から何を学ぶかということを考えさせたい。多様な価値観・考え方を共有・理解し、それらを発展させた教育を行いたい。さらに本校は、「協同的な学び」を取り入れた教育活動を行っているため、それをさらに発展させ、対話から学ぶという活動を、各教科の授業から道徳・総合的学習の時間・特別活動に至るまで広めていき、言語力の育成に努めていきたい。
- ・DMZや国立公園を利用している環境教育例から、同じように学習利用するとよい環境が身のまわりにないか再確認したい。
- ・高校生が受けているそれぞれの教育について私自身が見てきたことを整理し、いくつかのトピックを提示し授業の中で生徒に話し合わせる。
- ・生徒とともに韓国の優れた食文化について更に知識を深め、実際に調理も行い、ユネスコ無形文化遺産に選ばれた食を研究していく。
- ・韓国に興味がある生徒とともに定期的に情報交換会を開く。
- ・児童には、つかませたい目的に応じた授業構成を組む。例えば低学年は、韓国に興味関心をもち親しみを感じさせること。中学年であれば、韓国の伝統や文化について理解を深めると共に、ESDの取り組みについて紹介する。高学年では、それに付け加えて、韓国と小学校とのESDの交流を促す働きかけをしたい。
- ・ビデオ会議などを通して交流した国々の歴史や文化などを知るきっかけを持てるようにつなげていきたい。
- ・地域交流がさかんな地域なので、米作り体験や福祉、環境についての学習のなかでESDにつなげて授業を進めていく。
- ・ESDを進める中で今回のプログラムの経験を活かして世界遺産教育を行っていきたい。
- ・本校の地域を学ぶESDを更に進めていく。
- ・本校のESDでは農園活動などの体験活動がメインになっており、探求的な教育活動を児童が主体となって行っていくことに関しては、少し疎かになっている部分があった。本プログラムで参観した学級では、毎時間の授業の最初に目標を確実に提示していたこと、学級にESDコーナーの掲示を作成して目標や成果を共有できるようにしていたことなどの工夫があった。本校のESD活動でも児童と目標や成果を共有したり、疑問を取り上げ解決していったりできるような学習の展開を工夫するとともに、教室の掲示についても工夫をしていきたい。

◆教科授業に取り入れる

- ・「国際理解」の授業で、K-POP やドラマ以外の韓国について学ばせる。
- ・今回のプログラムで学んだことを活かして、日韓両国のよりよい関係を構築することを考えさせる授業を開催し、機会を捉えて発信してみたい。具体的には、次のような学習を考えている。
 ① アンケートを実施し、生徒たちが韓国に対して抱いているイメージを共有させる
 ② 「韓流ブーム」と「韓国による反日運動」の報道を紹介し、そこから受ける感想を発表させる
 ③ 今回のプログラムでの交流の様子を紹介し、実際の韓国の人たちの姿を共感的態度で理解させる
 ④ その上で「日韓それぞれの歴史教科書から見える両国の歴史」を生徒に示し、立場や意識の違いから歴史がどのように違つて見えるのかを理解させることにより、韓国に対する理解を深めさせる。
 ⑤ 最後に、国家としての主張や利害に対立があっても、イコール危機的状況に陥るのではなく、未来に向けて友好的関係を構築するための方途を考えさせる。
- ・本校 6 年生の社会科授業において、韓国紹介を行う。
- ・中学 1 年と高校 3 年の地理の授業で一学期にすでに朝鮮半島のことを学んでいるので、研修の報告と韓国で購入した地図を使って、「韓国は朝鮮半島唯一の国である」ということが表されていることを説明。
- ・6 年社会科の単元「世界の中の日本」において、国際理解・平和・共生を学ぶ機会が設定されている。特に韓国の人々の暮らしを調べる内容も教科書に記載されているため、今回の経験を直接生かすことができる。ただの知識に留めることなく、韓国の人々が何を考え、日本とどんな関係にあるのか、文化を理解し尊重する心情を育てたいと思っている。また、直接的な学習でなくても、あらゆる教育活動を通じて他者を思いやる心、自ら判断し行動する力、確かな学力を育成することを意識していきたい。総合的な学習の時間には、キャリア教育の一環として職場体験を予定している。地域との連携をとりながら、共生の大切さを実感させていきたい。
- ・10 月の始めに自分の担当する「多文化コミュニケーション学」という国際理解の授業で、今回の経験を生徒にプレゼンする予定である。自分自身をサンプルとして、たとえ語学的に不安があつても外国に友人を作ることができると伝え、言語不安の強い日本の高校生たちを勇気づけたい。
- ・まず生徒に韓国の生徒の様子を紹介し、国際理解教育ということで授業をした。その際韓国籍の生徒には昔の教育の様子や、日本との違い等を話してもらった。
- ・6 年生社会科の授業で、韓国について調べる際や道徳で国際理解について考える際には、さらに深く韓国の良さを紹介したり、日本との間にある問題点を取り上げ、将来的な問題解決に向かって深く考える機会を設けたい。

◆教材・設備・指導計画に活かす

- ・英語の教育方法を見直し、文法の正誤よりも内容理解とアウトプットを中心とする授業に方向転換する。生徒が自分の意見を発表する場面や、それぞれの意見について話し合う場面を増やしたい。また、授業内でこまめに試験を行うことで、生徒に成長を実感させたい。
- ・韓国と日本の子どもたちを結ぶ教材として、描画を活用し日本の子ども達がイメージする『韓国』や韓国の子ども達がイメージする日本を表現させる。それらをもとに以下の三つについて生徒に考えさせる。
 ① 描画を通して韓国、日本について考え、また「自分」について見つめなし自己の在り方や生き方を考えさせる。
 ② 両国について様々な角度から「国家」像に迫ることを通して、韓国や日本の現状や課題について理解させる。
 ③ 日本と韓国をつなぐ、私達と彼らをつなぐ共通する問題点や課題について考えさせる。
- ・通常の国語の授業の中で ESD を実践できるような教材と授業についての構想を年内に作り、学年末のころに実践できるようにする予定だ。
- ・本プログラムでは、日常的に ICT 機器を使って授業している様子を見て学んだ。機器を新たに買い揃えることは難しい面があるので、現在本校にある機器を有効に活用できる方法を考え、日常的に ICT 機器を使って児童の興味関心を引き出したり、視覚的な面からも学習の理解を助けたりできるような授業の工夫を行っていく。

◆その他の取組みに活かす

- ・「和食と量的リスク」をテーマにした生徒の学びのデザイン、「食」をテーマにした放課後に行われる異文化交流の企画、学年全体で参加する「食料の量的リスク」講演会の準備など、SGH 課題研究の計画・準備に活かしたい。
- ・学校行事の充実化。3 年生のクラス担任として、自分のクラスの文化祭を生徒主体で動けるようにサポートする。文化祭全体の質の向上のため、自分のクラスだけでなく、3 学年のクラス全体に気を配り助言する。3 学年による球技祭を教員主体で企画するのではなく、有志実行委員を募り生徒主体で企画、立案、実施する。
- ・私は和歌山県で数少ないヨットに乗れる教員である。これから和歌山県で海洋教育を実践していくというプログラムがあるが、いざれはこれに携わっていきたいと考えている。和歌山の子どもたちが海に来て、セーリングの技術を身

につけ、海で遊ぶことが当たり前になる、というビジョンを実現したい。現在は部活動で顧問として指導しているが、海というフィールドを使って、彼らに自発的に技能習得をめざし、上達してもらえるシステムづくりを考えたい。自分たちで考え、自分たちで実現する。そのフォローアップの体制を整えたい。

・本校はユネスコスクールに加盟しているが、市内で唯一の加盟校である。国内での交流という観点があまりなかったが、今回のプログラムで日本国内でも交流が可能ではないかと思ったので、前向きに考えてみたい。

今の活動を継続する

- ・現在取り組んでいる書き損じはがきや使用済みインクカートリッジなどの回収活動をより活性化させるとともに、地域に根ざした ESD 活動を生徒たちに考えさせたい。
- ・現在、行っている沖縄の学校との交流を継続する。

韓国との交流を実施する

- ・実際に触れ合える交流の場を設けることが大切だと感じた。自分たちの学校生活を伝えることで日本のことでも深く理解しようとすると思う。ユネスコスクールの学校間交流などを活用し、交流できる学校を探したいと考えている。
- ・韓国の子どもたちからもらった手紙を紹介し、また、韓国へ手紙を送る予定。
- ・生徒会に働きかけ、韓国との異文化交流に興味関心のある生徒を集め、メール等で両国間の違いや共通事項、環境問題などについて話し合うような交流をしてみたい。
- ・韓国の現場の先生方と両国の教育についてメール等で意見交換をし、見習いたい点、改善したい点などを見つけて出し、現場の教育を少しでも良いものにしていきたいと考えている。
- ・本校と同じカトリックの学校も多く、男女別学が普及しているので交流出来る学校も多いと考えられる。その際、学校訪問で国際交流、DMZ 訪問で平和学習を行いたいと考えている。
- ・ユネスコスクール間の生徒同士で小さな生徒会を作り、持続可能な開発について子どもの視点で継続的に討議する場所を設ける。
- ・訪問小学校とメール等を通じて児童の学習活動の写真等の交流を行う。
- ・上板町学校教育国際交流部会の事務局長として、2015 年度の町内の国際理解教育推進計画の中に韓国人・韓国の学校との交流を位置づける。
- ・系列大学と合同で、江原外国语高校との交流プログラムを実施することを提案した。
- ・韓国の小学生と本校の児童との交流(スカイプを使った交流、メールのやりとり、手紙のやりとり)を通して、お互いの国や文化について理解し合えるようにしたい。
- ・韓国の特別支援学校との交流を進めていく。すでに中学部のクラスから英語でのやり取りにはなるが交流したいと希望が上がっているので実現させたい。外国語の授業もしくは総合的な学習の時間などを使って、お互いの国紹介から ESD の概念に基づいた交流の実施を考えている。そのほかにも世界遺産や地域の文化財を扱うなどして、環境教育や国際理解教育を一時の学習に終わることのないよう、子どもたちのもっと知りたい、もっとやってみたいという気持ちを大事にして交流を深めていく。
- ・本校ではまだ生徒同士の韓国との交流実績ないため、少人数で行く韓国研修を企画・提案する。韓国の生徒と「食」をテーマに交流、韓国の授業体験、DMZ や第 4 トンネル見学を実施したい。
- ・本校は、韓国に姉妹校がある。12 月には順天梅山女子高校の吹奏楽部が来日し、本校の吹奏楽部とともに演奏会を行う企画があるが、その際に日本らしいおもてなしをしたい。
- ・韓国慶州女子高校との連携をおこなう計画である。2015 年 1 月に、15~20 名の生徒が交流のため一条高校を訪問する。また 2015 年の夏には一条高校の生徒が慶州女子高校を訪問し交流を継続する。
- ・来年度以降に江原道教育庁からいくつか韓国の学校を紹介してもらい、韓国の生徒と日本の生徒の相互交流、ホームステイなどを実施したい。
- ・ホームビザの家庭の息子さんと、自分の高校の生徒を文通させようという話になったが、その息子さんを起点にたくさんの韓国の高校生を紹介してもらうつもりだ。一人でも多くの自分の生徒が韓国人の友人を持ち、いい関係を築けるよう支援したい。
- ・本校と、研修で伺った興徳高等学校、あるいはホームビザでつながった清洲高等学校との交流を推進する。日本語、英語、韓国語でのメール交流の企画や、韓国の学校との関係をメール交換などで維持する。韓国について知つてもらうため授業等を通じて韓国の文化や教育について生徒につたえる。

- ・来年度はアートマイルプロジェクトに参加し、韓国の小学生と共同壁画作成の共同事業を行いたい。共同壁画の図案を考えるためにお互いの国の良いところを調べたり、コミュニケーションをとるためにビデオレター やスカイプで自己紹介し合ったりと、人と人との結びつきの場をもち、「同じアジアにすむ同級生」というグローバルな視点を持たせていきたい。そのための児童の交流の動機づけとして、担任である自分自身から、韓国を訪れたときの話をしたり、風景や食べ物等の写真・動画を見せたりすることで韓国に興味を持たせたい。
- ・当初、目標として掲げていた韓国の生徒との交流を検討したい。韓國の中学校に、勤務先のある石川県小松市についての資料(英文・韓国語)、写真付きの英文による本校での行事の説明、3 年生に書いてもらった英作文などを残してきた。今後、コンタクトを取って手紙かメールなどでの交流ができるとよいと思う。ただし当該中学校のホームページには韓国語の標記しか無く、英語でどのように交流するかは課題である。今回訪れた学校以外の韓国の学校との交流も視野に入れて検討しようと思う。

受け入れに生かす

◆次回(2014年1月)の韓国教職員招へいプログラムにむけて

- ・平成 27 年 1 月に和歌山県を訪問する予定である「韓国教職員日本訪問プログラム」訪問団に対して、今回の成果・課題を踏まえて協力していきたい。
- ・1 月に韓国の教職員の受け入れを行い、子供たちによる世界遺産「熊野古道語り部」と古道歩きで、田辺市の ESD の取組を紹介できればと思っている。
- ・今回韓国で受けたおもてなしを、韓国教職員訪日の際に本市でも返していきたい。

◆その他の取組み

- ・以前より続いている奈良市と韓国との交流行事に関して、今回の訪韓の体験を活かし、今後、日本での受け入れ時に積極的に参加していきたいと考えている。
- ・本校では、今年の 11 月 3、4 日に ESD 世界大会で日本を訪れる 4 カ国(フランス、レバノン、チリ、バングラデシュ)の生徒を受け入れる予定である。今回の訪韓で各学校を訪問した際に受けたおもてなし、ホスピタリティを参考にしながら、学校内各部署の意見をまとめてよりよい受け入れ体制を作りたい。また、国際協力という観点から、地元にある JICA 二本松と連携し、協力体制を確立することも必要である。近いところでは 9 月 27 日 28 日に JICA 二本松で行われる「ユース国際協力ミーティング」に本校から数名の生徒が参加する予定である。そして各学年とは総合的な学習の時間を利用し、受け入れ体制の充実を図りたい。校内ユネスコスクール委員会での話し合いを十分に重ねていくことが必要である。
- ・以前より、ACCU をはじめとして韓国からの訪問団の受け入れを行ってきたが、今後も継続して受け入れ、学校紹介や授業、施設見学、クラブ紹介、ホームビジット等の交流を行いたい。
- ・本校では、今まで海外からの訪問を受け入れた実績を持っていない。今回、私が訪問させていただいた学校の温かい歓迎に感動し、ぜひ恩返しの意味も含め訪問受け入れ事業の機会があれば、今度は本校で歓迎してお迎えしたい。
- ・次年度以降の韓国教職員受け入れのための体制を整備したい。今回の派遣プログラムでは、多くの教育機関で温かい歓迎を受けた。以前の受け入れの様子を思い返してみると、国際教育部など一部の部署が行っていた行事という印象が強かったため、できる限り多くの教職員をまきこんで意見交換会など交流の場を設けたいと早速学校に意見書を提出した。次年度以降は、様々な部署、教科の教員が参加する形で受け入れ、懇談ができるような体制をつくつていけたらと考えている。

資料

◆資料1.

韓国政府日本教職員招へいプログラム (2014年8月26日～9月1日：韓国) 実施要項

1. 背景

2000年3月、戦後の文部大臣として初めて、中曾根弘文文部大臣(当時)が訪韓し、文龍鱗(ムン・ヨンリン)韓国教育部長官(当時)との会談でなされた招請に基づき、文部科学省の協力のもと、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、2001年より韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。当初は「ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業」として、2003年からは「ACCU国際教育交流事業」として国際連合大学の委託を受け、これまで約1,700名の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年10名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価されることとなり、2005年からは、韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして参加人数を20名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008年のプログラムからは、招へい人数がさらに倍増され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

- (1) 韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
- (2) 学校および地域社会における国際理解教育(EIU)と持続発展教育(ESD)の好事例を探る。
- (3) 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
- (4) 日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。

3. 活動内容

- (1) 小・中・高・特別支援学校や教育施設訪問を通じて、国際理解教育(EIU)や持続発展教育(ESD)を含む韓国の最新の教育政策・現状の観察
- (2) 訪問先における韓国の教職員・児童生徒との交流、日本の文化やESDの紹介
- (3) 世界遺産見学やホームビジットを通じた、韓国文化の理解

4. 日程概要

2014年8月26日(火)～9月1日(月) (7日間)
※7月30日(水)に都内にて事前オリエンテーションを実施

各自参加にむけて準備		
8月26日(火)	忠清北道/江原道	<仁川到着後、地方へ出発> オリエンテーション 歓迎交流会
8月27日(水)		教育委員会へ表敬訪問 ユネスコスクールおよび教育施設訪問
8月28日(木)		韓国の教員、生徒との対話 地域遺産訪問
8月29日(金)		ホームビジット 情報共有会
8月30日(土)		
8月31日(日)	ソウル	<ソウルへ移動> 韓国の教育制度紹介 報告会、閉会式 歓送食事会
9月1日(月)	仁川(インチョン)/ 東京、大阪、福岡	出発準備 福岡、大阪、東京へ帰国

5. 参加者

下記の教職員、随行員併せて 50 名を参加者とする。

- (1) 2013-2014 韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
- (2) 上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員
- (3) 2014-2015 年韓国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
- (4) 公募により選抜された教職員
- (5) 国際連合大学、日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、および ACCU の職員

6. 参加資格

- (1) 日本国であること。
- (2) 所属する学校等から推薦を受けた初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (3) ユネスコスクール、国際理解教育(EIU)または持続発展教育(ESD)の活動に携わっている者、または高い関心を持っている者。
- (4) プログラム参加前の準備、プログラム中ならびに参加後も継続して、ESD に関連した韓国との具体的な交流の推進に寄与できること。
- (5) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (6) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。
- (7) 過去の本プログラムに参加がないこと。

7. 評価と報告

- (1) 派遣期間中
 - 評価票記入(日本語または英語で記入し、韓国ユネスコ国内委員会へ提出。)
 - 情報共有会(日本側参加者のみによる)への出席。
 - 韓国教職員を交えての報告会への出席・発表。
- (2) 帰国後
 - 所定の期日までに、各自、プログラム参加の報告を ACCU に日本語で提出する。
(ACCU による編集の後、実施報告書へ掲載予定)
 - 所定の期日までに、各グループの報告を ACCU に英語で提出する。
(ACCU から韓国ユネスコ国内委員会に送付後、韓国ユネスコ国内委員会による実施報告書へ掲載予定)

8. 旅費等諸経費

- (1) 韓国ユネスコ国内委員会が下記について負担する。
 - 往復航空運賃: 日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
 - 韓国内の移動に係る経費、宿泊、食事: 但し、公式行事のない日の夕食については参加者が日当から支出することとする。
 - 日当: 8月26日(火)から8月31日(日)の6日間分。
- (2) ACCU が下記について負担する。
 - 日本国内交通費: 事前オリエンテーション日の会場(東京)往復の交通費、出発日の空港までの交通費、および帰国日の到着空港からの国内交通費の定額(ACCU の規程に準ずる)。
 - 日本滞在費: オリエンテーション前日の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊。出発前日の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊。帰国日 9月1日の日当。
- (3) 各参加者は、下記について負担する。
 - 海外旅行損害保険: 各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
 - 上記(1)、(2)以外の諸経費
- (4) 旅券と査証について
 - 旅券(パスポート): 入国時に3ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
 - 査証(ビザ): 一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の逐次通訳を配置する。

10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 人物交流部 (担当: 米島、部長: 佐々木)
〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510
E-MAIL: yoneshima@accu.or.jp, accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆資料2◆

韓国政府日本教職員招へいプログラム
(2014年8月26日-9月1日:韓国 ソウル市、江原道、忠清北道)

プログラムのスケジュール/ Programme Schedule

グループA(江原道) 2014年8月26日-30日

Group A(Gangwon-do) 26 - 30 August 2014

1日目 /Day 1 8月26日(火) / 26 August (Tuesday)	
9:00	東京成田空港出発(OZ107) Departure from Tokyo-Narita Airport (OZ107)
11:30	仁川国際空港到着 Arrival at Incheon International Airport
13:00-14:00	昼食 /Lunch
14:00	春川へ移動 / Departure for Chuncheon
16:30	ホテル到着及びチェックイン (サンサンマダン春川 STAY) Arrival and Check-in at Sangsangmadang Chuncheon Stay
17:00-18:00	プログラムに関するオリエンテーション (サンサンマダン春川 STAY) Programme Orientation (Sangsangmadang Chuncheon Stay)
	夕食(自由) / Dinner
2日目 /Day 2 8月27日(水) / 27 August (Wednesday)	
9:10	ホテル出発 / Departure from Hotel
09:30-11:00	江原道教育庁訪問 / Visit to Gangwon-do Office of Education
11:30-16:00	大龍中学校訪問(ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Daeryong Middle School (ASPnet) (School Lunch)
16:00	ホテルへ移動 / Departure for Hotel
16:20-18:00	休憩 / Breaktime
18:00	ホテル出発 / Departure from Hotel
18:30	歓迎夕食会 / Welcome Reception
3日目 /Day 3 8月28日(木) / 28 August (Thursday)	
8:20	チェックアウト / Checkout from Hotel and departure for Inje
9:30-13:30	江原外国語高等学校訪問(ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Gangwon Foreign Language High School (ASPnet) (School Lunch)

14:50-18:30	DMZ 平和生命の丘訪問 / Visit to Korea DMZ Peace-Life Valley
19:30	ホテル到着及びチェックイン(ハヌルネリンホテル) Arrival at Haneul Nerin Hotel and Check-in
	夕食(自由) / Dinner
4 日目 /Day 4	8月 29日 (金) /29 August (Friday)
8:30	ホテル出発 / Departure from Hotel
10:00-13:30	公峴津小学校訪問(ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Gonghyeonjin Elementary School (ASPnet) (School Lunch)
14:30-18:00	雪岳山国立公園プログラム / Seorak National Park Program
18:30-20:00	夕食(束草中央市場) Dinner at the Sokcho Jungang Traditional Market
21:00	ホテル到着 / Arrival at Hotel
5 日目 /Day 5	8月 30日 (土) /30 August (Saturday)
10:30	チェックアウト & 春川へ移動 Checkout from Hotel and Departure for Chuncheon
12:00	昼食 / Lunch
14:00-15:30	グループプログラムレビュー会議 Group Programme Review Meeting
15:30	ホテル到着及びチェックイン(サンサンマダン春川 STAY), 休憩 Check-in at Sangsangmadang Chuncheon Stay and breaktime
17:00-21:30	家庭訪問 / Home Visit

グループ B (忠清北道) 2014年8月26日-30日

Group B (Chungcheongbuk-do) 26 - 30 August 2014

1 日目 /Day 1	8月 26日 (木) /26 August (Tuesday)
9:00	東京成田空港出発(OZ107) Departure from Tokyo-Narita Airport (OZ107)
11:30	仁川国際空港到着 / Arrival at Incheon International Airport
13:00-14:00	昼食 / Lunch
14:00	清州へ移動 / Departure for Cheongju
16:30	ホテル到着及びチェックイン(ラマダプラザ清州ホテル) Arrival and Check-in at Ramada Plaza Cheongju Hotel
17:00-18:00	プログラムに関するオリエンテーション(ラマダプラザ清州ホテル内カフェラマダ・ビーナスルーム)

◆資料2 .

	Programme Orientation (Venus Room, Café Ramada, Ramada Plaza Cheongju Hotel)
	夕食(自由) / Dinner
2日目 /Day 2	8月 27日 (水) /27 August (Wednesday)
8:20	ホテル出発 / Departure from Hotel
08:50-10:30	忠清北道教育庁訪問 Visit to Chungcheongbuk-do Office of Education
11:00-16:00	韓国教員大学附設月谷小学校訪問(ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Wallgok Elementary School Affiliated with KNUE (ASPnet) (School Lunch)
16:00	ホテルへ移動 / Departure for Hotel
16:50-17:50	休憩 / breaktime
17:50	ホテル出発 / Departure from Hotel
18:30	歓迎夕食会(韓国料理) Welcome Reception (Korean restaurant "Surachae")
3日目 /Day 3	8月 28日 (木) /28 August (Thursday)
9:40	チェックアウト & 学校へ移動 Checkout from Hotel and Departure for School
10:20-15:20	興徳高等学校訪問(ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Heungdeok High School (ASPnet) (School Lunch)
15:20-16:40	忠州へ移動 / Departure for Chungju
16:40-17:40	忠清北道教育庁北部英語体験センター訪問 Visit to Northern English Center
17:40-19:10	丹陽へ移動 / Departure for Danyang
19:10	ホテル到着及びチェックイン(デミヨンリゾート丹陽) Arrival at Daemyung Resort Danyang and Check-in
	夕食(自由) / Dinner
4日目 /Day 4	8月 29日 (金) /29 August (Friday)
8:30	学校へ移動 / Departure for School
9:00-13:30	佳谷小中学校(ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Gagok Elementary Middle School (ASPnet) (School Lunch)
14:00-16:00	救仁寺訪問 / Visit to Guinsa
16:40-18:30	古藪洞窟及び鳴潭三峰訪問

	Visit to Gosu Cave and Dodamsambong
18:30	ホテルへ移動 / Departure for Hotel
	夕食(自由) / Dinner
5日目 /Day 5	8月 30 日 (土) /30 August (Saturday)
8:00	チェックアウト & 清州へ移動 Checkout from Hotel and Departure for Cheongju
11:00-13:00	清州古印刷博物館訪問 /Visit to Jikji Pavilion
13:00-14:00	昼食 / Lunch
14:30	ホテル到着及びチェックイン(ラマダプラザ清州ホテル) Arrival and Check-in at Ramada Plaza Cheongju Hotel
15:30-17:00	グループプログラムレビュー会議(ラマダプラザ清州ホテル内 カフェラマダ・ビーナスルーム) Group Programme Review Meeting (Venus Room, Café Ramada, Ramada Plaza Cheongju Hotel)
17:00-21:30	家庭訪問 / Home Visit

グループ A&B (ソウル) 2014年8月31日-9月1日

Group A & B (Seoul) 31 August - 1 September 2014

6日目 /Day 6	8月 31 日 (日) /31 August (Sunday)
8:00	チェックアウト & ソウルへ移動 Checkout from Hotel and departure for Seoul
10:30	ホテル到着(セジョンホテル) & ユネスコ会館へ移動 Arrival at Sejong Hotel and Departure for UNESCO House
11:00-12:00	韓国の教育講義(ユネスコ会館 11階ユネスコホール) Lecture on Korean Education (UNESCO Hall, 11F, UNESCO House)
12:00-12:30	韓国 ESD 及び ASPnet についての紹介 Introduction of ESD & ASPnet in Korea
12:50-13:50	歓送昼食会(ソウルロイヤルホテル 2階ロイヤルボールルーム) Farewell Luncheon (Royal Ballroom, 2F, Seoul Royal Hotel)
14:10-16:30	報告会及び閉会式(ユネスコ会館 11階ユネスコホール) Debriefing Session & Closing Session (UNESCO Hall, 11F, UNESCO House)
16:50	ホテルチェックイン(セジョンホテル) Check-in at Hotel (Sejong Hotel)

◆資料2 .

7日目 /Day 7	9月1日（月） /1 September (Monday)
	帰国準備 / Preparation for Return
11:00	チェックアウト & 仁川国際空港へ移動 Check-out from Hotel and Departure for Incheon International Airport
15:00-16:40	大阪－関西行き(OZ114) / 大阪到着 Departure from Incheon for Osaka-Kansai (OZ114) / Arrival at Osaka-Kansai Airport
15:10-17:30	東京－成田行き(OZ106) / 東京到着 Departure from Incheon for Tokyo-Narita (OZ106) / Arrival at Tokyo-Narita Airport

◆資料3.

2013-2014年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
参加者リスト

<Aグループ>

1. 参加教職員(23名)

★ 団長 : A-23 大津和子(OTSU Kazuko)
 ☆グループ長: A-11 武田國宏(TAKEDA Kunihiro)

A-1	池見 繁	IKEMI	Shigeru	奈良市立都跡小学校	教諭
A-2	石原 康代	ISHIHARA	Yasuyo	香川県立観音寺中央高等学校	教諭
A-3	大橋 佑基	OHASHI	Yuki	稻城市立稻城第二小学校	主任教諭
A-4	樋木 千枝	KAYAKI	Chie	気仙沼市立新城小学校	教諭
A-5	川西 嘉之	KAWANISHI	Yoshiyuki	富山国際大学付属高等学校	教諭
A-6	河邊 友美	KAWABE	Tomomi	岐阜聖徳学園高等学校	教諭
A-7	菊池 和子	KIKUCHI	Kazuko	葛飾区立双葉中学校	主任教諭
A-8	菊本 大樹	KIKUMOTO	Hiroki	寝屋川市立第十中学校	教諭
A-9	合田 明典	GOHDA	Akinori	愛媛県立三島高等学校	教諭
A-10	菅沼 祐子	SUGANUMA	Yuko	清心中学校・清心女子高等学校	教諭
☆A-11	武田 國宏	TAKEDA	Kunihiro	上板町立神宅小学校	副校長
A-12	田中 麻子	TANAKA	Asako	立教新座中学校高等学校	教諭
A-13	辻本 和孝	TSUJIMOTO	Kazunori	橋本市立橋本小学校	教諭
A-14	中出 安彦	NAKADE	Yasuhiko	小松市立芦城小学校	主幹教諭
A-15	西嶋 淳	NISHIJIMA	Atsushi	和歌山県教育庁学校教育局学校指導課	指導主事
A-16	林 留美子	HAYASHI	Rumiko	千葉県立桜が丘特別支援学校	教諭
A-17	久田 麻衣子	HISADA	Maiko	金沢市立小将町中学校特学分校	教諭
A-18	広木 敬子	HIROKI	Keiko	横浜市立永田台小学校	主幹教諭
A-19	細野 紀子	HOSONO	Noriko	渋谷教育学園幕張中学高等学校	教諭
A-20	宗像 洋	MUNAKATA	Hiroshi	八千代市立大和田南小学校	教諭
A-21	森 務	MORI	Tsutomu	桜美林中学校	教諭
A-22	吉岡 大輔	YOSHIOKA	Daisuke	東京都立大島高等学校	教諭
★A-23	大津 和子	OTSU	Kazuko	北海道教育大学	副学長

2. 文部科学省同行(1名)

A-24	森 祐介	MORI	Yusuke	文部科学省	大臣官房国際課 企画調査係長・調査係長
------	------	------	--------	-------	------------------------

3. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

A-25	米島 百合子	YONESHIMA	Yuriko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部 主任
------	--------	-----------	--------	----------------------	----------

**2013–2014年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
参加者リスト**

<Bグループ>

1. 参加教職員(22名)

☆グループ長:B-17 松山武彦(MATSUYAMA Takehiko)

B-1	荒平 豊	ARAHIRA	Yutaka	奈良市立一条高等学校	教諭
B-2	香川 敬子	KAGAWA	Keiko	徳島県立城西高等学校	教諭
B-3	菊本 慶子	KIKUMOTO	Keiko	大阪市立茨田北小学校	教諭
B-4	木村 真由美	KIMURA	Mayumi	和歌山県田辺市教育委員会	指導主事
B-5	後藤 たき江	GOTO	Takie	金沢市立三馬小学校	教諭
B-6	佐光 美穂	SAKO	Miho	名古屋大学教育学部附属高等学校	教諭
B-7	高井 優子	TAKAI	Yuko	河内長野市立美加の台小学校	教諭
B-8	高橋 一勝	TAKAHASHI	Kazuyoshi	千葉県立市川昂高等学校	教諭
B-9	田中 幹子	TANAKA	Motoko	奈良市教育委員会事務局学校教育課いじめ対策生徒指導室	指導主事
B-10	千葉 崇	CHIBA	Takashi	福島県立安達高等学校	教諭
B-11	塚本 和敏	TSUKAMOTO	Kazutoshi	小松市立高等学校	教諭
B-12	中口 健太郎	NAKAGUCHI	Kentaro	金沢市立花園小学校	教諭
B-13	永山 裕基	NAGAYAMA	Yuki	八千代市立阿蘇小学校	教諭
B-14	西浦 博之	NISHIURA	Hiroyuki	和歌山県立古佐田丘中学校・橋本高等学校	教諭
B-15	原田 海希	HARADA	Hiroki	和歌山県立星林高等学校	教諭
B-16	松倉 紗野香	MATSUKURA	Sayaka	上尾市立東中学校	教諭
☆B-17	松山 武彦	MATSUYAMA	Takehiko	橋本市立高野口小学校	教頭
B-18	南 哲太	MINAMI	Tetsuta	金沢市立森山町小学校	教諭
B-19	村上 峻	MURAKAMI	Shun	気仙沼市立月立小学校	教諭
B-20	本川 梨英	MOTOKAWA	Rie	市川中学校・市川高等学校	教諭
B-21	板橋 奈緒	ITABASHI	Nao	八千代市教育委員会	指導主事
B-22	八木 絵美	YAGI	Emi	小松市立板津中学校	教諭

2. 文部科学省同行(1名)

B-23	中村 有希	NAKAMURA	Yuki	文部科学省	初等中等教育局 初等中等教育企画課専門職
------	-------	----------	------	-------	-------------------------

3. 国際連合大学同行(1名)

B-24	岩佐 敬昭	IWASA	Takaaki	国際連合大学	大学院事務局長
------	-------	-------	---------	--------	---------

4. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

B-25	有薗 佳子	ARIZONO	Yoshiko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部 事務専門員
------	-------	---------	---------	----------------------	-------------

◆資料4 .

2013-2014年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム
関係機関連絡先
(2014年8月現在)

1. 全体プログラム

◆ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO
政策事業本部教育チーム Education Team, Division of Policy & Programmes

住所:ソウル特別市中区明洞通り(ユネスコ通り)26 〒100-810
Address: 26 Myeongdong-gil(UNESCO Road), Jung-gu, Seoul 100-810 Korea
URL: <http://www.unesco.or.kr/>
Tel: 82(0)2 6958 4157 / Fax: 82(0)2 6958 4254
E-Mail : unescoteacher@unesco.or.kr

閔東石(ミン・ドンソク) MIN Dong-seok
事務総長
Secretary-General

林賢默(イム・ヒョンムク) LIM Hyun-Mook
事業部部長
Assistant Secretary-General

趙佑眞(チョ・ウジン) CHO Woo-jin
教育チーム長
Director / Division of Education

鄭素如(チョン・ソヨ) JUNG Soyeo
教育チーム(担当者)
Programme Officer

洪輔江(ホン・ボガヌ) HONG Bogang
教育チーム(担当者)
Senior Programme Officer

宋知恩(ソン・ジウン) SONG Jieun
教育チーム(担当者)
Programme Officer

朱慈恵(チュ・ジャヘ) JU Jahyea
教育チーム
Programme Assistant

◆教育部/Ministry of Education

国際協力官国際教育協力担当官
International Education Cooperation Division, International Cooperation Bureau

住所:ソウル特別市鍾路区世宗大路 209 政府中央庁舎 教育部 〒110-760
Address: Central Government Complex, 209 Sejongdae-ro, Jongno-gu, Seoul 110-760 Korea
URL: <http://www.moe.go.kr>
Tel: 82(0)2 6222 6060 / Fax: 82(0)2 2100 6133

2. グループプログラム受入れ教育庁

◆Group A 江原道教育厅/Gangwon-do Office of Education

住所:江原道春川市嶺西路 2854 〒200-713
Address: 2854, Yeongseo-ro, ChunCheon-si, Gangwon-do, 200-713, Korea
URL: <http://www.gwe.go.kr>
Tel: 82(0)33 258 5524 / Fax: 82(0)33 258 5519

教育長/Superintendent : 閔丙熙 (ミン・ビヨンヒ) MIN Byeong-hee
プログラム担当/Programme Coordinator : 崔日豪 (チエ・イルホ) CHOI Ilho

◆Group B 忠清北道教育厅/ Chungcheongbuk-do Office of Education

住所:忠清北道清州市興徳区清南路 1929 〒361-703
Address: 1929 Cheongnam-ro, Heungdeok-gu, Cheongju, Chungbuk, 361-703 Korea
URL:
Tel: 82-(0)43-290-2000 / Fax: 82-(0)43-290-2757

教育長/Superintendent: 金炳佑 (キム・ビヨンウ) KIM Byeong woo
プログラム担当/Programme Coordinator: 朴卿玉 (パク・ギョンオク) PARK Gyeong Ok

3. 受入れ校

Group A

◆大龍中学校/ Daeryong Middle school

住所:江原道春川市退溪農工路 65 〒250-2022
 Address: 65 Tyegyenonggongro Chuncheon-si, -Gangwon-do, 250-2022, Korea a
 Tel: 82-(033)-250-2022/Fax: 82-(033)-262-2050

校長/Principal: 金永一(キム・ヨンイル) Mr. Kim Yeong -Il
 プログラム担当/Programme Coordinator: 金冥恩(キム・ギョンウン) Mr. KIM Kyeongeun

◆江原外國語高等学校/ Gangwon Foreign Language High school

住所:江原道楊口郡楊口邑金剛山路 437-12 〒255-801
 Address: 437-12, Geumgangsan-ro, Yanggu-eup, Yanggu-gun, Gangwon-do, 255-801, Korea
 Tel: 82-(033)-481-0500/Fax: 82-(033)-480-8049

校長/Principal: 李錫鐘(イ・ソクチョン) Mr. YI seok jong
 プログラム担当/Programme Coordinator: 金大光(キム・デグアン) Mr. KIM dae kwang

◆公峴津小学校/ Gonghyeonjin Elementary School

住所:江原道高城郡竹旺面公峴津韓屋道 49 〒219-821
 Address: 49 hanokgil, jookwnagmyeon, goseunggun, kangwondo, 219-821, Korea
 Tel: 82-(033)-631-3538/Fax: 82-(033)-632-0165

校長/Principal: 金南鮮(キム・ナムソン) Mr. KIM Nam sun
 プログラム担当/Programme Coordinator: 尹泰佑(ユン・テウ) Mr. YOON Tae Woo

Group B

◆韓国教員大学校附設月谷小学校/ Wallgok Elementary School Affiliated with KNUE

住所:忠北清州市興德區江內面街路樹路 562 〒363-892
 Address: 562, Garosu-ro, Gangnae-myeon, Heungdeok-gu, Cheongju-si, Chungcheongbuk-do, 363-892, Korea
 Tel: 82-(043)-232-2600/Fax: 82-(043)-231-4231

校長/Principal : 韓基煥(ハン・ギファン) Mr. HAN Ki Hwan
 プログラム担当/Programme Coordinator : 車成姫(チャ・ソンヒ) Ms. CHA Seong Hui

◆興徳高等学校/ Heungdeok High school

住所:忠清北道清州市興徳區福臺 1 洞 2457 (繪岸路 9)
 Address: 2457, 9-Jungan-ro, Bokdae-dong, Heungdeok-gu, Cheongju, Chungcheongbuk-do, Korea
 Tel: 82-(043)236-9061/Fax: 82-(043)236-9068

校長/Principal : 金昌浩(キム・チャンホ) Mr. KIM Chang Ho
 プログラム担当/Programme Coordinator : 鄭智暉(チョン・ジファン) Mr. JEONG Jee Hwang

◆佳谷小中学校/ Gagok Elementary Middle School

住所:忠清北道丹陽郡佳谷面南漢江路 548
 Address: 548 Namhangang-ro gagok-myun Danyang-gun Chung-buk-do, Korea
 Tel: 82-(0)43-422-8009/Fax: 82-(0)43-422-5016

校長/Principal: 安商冕(アン・サンミョン) Mr. AN Sang-myung
 プログラム担当/Programme Coordinator: 任勳(イム・フン) Mr. IM Hun

◆資料5 .

過去のプログラム実績

実施期間	訪問地	訪問人数
2003年3月16日～20日	ソウル、慶州、釜山	11名
2004年6月13日～18日	ソウル、慶州、釜山	16名
2005年9月5日～13日	ソウル、慶州、釜山	24名
2006年6月11日～18日	ソウル、光州、釜山	25名
2007年6月10日～17日	ソウル、大田、清州、慶州、釜山	29名
2008年8月19日～28日	ソウル、慶州、釜山	52名
2009年8月26日～9月4日	ソウル、統営、安東、釜山	53名
2010年8月25日～9月3日	ソウル、原州、清州、釜山	53名
2011年8月26日～9月4日	ソウル、昌原、順天、慶州、釜山	53名
2012年8月29日～9月7日	ソウル、水原、大田、論山、公州、釜山	53名
2013年8月22日～8月29日	ソウル、清州、春川、原州	50名
2014年8月26日～9月1日	ソウル、春川、楊口、高城、清州、忠州、丹陽	50名
		計 469名

●国際連合大学 2013-2014 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

2015 年 3 月

編集・発行

国際連合大学

〒150-8925

東京都渋谷区神宮前 5-53-70

URL <http://jp.unu.edu/>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [200]

©2015 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

